

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書

第二四一集

小井川遺跡Ⅱ

二〇〇七年三

小井川遺跡Ⅱ

—新山梨環状道路建設工事に伴う発掘調査報告書—

2007.3

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書

山梨県教育委員会
山梨県土木部

小井川遺跡Ⅱ

—新山梨環状道路建設工事に伴う発掘調査報告書—

2007.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

本書は、山梨県土木部による新環状道路建設工事に先立って、山梨県埋蔵文化財センターが平成16年度に発掘調査を実施した小井川遺跡の発掘調査結果であります。本遺跡の所在する中央市（旧・田富町）は甲府盆地の南部、釜無川と笛吹川の合流点に位置し、隣接する中央市（旧・玉穂町）、昭和町ともに県下で最も平坦部の多い低地平野部で、良質な水に恵まれた農業が盛んな地域であります。近年は、甲府市街地のベッドタウンとして宅地開発等も進み人口急増地域であります。

本遺跡は、新環状道路建設のため、法星院墓地の移転が行われ、その後、当センターによる試掘調査によって、木棺、桶棺等が検出されました。

この経過から地域の文化財保護の為、土木部と教育委員会が協議を行い、調査体制を整え発掘調査を実施したところ、明治末から昭和初期にかけての木棺墓を主体とした上層面、さらに明治前半から後半にかけての桶棺墓を主体とした下層面の、時間的に前後する二枚の墓群117基が検出され、法星院南側・墓地の全容が明らかになりました。

埋蔵文化財は、地域の歴史的事象を知る上で、欠かす事のできない文化遺産であります。今回の調査が文化財に対する認識と理解を深める為に、また教育及び学術研究の分野においても役立つ事を願うものです。

末筆ではありますが、本調査におきましては様々なご協力をいただきました関係各位、並びに発掘作業・整理作業に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

2007年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　末木　健

例言・凡例

- 1 本書は平成16年度に実施した中央市布施（旧・中巨摩郡田富町布施）に所在する、小井川遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 本調査は、新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘を山梨県教育委員会が県土木部による委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本報告に関わる出土品及び写真、記録図面等は一括して、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 4 自然科学分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。
- 5 遺物の写真撮影は、トータル・アイの清水守氏に委託した。
- 6 本書の編集及び執筆は、小林広和、猪股一弘が行った。
- 7 遺構実測図は、山本三重子、河野逸広、神沢正孝、石川千年、真道みゆき、甘利千恵子、早川みどり、石坂恵理、保坂秋蘭、金子春枝、渡辺旭光、近藤良文、石川久子が行い、遺物実測図、及び本報告に関わるトレースは新津多恵、清水真弓が行った。
- 8 発掘調査及び整理作業において、次の機関、各氏によりご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。

中央市教育委員会（旧・田富町教育委員会）

法星院住職 中村忠宗氏

内藤和久氏

今村直樹氏

- 9 本報告書の挿図等に関する指示は以下のとおりである。遺構・遺物の挿図縮尺は基本的に以下のとおりであるが、資料の大きさにより便宜、縮尺を変化させてある。

小井川遺跡 1次・2次全体図 $\frac{1}{20}$ 小井川遺跡 2次全体図 $\frac{1}{10}$

遺跡図版 $\frac{1}{5}$ 、 $\frac{1}{2}$ 古銭 \pm

目 次

序文

例言・凡例

第1章 発掘調査の経緯と組織	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 発掘調査の組織	1
第2章 遺跡の自然環境と歴史的環境	2
第1節 自然環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 発掘調査の成果	5
第1節 遺跡の概要	5
第2節 基本層序	6
第3節 調査結果	6
第1項 墓坑の年代	6
第2項 墓域の構造	8
まとめ	11
付編 小井川遺跡の自然科学的分析	41

挿図目次

第1図	本遺跡の位置と周辺遺跡の分布図	3
第2図	基本層序	6
第3図	小井川遺跡 1次・2次全体図	16
第4図	小井川遺跡 2次全体図（上層）	17
第5図	小井川遺跡 2次全体図（下層）	18
第6図	1～8号墓	19
第7図	9～16号墓	20
第8図	17～28号墓	21
第9図	29～42号墓	22
第10図	43～56号墓	23
第11図	57～71号墓	24
第12図	72～88号墓	25
第13図	89～103, 111, 115号墓	26
第14図	104～110, 112～114, 117号墓	27
第15図	1～10号墓・副葬品	28
第16図	11～15号墓・副葬品	29
第17図	15～27号墓・副葬品	30
第18図	28～41号墓・副葬品	31
第19図	43～54号墓・副葬品	32
第20図	55～71号墓・副葬品	33
第21図	73～88号墓・副葬品	34
第22図	89～104号・副葬品	35
第23図	104, 110号・副葬品	36
第24図	一括・出土遺物	37
第25図	一括・出土遺物及出土品	38
第26図	7～109号墓・副葬品	39
第27図	112～117号墓・副葬品、溝・表探一括	40

図版目次

- 図版1 遺跡全景（上層）南西・西方向から
図版2 遺跡全景（下層）南西・西方向から
図版3 20・22・23・24・30・37・38・41号墓
図版4 46・50・53・54・55・56・57号墓・58号墓
図版5 59・60・61・62・64・65・67・68・71号墓
図版6 73・74・75・76・77・78・79・81号墓
図版7 82・84・86・87・88・89・90・91号墓
図版8 93・95・96・97・98・99・100・101号墓
図版9 102・103・104・105・106・107・108・109号墓
図版10 109・111・114・102・115号墓
図版11 1・2・3号, 7・8号, 9・10号, 11・12・13号, 14号, 15号, 17・19・20号副葬品
図版12 21・22・23・25号, 27号, 28・31・32号, 35号, 37号, 36・38号, 39号, 40・41号副葬品
図版13 43号, 49・52号, 54号, 55・57号, 58・59号, 63号, 64号, 65号副葬品
図版14 68・69号, 71号, 73号, 75号, 76・77・78号, 79号, 80号, 82号副葬品
図版15 83・84・86号, 87号, 88号, 89号, 90・91号, 92・93号, 34・94・96号, 97号副葬品
図版16 98号, 102・103号, 104号, 105・107・110号副葬品
図版17 14号墓北側出土一括遺物
図版18 27・73号副葬品, 塔婆, 墓石, 48号墓副葬品
図版19 副葬品・古錢

第1章 発掘調査の経緯と組織

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査にかかる地域は山梨県土木部による新環状道路建設の発表後、山梨県土木部と山梨県教育委員会学術文化財課が遺跡保護の目的による協議を行い、道路建設に先立ち遺跡確認調査を実施することとなり、山梨県埋蔵文化財センターに、遺跡確認・試掘調査を依頼した。

これを受け、試掘調査は平成16年3月16日から3月19日の間埋蔵文化財センターにおいて実施された。対象面積は、5,780m²でトレチで19本が設定された。この内、法星院墓域予定地は1,000m²であったが、さらに墓域範囲の特定作業がなされて円形、方形の木棺墓が検出された。以上の経過を通して今回の発掘地点（旧田富町布施地内）法星院墓地が平成16年度発掘予定地区として絞り込まれた。

（経緯及び法的な手続き等の主な概略）

平成16年3月16日～平成17年3月19日 遺跡確認の為の試掘調査

平成16年12月6日 文化財保護法第98条による発掘調査を山梨県教育委員会に提出

平成16年12月15日 人骨発見・南甲府警察署への通報

平成17年3月24日 埋蔵文化財の発見通知を南甲府警察署に提出

平成17年3月25日 遺跡発掘調査・整理作業実績報告の提出

第2節 調査の方法

調査は、新環状道路工事が施工される幅約17m、長さ40mの範囲の内、試掘結果に基づき、法星院墓跡に対して長さ17m、幅20mに調査区を設定後、埋土約1mを重機により取り除き、引き続いて遺構確認面直上層から人力による掘下げを行い、遺構確認調査を行った。確認後は、遺構内を移植小手、竹籠等により掘り進め、精査に努めた。

遺構配置図等の記録類は、国家座標に基づいて5m方眼のグリッドを調査区全体に設け、それを基準とする簡易やり方で行い、遺物の取り上げの方法も、同じく各グリッドを基準とする簡易やり方で、全点を平面、垂直測量により取り上げた。各測点杭の名称は平成16年度に引き続き、東西方向に東から1・2・3…、南北方向に北からZ・A・B・C…と番号を付け、南西の角度を起点としてそのグリッドを、Z-8G等と呼称する。また、調査範囲を囲む座標軸は以下のとおりである。

Z - 8 G	X	-43785.0	Y	2230.0
Z - 11 G	X	-43785.0	Y	2215.0
C - 8 G	X	-43800.0	Y	2230.0
C - 11 G	X	-43800.0	Y	2215.0

第3節 発掘調査の組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 副主幹文化財主事 小林広和 主査文化財主事 猪股一弘

発掘作業員 今村貞夫、時田薰、河野逸広、齊藤重信、山本三重子、真道みゆき、石川久子、神沢正孝

望月忠、加藤秀代、金丸亨、石川千年、甘利千恵子、早川みどり、石坂恵理、保坂秋蘭

金子春枝、近藤良文、加々美昌友、石井弘文、渡辺旭光

第2章 遺跡の自然環境と歴史的環境

第1節 自然環境

本遺跡は、中央市（旧田富町）の西側を北から南に向かって流れる釜無川と、町の南側を東から西に向かって流れる笛吹川の合流点付近の三角地帯に存在し、河川の堆積作用によって形成された沖積地、いわゆる氾濫源地帯のほぼ中央に位置する。

遺跡の存在する旧・田富町周辺での最も高い標高値を示す地点では、旧町北部の釜無川左岸付近において約265mを示しそれが最高値となる。また、本地域では南下するにあたり次第に高度を下げる地形となっているが、最低値においては約245mで比高差は僅か20m程度の数値である（田富町誌・1981）。

遺跡は、上記したように釜無川扇状地の南西端部に占地して、現状はほぼ平坦地形の標高252mに立地する。このような環境下にある本地域の地形については、特に微高地等の形成要因に限ってみれば、東南側を流れる笛吹川の影響力よりも釜無川の流路による作用が顕著に現れているものと想定される。

この点については、本遺跡の乗る釜無川扇状地の地形環境問題に焦点をあて論を展開された高木勇夫（1989）によるところが大きい。

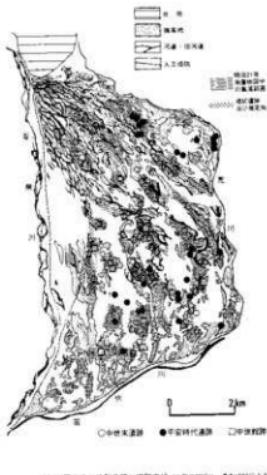
そこでは釜無川扇状地の位置付を、甲府盆地に発達する扇状地の中では、扇状地面積及び岩屑供給面積さらに高度差が最大で、しかも平均傾斜が最も緩やかな扇状地と規定し、さらに釜無川扇状地の微地形分類図を作成している（右図）。この微地形図から高木氏は、竜王赤坂台を基点として微高地の扇頂から扇尖部までの様相については長軸NW-SE方向を指針し、分布密度が濃く、旧河道が網状流跡を示すとした。一方扇尖から扇端地域での微高地は、長軸がN-SからNE-SW方向を指針、分布密度が少なく、網状流路を示さないことを指摘し、さらに南半部の氾濫源にN-S方向に形成された微高地については、釜無川、荒川、笛吹川の溢流堆積によって形成された自然堤防と考え、その背後に広がる低地空間については氾濫盆地としている。

第2節 歴史的環境

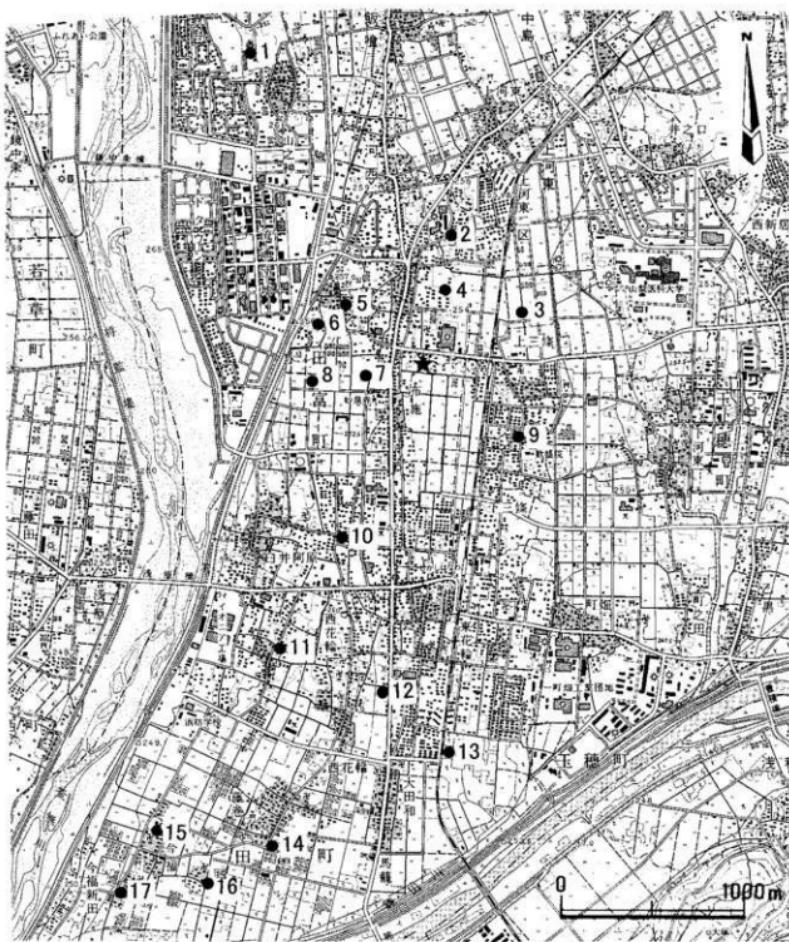
莊園関連の古記録に記載されている、小井川、布施にあたると思われる本遺跡周辺は、本来ならば考古学的見地と文献からの判読との二手法により、歴史環境が類推可能な地であるといえる。しかし、遺跡の発見及び認知状況については、前記したように釜無川の氾濫作用による大量な土砂により地中深く埋設して発見し難いことに加え、地形的制約から雨期の際には必然的にかつ頻繁に発生する水害等を被る地域であったことや、古来からの建築物が地表に残存しない現状から中世以前は人間の活動に適さない地域と考えられ遺跡の存在は皆無とされ近年にまで至ってきた。

また、「中右記」元永2（1119）の記載に布施荘の名が初見されて以後、布施・小井川・はなは等の地名が平安末から室町の古記録に散見され、周辺地域に莊園の存在を示唆するものとなっていたが、遺跡・遺物と文献とを結ぶ資料が得られていないのが現状であった。

このような状況下で実施された町内遺跡分布調査では、上記に関連すると思われる中世遺跡、戦国屋敷を含む複数の遺跡が検出され、かつ認知され多大な成果を上げるに至った。



庄園川附近地の地形分類と遺跡分布（地図を参考に、高木勇夫による）



第1図 本遺跡の位置と周辺遺跡分布図 ★本遺跡

- | | | | |
|-----------|-------------|--------------|--------------|
| 1. 上平新田遺跡 | 2. 布施村北遺跡 | 3. 三宮司遺跡 | 4. 神田遺跡 |
| 5. 冷久保遺跡 | 6. 三井右近丞屋敷跡 | 7. 小井川遺跡 | 8. 白井河原上河原遺跡 |
| 9. 竹之花遺跡 | 10. 古寺家遺跡 | 11. 西花輪村北村遺跡 | 12. 西花輪村東遺跡 |
| 13. 整理地遺跡 | 14. 延里遺跡 | 15. 今福村東遺跡 | 16. 沖村遺跡 |
| 17. 中道下遺跡 | | | |

また、このことにより周辺の歴史地理的環境を考える上での基礎的資料すなわち土器類等の遺物を得ることとなり、併せて地下に埋没する歴史現象の一端を推知することが可能となった。

以下に、この分布調査によって明らかにされた遺跡群の内容をもとに、本遺跡周辺における歴史環境の概略を記することとする。

本来、洪積世台地に立地する旧石器時代の遺跡は前記したように地形的条件からその存在は望めない。

縄文時代においても、僅かな期待をもった希望的観測からすれば、埋没する微高地にその存在の可能性が残されるわけであるが、釜無川氾濫源左岸に立地する低地部では、頻繁に繰り返された洪水とともに運搬された大量な土砂の堆積作用により覆われて、深度が大きく計測される地点に遺跡の存在を推定されるに至っている。

したがって地表にその一端（遺物）が出現する可能性は極めて低いものとなって、このことは遺跡の有無を決定づける端緒となる機会をもとじこめている状況となっている。

上記の要因は、遺跡確認作業における初期段階に重要な影響を及ぼしていることを示唆しており、今日の段階では本遺跡周辺地域における上記時代での存在有無を示す遺物の発見は皆無であり空白地帯となっているのが現状である。

上記の過酷な自然現象とその制約のもとに成生した、沖積地に乗る周辺地域の分布調査の結果では、沖村（16）で表面採集された弥生時代の所産と考えられる高坏の破片が最古段階となっている。併せて地形環境等の考察から前記時代における遺跡空間の存在が確認され認知されるに至った。

統いて、古墳時代前期では、上新手新田（1）、白井河原上河（8）、整理地（13）、延里（14）、西花輪村北・村（11）で土器片が確認されている。いずれも墳丘等が認められる状況ではなく、土器片のみの発見という状況からは、周辺の遺跡構造のあり方から見て（宮沢2004）、高塚を有しない小規模な円墳等を取り込んだ集落跡が想定されるところである。またこれら遺跡群の内白井河原上河原、西花輪村北・村遺跡の3遺跡では、やはり土器採集結果からではあるが古代からの継続性が指摘され長期間にわたる土地利用が想定されている。

古墳時代後期では、平成16年度における当センターによる試掘調査、及び内藤和久氏による小井川遺跡東端地点の表面採集からは6世紀後半に属する赤彩の坏が確認されている。これを受けてさらに包含層の確認の為の再調査が行なわれた。その結果、地表下70cm下の箇所に10~20cm前後の包含層が認められたが、包含層がやや不安定で薄い等など総合的判断から発掘調査には至らなかった経緯がある地点もある。

周辺には後期古墳時代の象徵ともいえる横穴式古墳が現状及び過去においても、その存在を証明する痕跡や伝承等が皆無であることから、それは想定外とされるが、磨滅されない赤彩土器の検出は、やはり集落間遺跡の存在が当地点周辺に想定される。

平安時代では今までのところ、遺物の採集はなく遺跡の確認はされないが、本遺跡周辺の地名は、安元2年（1176）安樂寺院等荘園録案に小井河莊として小井川が、元永2年（1119）中右記に布施莊として布施が現れるところから、本遺跡の近在に莊園の推定地を想定している（秋山：2003）。

中世関連遺跡では布施村北遺跡 神田遺跡 冷久保遺跡 小井川遺跡 三井右近彌屋敷跡の5遺跡が確認されているが、中でも布施地内に存在する小井川地内には、新山梨環状道路建設に先立って遺跡確認の為の2004年度試掘調査が実施され、中世様式を呈する五輪塔の部材が確認されていて、それらの分布範囲の拡大が示唆され、同時に遺跡空間の存在が期待されている。

近世・江戸後期に至っては古寺家、今福、中道下、小井川遺跡等が確認されている。特に、今回の調査地区と東側に隣接する小井川遺跡（第1次）では、江戸時代後期に存在したという無住職寺院・慶勝院に付属する墓地跡とその付属施設と考えられる、断面V字の大型溝が検出された。

慶勝院墓地は明治19年以降には今回の発掘地点に移動されていることから、同年以前の慶勝院墓地の一端が明らかになった事実は多大な成果といえよう。しかしその他遺構の少ない由縁はこの発掘地点が、農作業に伴う開墾、住宅開発による造成が急激に行なわれていて地形、地層が大きく変容した為で、原位置を保つ遺物の出土区域はV字溝の覆土中に限定され、唯一の遺構としての検出状況は、棺の上部が消失し、桶の底板を残して上部は攪乱を受けていた。

この他、近世においては、確認されている上記遺跡の他に、古文献、古地図をもとに想定された古代地割、条理制跡が指摘され、今後の調査が期待されている。

参考文献

田富町誌編纂委員会	1931	田富町誌
高木勇夫	1989	条理地域の自然地域
田富町教育委員会	1995	町内遺跡詳細分布調査報告書
秋山敬	2003	甲斐の莊園
宮沢公夫	2004	寺部村附第6遺跡 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第2集

第3章 発掘調査の成果

第1節 遺跡の概要

今回の発掘調査対象地点は、明治19年7月21日・無住職であった慶昌院檀家（注1）が本寺である歓盛院に葬式を含む年中行事等を依頼していたが、その都度事に依頼するのは互いに労力と時間とが負担となる為、慶勝院檀家37名は、歓盛院に対して隣接地域に存在する同寺の末寺・法星院との統合を申し出た（注2）と云う経緯を通して法星院により設置された箇所である。また、元慶昌院檀家の系統を引く墓群は環状道路建設の発表に伴い移設されたが、その中に慶勝院の住職の墓も含まれていたそうである（注3）。繰り返すが、墓群の移転後行われた試掘調査により木棺、桶棺群が検出された。その状況からは、上記の試掘成果を含め江戸期までさかのぼる墓群と推定され、かくして調査体制が整えられたのである。

調査の結果、南北18m×東西14mの範囲の中に、上・下2層にわたり墓群がコンパクトにまとまって区画され埋葬されているのが確認された。しかしZ-11Gの北西部での第29号、52号の木棺の出土状況のありかたからは調査区域外に僅かとは思われるが範囲拡大の可能性も示唆された。

下層面は木棺墓の調査を行った後、精査作業を進める過程で検出されたものである。埋葬年代は、墓域がコンパクトに整然とまとめられている状況から考えるに、上記で触れた明治19年の申し出、以降の埋葬行為が主体を占めるものと考えられる。

その内容は、桶棺53基を主体とし木棺2基を含む構成で確認された。桶棺の上端が残存する例は53号1例のみであり、それ以外ではレベルの差異は認められるものの、大部分の桶棺の上端から上半部位は上層の埋葬に伴う土坑掘削の際に、銳利ではない掘削道具により力なく削り取られた状態で検出された。墓地の検出範囲は、北側では木棺墓113・桶棺墓63号がZラインを1m超え、桶棺墓108・62号がZライン上に乗る。また、東側では、北よりの桶棺墓103号がA-9 Gの東北隅に、西側ではB-11Gの11ライン上に乗る。さらに南側では桶棺墓66号がC-11Gの東北よりに検出された。

墓域の中には、広場あるいは墓道として推定可能な連続する空白部が認められる。墓道は現存した墓域入口部を起点として導入路を設け、そこから北に延びる3本の墓道を捉えることが可能と考える。さらに家族

単位と思われる墓割としてのグルーピングも可能であり10グループが認知された。

上層面においては、明治末期～大正期にかけて砂地に掘削・埋葬されたもので、木棺39基、方形木棺7基、桶棺11基が確認された。木棺の方向軸の内訳は39基の内、南北方向25基、東西方向14基である。重複関係を示す例で軸が対抗するものも認められたが、基本的には重複関係では同方向の関係が圧倒的に多く把握された。このことは、おそらく墓域の中における家族単位の小区画すなわち墓割りが確定され、そのことが起因となって派生する、土地利用の規制あるいは狭い土地の中での追善供養を行うという意識が反映されたものと解釈される。

墓域の拡張の動きは、旧墓域の南面から東面にかけて顕著であり、北東隅の一角にもその痕跡が認められる。すなわち南面から東面においては、層位の位置関係から観た下層・桶棺墓66号から発展する一群と東西に並行する42・43号、南北方向の40号、4・5・6号、1・2号、7・8号、10号である。また、北東隅に認められた27・28・29号は、Z G ラインより大きさはみ出でていて、墓域より突出して存在しているのが認められた。この事からは、66号から派生する一群を除いた墓群のあり方から観て、明治19年の申し入れ関係者以外の新規参入者の性格が与えられる。

さらに木棺39基、方形木棺7基等の木棺様式の他に桶棺11基の桶棺様式が含まれている事実であるが、明治から大正への移行過程における桶棺様式の残存として捉えるか、あるいは若干の時間差に起因を求める結果として把握されるべきものであるのか、今後の検討課題とされるところである。

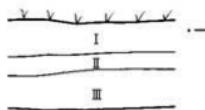
(注1) 慶勝院は、下三条村歓盛院第八世隆宝賢玄大和尚により寛永六年に開山され、法星院南方約50mの所にあって、墓地は現存しているとされている。(田富町誌：昭和56年・P1066～P1067所収)

(注2) 法星院住職・中村忠宗氏より教示。また、当時の要望書には37名の署名が入った状態で保管されている。

(注3) 慶勝院の檀家の為に新たに設置されたものか、従来の墓地に追加的に増設されたものかは、明確さはかかるが、調査の結果からは、江戸期の墓は少なく明治以降の墓が多い事から墓域の新設の可能性が強いものと考えられる。

第2節 基本層序

本地点は墓地となっている為、埋葬に伴う掘り起こし作業が一般の土地と比較して頻繁に行われている。その結果、この小区画内における自然堆積層が認められる箇所は希少であるが、僅かに西壁よりに看取された層位を図示する。遺跡は、釜無川の氾濫源左岸に位置する為、土層は、水性堆積から成っている



I 黄灰色 0.5mm～1.0cmの礫と鉄分を含む。
II 黒灰色 微砂を含む。
III 黄灰色 灰色混合土。微砂を含む。

第2図 基本層序 (1/40)

第3節 調査結果

第1項 墓坑の年代

調査地点は法星院墓地であるが、その東に隣接する地域には江戸末期まで存在したと云われる、慶勝院寺の寺域が想定される箇所であった。2004年度に行った調査では、寺本体こそ確認されなかったが、それに伴うと考えられる墓地の一部と寺城東端部と考えられる位置には、ほぼ真北に掘削された、幅4m、深さ1mの断面V字状溝が確認されるに至った。溝内からは江戸後期の磁器、木器等が多量に検出され、寺城と年代を認知する上に充分な条件を満たしたものと解釈されるのである。

慶勝院寺墓地においては、調査確認面まで擾乱が達していて多くの墓地は移転されたか、あるいは土地利

用による開墾・宅地化により消失した状況を示唆するように桶棺底部が4基散在して検出された。従って、その出土状況と位置関係からは墓域として展開された様態が如実に反映されたものとしてとらえられ、江戸後期における寺域認定に充分な結果であったと思われる。このように2004年調査地点に検出された墓地は近年では宅地化され完全に忘れ去られたものとなっているが、その要因の一つには今回の発掘地点である法星院墓地の存在がある。明治19年の慶勝院檀家の法星院寺への統合の申し出以前には、既に該地での造墓活動が行われている事実は、明治初年時には、墓地の移動・移転が行われていたものと考えられる。その意味において、前者を慶勝院寺墓地・第Ⅰ期として位置づける。

今回の調査により検出した埋葬施設は、長方形木棺41基、方形木棺6基、桶棺67基、不明3基の総計117基であり、規模、副葬品等詳細は表1に記するとしてある。

上層・下層の内訳は、繰り返しとなるが、下層：桶棺53基、長方形木棺2基、上層：桶棺11基、長方形木棺39基、方形木棺7基である。その他には寛政七年の紀年銘入りの墓石が1点検出された（第25図269）。

第Ⅰ期：寛政7年の墓石は、下層墓群の年代が明治期を示す年代のものが主体となる為、第Ⅰ期墓群地域からの移転された墓石と観てとれる。

第Ⅱ期：本地点の下層墓群である。墓の主体は、桶樽内に遺体を屈葬した桶棺墓であり55基の内53基を占める（第5図）。残り2基（112・113号）は75×45cmの小規格の木棺であり、上層の木棺とは一線を画している。

第Ⅲ期：法星院墓地として認識されていた墓が移転後確認されたもので、木棺を主体に少数の桶棺、方形木棺を伴う（第4図）。先行する桶棺墓に重複して埋葬する例と墓域拡張とみなされる箇所に埋葬された例とが認められる。

墓群の年代については、副葬品の陶磁器、銭のセット関係からIからVI群にわけられる。

I群 江戸期 : 47号、57号、68号、71号・73号、87号、93号、104号。

II群 江戸期～明治期：7・8号、14号、15号、39号、41号。

III群 江戸期～大正期：37号。

IV群 明治期 : 9号、36号、52号、54号、59号、64号。

V群 明治～大正初期：17号、27号、89号。

VI群 大正14年以降 : 31号、34号。

各群の特長と問題点、

I群

1 墓域下層面では、桶棺が主となるが、同一面上に明治期のコバルト釉の磁器を副葬する59号が埋葬されている。

2 I群の47号は、上層面に位置して規模124×51cmの木棺である。この事は副葬品のみ年代決定は有効な手段ではない事を示唆している。

II群

1 桶棺39号は下層面に埋葬されるが、副葬品には、半筒碗・染付菊花文、ベコかん、香炉が、釉薬ではコバルト釉を使用した製品が看取される。また41号では、17世紀後半代の紅皿、型押し白磁釉、菊花文に小碗、釉薬ではクロム釉を伴う。

2 上層面では、7号、14号、15号、47号の木棺墓に副葬され、その構成比は決して少ないととはいえない。

III群

1 上層・37号桶棺墓1基が検出されている。江戸末の染付、銅版転写、大正初期染付の磁器類が副葬される。

V群

- 1 下層面では、型紙摺絵、コバルト釉の磁器を副葬する59号が、墓域西側に検出された。
- 2 9号・碗染め付け手書きの磁器がみられ明治前半の時期が推定される。36号では銅版転写、52号ではコバルト釉、54号では銅版転写、64号ではクロム青磁、ワインボトルが看取される。

V群

- 1 17号・銅版転写、吹き絵、27号銅版転写、型紙、89号・吹き絵は、全て上層面から検出されている。

VI群

- 1 34号・大正12年桐一錢青銅貨、31号大正9年桐一錢青銅貨は、上層面のみに看取される。

次に、年代を示す副葬品Ⅰ～VI群と上層面・下層面との関係から埋葬時期を考える。

下層面では、墓域のはば中心部に分布するⅠ群1の71・73・93・87・104号が墓坑の江戸期陶磁器を副葬して古相を呈するが、Ⅰ群2の47号は、上層面に位置し、木棺墓であることから、当該副葬品が伝世品と考えられる。従ってⅠ群1の副葬セットも伝世の可能性も否定できない様相を呈している。

のことから葬儀に伴う埋葬の開始は、前記の法星院と慶勝院との墓地の統合の前後の明治期が妥当とされる。また、最終段階と考える根拠は、コバルト釉を伴う39・57号、クロム青磁を伴う41号がありその副葬品の制作年代からは、明治後半で示すものと考えられる。

続く上層面における開始時期は明確な例は示されないが、下層面の最終段階以降の明治末が妥当かと考えられるところから、その直後に推定される。また、埋葬活動の最終段階は、VI群1の第34号墓坑に大正12年の青銅貨が副葬される事実から、大正末期から昭和初頭が考えられる。

第2項 墓域の構造

墓域入り口は、墓域の西部に現存した墓の入り口との関連からC-11Gの北約2mに推定可能であり、それより東方に導入路が直進する。G-8ライン手前2mが境界となりそれ以東では墓坑は掘削されない。また、入り口部から導入路以南は墓域外となる。

墓域内では、墓の分布状況から見て墓道として推定可能な空白地帯が大きく三通り存在し、いずれも入り口部より直進する導入路により北に垂直に延びる構造となっていて、東側よりそれぞれ墓道1・2・3とした。また、墓割は墓坑の分布状況から見て整然と区画されたものとは考え難く不規則ではあるが、それぞれが独立した一族単位と思われる集まりが認知される。ここでは、この集まりを家族単位と見たて、墓割としてのグループ化を行い、それらに導く墓道との関連について触れる。

墓割としてのグループ化：(下層面)

墓域東部では、グループI(55・56・103号)とグループII(71・88・93・76・94・90・92号)の二群に分画が可能である。IはA-9G中央北端に位置し、3基の植棺墓で構成され配置形態は底辺を南に置く三角状に配置され、中央に追善供養場としての機能が考えられる空白部を設けている。グループIIはA-10G・西南からB-10Gの北西に位置する。墓坑は、長方形の空地を形成するように配置され、入り口部を東北に設ける。

墓域中央よりやや東に入った地点には、グループIII(22・98・97・96・95・99号)、グループIV(115・102・111・110・109・107号)が配置される。グループIIIは、B-10Gの北東で一部はA-10に含まれる位置に占地する。97・96・95号は、一部96・97号に重複するが直線的に配置される。22・98号は不規則な配置である。99号の配置により歪んだ方形状となり中央部に空白地を設ける。グループIVはグループIIIの北に位置し97・96・95号の延長上にあると云える。95号と115号は幅約1mの枝道で分画される。配置形態は緩い弓

状となり、107号を除いた他は、全て重複する。中央やや西寄りではグループV（104・72・105・87・106・86号）、グループVI（108・112・113号）が占地している。グループVはA-10G西部にあり、やや不規則であるが弓状を呈しグループIVと向かい合わせの配置となる。104・72号が重複するが他は単独である。グループVIはZ-10GとA-10Gとにまたがって検出され墓域北端部に位置する。3基は僅かな重複が認められる様に密集して検出され、下層では本群に限られる木棺墓2基と桶棺1基で構成される。西側部では、やや中央よりB-11G南に位置するグループVII（67・74・77・50号）が占地する。墓域西端ではB-11G～A-11GにまたがるグループVIII（79・78・81・68・91・83・82・61号）、A-11G北寄りのグループIX（59・58・57号）、A-11G～Z-11Gの単独62、63号、グループX（62・63号）がジグザグ状に認められる。

グループVIIは4基を底辺とし、77号を頂点とした三角状を呈し、いずれも単独で重複は認められない。VIIIは8基からなり、コ状を呈し中央部に追善供養の空白地を有する。68・91号の重複例以外は単独である。グループIXは、3基編成で中央部に追善供養場と考えられる空白地を有し58・59号で重複関係となる。

グループと墓道（下層面）

墓道1は、その位置関係から墓域と外部との境界の意味を持ち合わせた性格を帯びたものと考えられる。導入路より直角に北進してグループIに突き当たるが途中、コ字状を形成するグループIIに枝道が西方に向に延びる。

墓道2は、墓域のほぼ中央に存在が認められ最も長く広い空間を保っている。第53・73・101・100・104・84号墓に沿って、方向軸N-45-Wの幅2～3mではば直線的に認められる。墓域北西端でグループIXに到達するが先端部付近で右方に枝道が伸びさらに二股となりY字を形成し、左方にグループVIと単独144、84に導く。幹道では右方に墓が配置され南から単独53、73号、ほぼ中央にグループIII、その先には枝道が伸びグループIV、Vに割って入る様相を呈している。尚、グループIV・Vは対面する状況から一家族あるいは一族単位の墓割とも考えられる。

墓道3は、入り口から2m弱付近まで直進し5mでグループVIIに到達する。また、途中1m付近では枝道が東北に延びる変則的なY字状を呈する。枝道では左方に三角状を呈するグループVII、右方には対面する形で単独41、66号が存在する。

墓割としてのグルーピング（上層面）

上層面は、木棺墓を主体とし、明治末から昭和初期に埋葬された一群と考えられる。グループIは、木棺墓坑の掘削はなされず前段階の現状を維持していたものと思われる。グループIIは、主にA-9G南半からB-9G北半を占地する。木棺墓が先行する桶棺墓を取り囲む様に9・54・13・12・11号が埋葬されるが、一部7・8・10号は旧墓道にかかった状態で掘削され墓割の拡張が著しい。基本的には先行墓坑を避ける意図が窺てとれるが、重複例3例も含まれる。グループIIIは、B-10Gの東北に位置してA-10Gの一部にかかる。下層墓坑において多くの重複例が看取されたが、上層面23・24・21・117号においても著しい重複が看取される。

墓割は南北に長い長方形を呈する。グループIVとVにおいては、配置的に統合を前提としたグルーピングを行ったが上層面での、17・16・85・19・18・15・14号の配置状況からは墓割りの範疇の中で捉えられ、グループとしての認識が可能とされる。グリッドとの位置関連は、A-10Gの中に充填する。

グループVIIは、51・49号が墓割の北東部に埋葬され特に51号は50・74号と重複関係を示すが、拡張面積は少ない。グループVIIIは、南に80・38・36・37号、東側に33・32・31号が新たに埋葬されば長方形となる。特に東側では隣接する空白地への埋葬が行われていて、拡張率は高いものとなって、A・B-11Gにまたがった墓割と成っている。35号は中央の空間部に意図的に埋葬され、結果として82・61号と重複する。またグループIXとVIIIにまたがって重複関係を示す34・60・116号の木棺墓の一群は北側でIX59、南側でVIII61号と、それ

それ重複関係を示しⅧ・Ⅸの統合を示唆しているものと考えられる。グループXは、従来の墓割の北東の空白地に28・27号が埋葬され拡張が看取される。墓域の拡張については、BGライン以南に顯著であるといえる。東よりグループX、XI、XII、が導入路上に横一列で配画されている。グループXIは、C-9・10Gにまたがって位置する長方形に区画される墓割である。5・6・69・4・89・40号で構成され、木棺5号と桶棺89号以外は軸が南北に統一されている。重複は5・6・4・89号に認められが、6号は61号に入れ込む様に認められ、先行する墓に対する破壊行為が特に著しい。グループXIIは、2基で43・42号で構成される。軸を東西に設定し、両サイドに比してやや趣を異なる。C-10Gのやや西側に位置する、グループXIIIは、拡張と観るより47号の下位に先行する66号からの発展としてみなされる。C-11Gの東北部に位置して、46・44・45・47・48号で構成される。桶棺、正方形棺が含まれるが基本的には南北軸をとる。北側における墓域拡張の可能性はグループXIV-29、52号の存在により示される。軸は北東にとり北及び西部が調査区外となるため全容は把握されない。グループXVは、東南地区の空白に新設された墓割である。1・2号で接して埋葬されている。グループXVIは、埋葬状況から先行埋葬された単独53号の系統と考えられる。桶棺と木棺との重複関係、木棺での軸の不揃いなどまとまりを欠く事実(70・3・65・64・25号)は、さらに区画の細分割可能な要素を含んでいる。

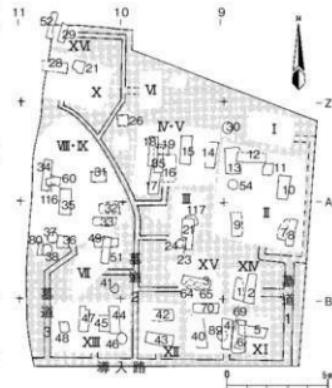
以上、上面においては南部・北西部において墓域の拡張が認知され、グループ間においては下層からの継続的な埋葬活動の展開が認められた。

グループと墓道（上層面）

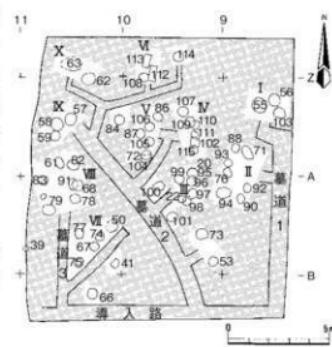
上層面の墓道は、墓割の拡張に伴い、墓道1の南半部と墓道3の他は改修か新たに敷設されている。下層導入路上にはグループ XII XIII が新たに編入さる為消失し、導入路は押し出される。また墓道は下層同様に導入路より直に北に延びる構造となる。

墓道1は、グループIIの拡張に伴い北進は遮断され、グループIIで止まり、グループIとの関連から新たに枝道が延びる形態となり図示のとおりとなるものと思われる。また、途中グループIIIへの進入の為、西に枝道が延びる。このように導入路と東部の墓道1の配置関係より、南・東部は整然とした形態となり、意図的な一連の動態が認知される（図参照）。

墓道2は、下層面同様な経路を示すが、先行路は、中央に位置する墓割り（X・IV・III・IV・V）の新設・拡張のため旧路は殆ど消滅する。新たに新設された墓道は、墓域のはば中央まで北に直進し、以後緩やかなカーブを描いて北西に進み、西端は調査区域外となり未確認であるがグループXに到達したものと考えられる。Xの手前1.5m付近でY字状に枝道が東方に分かれXのはば北側に位置するグループ羣に延びる。また、



小井川遺跡墓域・墓割上層



小井川遺跡墓域・墓割下層

墓道2の東側には、南からグループIV、III、IV・Vが配置され西側にはグループVIIが配置される。

墓道3は、グループVIの編入のため西寄りに移動され、グループVI・IX、VIIに到達する。

まとめ

今回の調査によって、法星院所属の南側・墓地の全容がほぼ明らかとなったものと考える。以下にその成果を記してまとめにかえる。発見された遺構は、発掘地点が墓域と云うことで当然墓坑に限られる。木棺墓（方形・含む）48基、桶棺墓66基、不明3基の総数117基を検出し、かつこれらの墓坑群を層位的及び面的に捉える事ができた。この成果をふまえて前回調査済みの慶勝院関連墓地を含めて、埋葬時期をI～III期に区分した。

I期は、江戸後期から末と考えた。寛政7年銘・墓石と前年度に調査を行った慶勝院寺関連墓地の桶棺・墓坑群を充てた。第II期は、今回の発掘により検出した下層桶棺墓群を充てた。埋葬の姿勢は、棺の主体が桶棺と2基の小型木棺であるため主体は屈葬と断定される。時期は伴出・副葬品の年代観から明治初期から明治後半とした。前記した明治19年の慶勝院・檀家による法星院との統合申し出者の墓坑が多数含まれているものと考えられる。第III期墓群は、木棺を主体とする墓群である。法星院寺で環状道路通過の発表後、墓の移転を行った。その後の試掘調査により検出されたものであり、関係者から忘れ去られた墓群であり、埋葬年代は副葬品の検討から明治最終末から昭和初期の年代が与えられるものであった。

埋葬姿勢は、桶棺を除く木棺の規格から伸展葬が主体を占めるが、45・10号例のように寸法が短い例も認められ、膝等を折り曲げた屈葬を呈するものも混在する。

墓割としてのグルーピングでは、下層面で10グループと単独墓8基が確認された。墓域の中における墓坑群の展開は、西側に出入り口から東に直に延びる導入路、そこから、さらに延びる3本の墓道の先端部、及び脇に墓坑が存在する。また、墓域内における分布状況は密集感は認められず墓割の際に制約を受けた感は少なく空白地帯が多く認められるが墓割内での重複は多く、単独でも近接して埋葬されている。このことは、限定された区画の中で追善供養を行うという目的の為の結果が反映されているものと思われる。

上層面においては、下層面からの継続による墓割りの拡張、新規の墓割りが認められた。継続による墓割拡張は墓道の移動の要因となり、新規の墓割は墓域の拡張につながったものと思われ、あわせて墓域の空白部は希少となりほぼ飽和状態となっているのが看取された。（小林広和）

表1・遺構観察

探査番号	遺構番号	形	出土位置(グリッド)	馬軸(裏住)	瓦軸(底住)	深さ	方位(南北を基準)
6	1号基	馬方形	B-9	121	56	18	Wへ?
6	2号基	馬方形	B-9 C-9	146	45	—	—
6	3号基	馬方形	B-10	147	55	21	Wへ80°N
6	4号基	馬方形	C-10	150	71	24.5	N
6	5号基	馬方形	C-9	150	51	15.8	—
6	6号基	馬方形	C-9	148	47	19.5	Wへ4°
6	7号基	馬方形	B-9	154	—	30	Eへ10°
6	8号基	馬方形	B-9	152	—	17	Eへ10°
6	9号基	馬方形	B-9	172	60	47.4	—
7	10号基	馬方形	A-9	116	59	14	EへE
7	11号基	馬方形	A-9	59	65	39.1	—
7	12号基	馬方形	A-9	48	50	10	Eへ90°N
7	13号基	馬方形	A-9	135	52	14	N
7	14号基	馬方形	A-10	125	52	32	S
7	15号基	馬方形	A-10	146	57	36	Eへ5°
7	16号基	馬方形	A-10	—	45	—	—
7	17号基	馬方形	A-10	134	46	17	WへS
7	18号基	馬方形	A-10	147	47	—	—
7	19号基	馬方形	A-10	140	52	30	E
7	20号基	馬方形	A-10 B-10	91	60	63.4	—
7	21号基	馬方形	A-10 B-10	197	65	19.6	N
7	22号基	馬方形	B-10	40	—	17.6	—
7	23号基	円形	B-10	55	52	43.6	—
7	24号基	馬方形	B-10	52	21	57.5	—
7	25号基	馬方形	B-10	55	25	25	—
7	26号基	馬方形	A-10 A-11	60	59	20	—
7	27号基	馬方形	Z-11	58	57	10	—
8	28号基	馬方形	Z-11	25	46	15	ほぼE
8	29号基	馬方形	Z-11	12	45	17	WへS
8	30号基	円形	A-9 A-10	60	50	—	—
8	31号基	馬方形	A-11	75	50	10	東西Eに向く
8	32号基	馬方形	A-11	—	—	—	東西Eに向く
8	33号基	馬方形	A-11	—	47	—	東西Eに向く
8	34号基	馬方形	A-11	150	45	21.6	—
8	35号基	馬方形	A-11 B-11	130	56	23.5	EへS
8	36号基	馬方形	B-11	68	63	47	—
8	37号基	馬方形	B-11	52	—	15	—
8	38号基	馬方形	B-11	55	55	18	—
8	39号基	馬方形	B-11	—	—	32	—
8	40号基	馬方形	C-10	—	—	—	—
9	41号基	馬方形	C-10	45	—	30	—
9	42号基	馬方形	C-10	—	62	—	—
9	43号基	馬方形	C-10	135	56	24	ほぼW
9	44号基	馬方形	C-11	140	47	15	N
9	45号基	馬方形	C-11	54	55	28	N
9	46号基	馬方形	C-11	53	53	20	—
9	47号基	馬方形	C-11	124	51	—	—
9	48号基	馬方形	C-11	60	40	8	—
9	49号基	馬方形	B-11	115.5	46	—	東西Eに向く
9	50号基	馬方形	B-11	65	—	—	—
9	51号基	馬方形	B-11	140	43	25	—
9	52号基	馬方形	Z-11	135	62	—	—
9	53号基	馬方形	Z-10	53	21	80	—
9	54号基	馬方形	A-9	61	55	46	—
9	55号基	馬方形	A-9	—	—	12	—
10	56号基	馬方形	A-9	—	—	12	—
10	57号基	馬方形	A-11	60	56	55	—
10	58号基	馬方形	A-11	51	53	34	—
10	59号基	馬方形	A-11	55	50	35	—
10	60号基	馬方形	A-11	65	60	9	—
10	61号基	馬方形	A-11	67	52	13	—
10	62号基	馬方形	Z-11 Z-11	67	65	61.7	—
10	63号基	馬方形	Z-11	—	—	—	—
10	64号基	圓形	B-10	56	56.9	10.1	—
10	65号基	圓形	B-9	55	40	—	—
10	66号基	圓形	B-11	54	55	—	—
10	67号基	圓形	B-11	60	50	—	—
10	68号基	圓形	B-11	51	52	—	—
10	69号基	馬方形	C-9	165	65	25	N
11	70号基	馬方形	Z-10	120	45	—	東西Eに向く
11	71号基	圓形	A-9	—	55	—	—
11	72号基	圓形	A-10	52	52	22	—
11	73号基	圓形	B-10	52	50	61	—
11	74号基	圓形	B-11	54	52.2	24.8	—
11	75号基	圓形	B-11	55	50	15	—
11	76号基	圓形	A-9	53	53	10	—
11	77号基	圓形	B-11	53	53	18	—
11	78号基	圓形	B-11	51	51	19	—
11	79号基	圓形	B-11	50	50	23	—
11	80号基	馬方形	B-11	—	—	—	—
11	81号基	圓形	B-11	38	34	34	—
11	82号基	圓形	B-11	27	25	27	—
11	83号基	圓形	A-11 B-11	52	45	20	—
11	84号基	圓形	A-10 A-11	64	53	7	—
11	85号基	馬方形	A-10	131	60	—	—
11	86号基	圓形	A-10	50	—	20	—
12	87号基	圓形	A-10	—	—	16	—
12	88号基	圓形	A-9	50	49	42	—
12	89号基	圓形	C-9 C-10	56	53	—	—
12	90号基	圓形	B-9	—	—	1	—
12	91号基	圓形	B-11	57	57	25	—
12	92号基	圓形	B-9	47	—	31	—
12	93号基	圓形	A-9	49	46	10	—
12	94号基	圓形	B-9 B-10	49	49	15	—
12	95号基	圓形	A-10 B-10	56	56	—	—
12	97号基	圓形	B-10	53	—	20	—
12	98号基	圓形	B-10	52	54	34	—
12	99号基	圓形	B-10	55	56	34	—
12	100号基	圓形	B-10	45	—	17	—
12	101号基	圓形	B-10	54	53	22	—
12	102号基	圓形	A-10	59	56	—	—
12	103号基	圓形	A-9	45	48	66	—
13	104号基	圓形	A-10	53	52	36.5	—
13	105号基	圓形	A-10	60	56	25	—
13	106号基	圓形	A-10	55	53	17	—
13	107号基	圓形	A-10	57	57	44	—

13	108号墓	円形	A-10	Z-10	54	50	12	
13	109号墓	円形	A-10	-	53	-	18	
14	110号墓	円形	A-10	-	-	-	10	
13	111号墓	円形	A-10	-	-41	-	-	
14	112号墓	馬蹄形	A-10	Z-10	75	45	18	N
14	113号墓	円形	Z-10	-	-	-	-	N
14	114号墓	円形	Z-10	-	49	-	5	
13	115号墓	円形	A-10	-	-	-	-	
9	116号墓	円形	A-11	-	-	-	-	
14	117号墓	正方形	B-10	-	56	56	20	東西を向く

表2・出土遺物觀察

土師器・陶器等

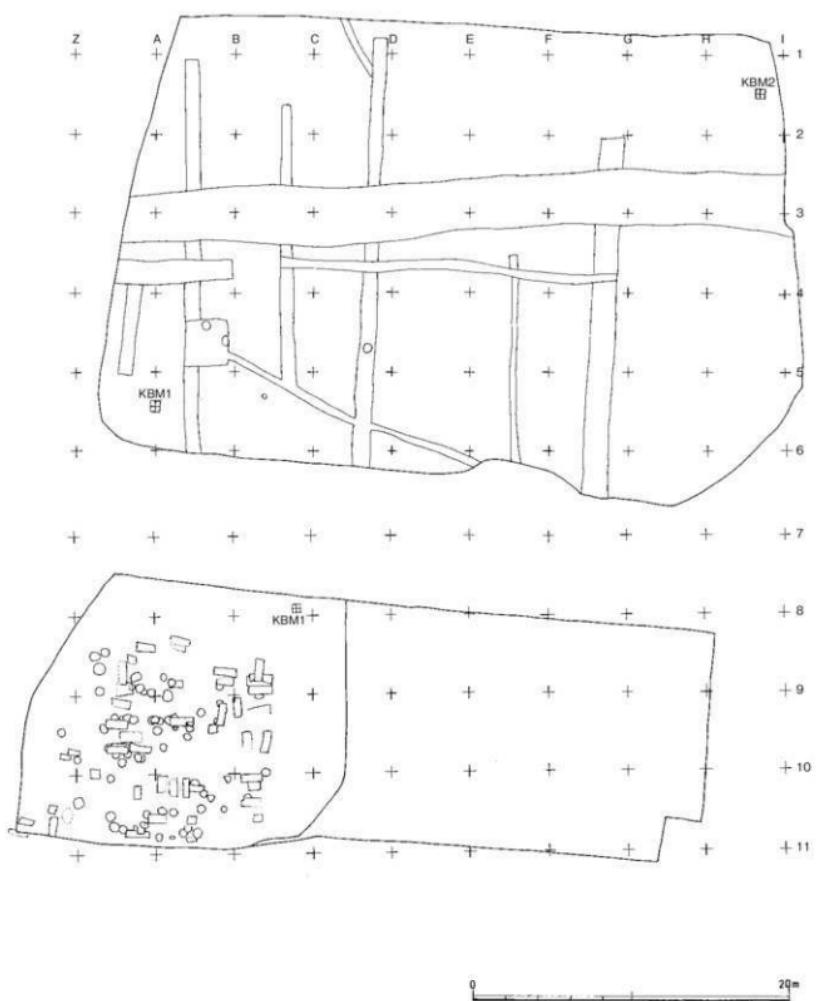
検出番号	遺物番号	種類	器種	出土位置	直 周 (cm) (現存)			備考
					口	底	高さ	
15	2	ガラス	片口	1号室	7.0	6.8	0.2	(267)
15	2	金属製品	環状	2号室	馬20.4	口付1.0	小2.8	鍍金生存 小口六角形
15	3	ガラス製品	化粧ビン	3号室	0.8	-	0.9	
15	4	金属製品	環状	3号室	馬10.0	口付0.6	小口0.9	鍍金生存
15	5	金属製品	小瓶	7-8号室	-9	-	-4.1	
15	6	金属製品	瓶	7-8号室	-	-	-3.8	
15	7	金属製品	瓶	7-8号室	-	-	-4	添付
15	8	金属製品	瓶	7-8号室	-	-	-3.5	錫
15	9	金属製品	瓶	7-8号室	-	-	-3	
15	10	金属製品	瓶	7-8号室	-	-	-2	
15	11	ガラス製品	化粧ビン	7-8号室	3.8	3.6	5.3	「鑿跡有り」
15	12	ガラス製品	化粧ビン	7-8号室	2	4	12	
15	13	金属製品	こじり	7-8号室	馬1.5	馬1.4	厚0.05	
15	14	金属製品	こじり	7-8号室	馬1.1	馬1.2	厚0.05	
15	15	角瓶	瓶	9号室	-	-	-2.1	添付 瓶の目録別記 独楽
15	16	金属製品	こぼせ	9号室	馬1.7	馬1.7	厚0.05	
15	17	金属製品	瓶	10号室	馬1.0	馬1.0	厚0.05	添付
15	18	金属製品	瓶	馬1.0	馬1.0	馬1.0	添付	
15	19	木製品	かんざし	10号室	馬12.2	馬12.2	厚0.3	添付
15	20	べっ甲	笄	10号室	馬10.5	馬10.8	厚0.5	
15	21	べっ甲	笄	10号室	馬10.2	馬10.2	厚0.5	
15	22	べっ甲	笄	10号室	馬11.0	馬11.0	厚0.5	
15	23	金属製品	瓶	10号室	馬11.5	馬1.0	厚0.2	
15	24	金属製品	かんざし	10号室	馬1.21	馬1.05	厚0.8	サンゴ玉の装飾
15	25	金属製品	かんざし	10号室	馬11.3	-	厚0.2	
15	26	金属製品	かんざし	10号室	馬10.2	-	厚0.2	
16	27	追加	瓶	11号室	6.8	3.8	4.2	添付
16	28	金属製品	かんざし	11号室	馬11.7	馬1.4	厚0.15	
16	29	金属製品	煙草袋口	11号室	馬1.6	口付0.07	小口壁1.0	
16	30	ガラス製品	ビード	12号室	-	-	-0.8	
16	31	ガラス製品	ビード	12号室	4.7	つまみ壁残1.0	-0.8	
16	32	ガラス製品	ビン	13号室	2	1.8	4	「目蓋・布田」
16	33	ガラス製品	スマイル	13号室	1.6	0.2	5.9	
16	34	ガラス製品	かんざし	14号室	27	2	15.5	
16	35	ガラス製品	かんざし	14号室	-	-	-3	
16	36	追加	瓶	14号室	5.4	3	6.2	ベルト物 底部残端?
16	37	追加	瓶	14号室	-9	-	-4	添付 瓶天紋
16	38	追加	瓶	14号室	10.3	4.2	5.5	添付 (内) 半瓦茎 (外) 鎌・網手 (夏入) 有
16	39	追加	中瓶	14号室	-10	4.5	5	添付 (夏入) 花井
16	40	追加	中瓶	14号室	-	-4	-4.7	添付
16	41	追加	中瓶	14号室	-	-4.8	-2	添付 (内) 竹 (見込) 海波文
16	42	追加	中瓶	14号室	-6	-	-4.7	コルト物 花
16	43	追加	中瓶	14号室	-	-	-6.1	
16	44	追加	瓶	14号室	-	-4.6	-2	鉢
16	45	追加	灯明皿	14号室	-8.9	-4.4	2	鉢
16	46	追加	灯明皿	14号室	-	-8	-1.9	鉢
16	47	ガラス製品	蓋	14号室	2.5	2	8	
16	48	ガラス製品	蓋	14号室	馬5.0	天面0.1	小口0.09	
16	49	金属製品	煙管	14号室	馬0.9	口付0.07	小口0.09	
16	50	金属製品	煙管	14号室	-	-	-1.2	添付 (内) 懸垂文 (外) 鎔面輪文
17	51	ガラス製品	蓋	15号室	-2.3	5.2	-	
17	52	金属製品	煙管	15号室	馬0.5	天面0.12	小口0.10	小口圓角形
17	53	金属製品	煙管	15号室	失立て	馬19.2	厚4.1	
17	54	追加	滴落	17号室	-	2.6	2.9	添付 (内) 月に雲
17	55	追加	滴落	17号室	-	2.8	1.9	添付 (内) 雲
17	56	一串	瓶	19号室	馬11.3	馬3.0	厚0.2	
17	57	金属製品	かんざし	19号室	馬1.7	馬0.6	厚0.25	
17	58	金属製品	煙管	19号室	馬0.0	天面0.10	小口0.06	
17	59	追加	滴落	20号室	馬0.8	口付0.05	小口0.07	
17	60	追加	瓶	20号室	-	-	-1.5	添付 (内) 四方擇 (外) 有
17	61	金属製品	煙管	20号室	馬3.3	火薙0.10	小口0.10	
17	62	金属製品	煙管	20号室	馬0.3	口付0.06	小口0.10	
17	63	追加	煙管	21号室	馬17.3	火薙0.12	口付0.05	変型
17	64	追加	小瓶	21号室	-	2.1	3.1	
17	65	追加	小瓶	23号室	7.1	3.8	4.1	
17	66	金属製品	煙管	25号室	馬1.7	火薙0.09	小口0.09	
17	67	金属製品	煙管	25号室	馬1.7	火薙0.04	小口0.09	
17	68	追加	瓶	27号室	8	7	8.7	堅断頭形
17	69	追加	滴落	27号室	6.6	7	6	鉢形物 方
17	70	追加	滴落	27号室	6.2	-	-1.2	鉢形物 方
17	71	追加	滴落	27号室	6.2	2.5	7.4	鉢形物 方 直頭端あり (内) 一頭化
17	72	木製品	火薙	27号室	4.1	-	7.4	
17	73	金属製品	煙管	27号室	馬1.9	火薙0.11	小口0.11	
17	74	金属製品	煙管	27号室	馬1.7	口付0.06	小口0.10	
18	75	ガラス製品	ビン	27号室	-	2.1	21	コルク栓残存
18	76	追加	瓶	27号室	-12.3	-2.6	-	
18	77	金属製品	煙管	32号室	馬0.3	口付0.05	小口0.10	鍍金生存
18	78	金属製品	?	34号室	馬20.0	瓶0.4	厚0.6	
18	79	ガラス製品	ビン	35号室	2	3.4	7.2	
18	80	ガラス製品	ビン	35号室	2.2	2.4	7.4	
18	81	追加	瓶	36号室	-	-4	-2.9	直山文 直山精製
18	82	追加	瓶	36号室	5.8	つまみ壁残1.3	1.9	
18	83	金属製品	煙管	36号室	馬2.3	火薙0.12	小口0.10	小口六角形
18	84	金属製品	煙管	36号室	馬1.6	口付0.07	小口0.10	
18	85	追加	滴落	37号室	-	-3.8	添付	
18	86	追加	滴落	37号室	3.2	5.6	17.5	網動螺 面・羅・と人形
18	87	追加	瓶	37号室	6.2	つまみ壁残1.2	2.4	添付 滲文
18	88	金属製品	?	37号室	6.8	6.8	-	
18	89	金属製品	煙管	37号室	馬5.9	火薙0.11	小口0.09	鍍金生存
18	90	金属製品	煙管	37号室	馬12.7	口付0.06	小口0.09	直二切体
18	91	金属製品	煙管	38号室	馬5.9	火薙0.13	小口0.11	直二切体
18	92	金属製品	煙管	38号室	馬4.8	口付0.07	小口0.11	

16	93	植物	小穂	39種類	7.3	3.3	5.4	条件付、菊花文
17	94	植物	葉	39種類	5.6	3.9	4.7	条件付
18	95	植物	葉	39種類	5.6	3.9	1.6	ベコカン、薄粉
16	96	金属製品	環管、導管	39種類	高さ7	火薬筒1.4	小口付1.0	
16	97	植物	葉茎	40種類	7.6	3	3.9	
18	98	ガラス製品	ビン	20種類	3.6	3.8	4.8	
18	99	ガラス製品	瓶	20種類	3.6	3.8	3.8	[148]
18	100	植物	花茎	41種類	4.5	1.2	1.2	条件付、(肥前和) 白磁梅 菊花文
18	101	植物	小穂	41種類	9.6	-	3.7	条件付、山水文
18	102	金属製品	環管、導管	41種類	高さ13.8	火薬筒1.0	口付0.5	抜け環管
19	103	植物	小穂	42種類	4	-	条件付、山水文、鹿部朱で「山」	
19	104	植物	葉	43種類	6	-	3.8	
19	105	植物	葉	43種類	2	4.2	6.4	条件付、葉
19	106	ガラス製品	牛乳ビン	43種類	2	2.8	15.3	「全乳、住吉御奉書」(底部) -
19	107	木製品	葉	43種類	高さ12.3	幅10	6.0	
19	108	木製品	葉	43種類	高さ12.3	幅1	6.0	
19	109	木・金属製品	葉	43種類	高さ5.0	幅0.8	6.6	
19	110	金属製品	かごさし	43種類	高さ10.7	幅1	15.5	
19	111	金属製品	花瓶	43種類	高さ5.0	幅0.4	6.4	
19	112	ガラス製品	花瓶	43種類	高さ1.1	丸径0.2	14.5	カムボジの花瓶
19	113	金属製品	環管	43種類	高さ18.2	火薬筒1.4	口付0.7	
19	114	植物	葉	47種類	-	-	3	
19	115	植物	葉	48種類	5.6	2	2	(内・外) 綿被
19	116	木製品	葉	49種類	高さ15.0	幅0.0	2.2	
19	117	植物	葉	49種類	-	-	4.3	条件付
19	118	植物	中材	52種類	-16.5	-7.6	6.1	条件付、菊花文、コバルト釉、藤原家
19	119	ガラス製品	葉	52種類	6.2	4.4	2.1	極太頭
19	120	植物	葉	52種類	6.2	4	1.5	絵(46山) 葉
19	121	ガラス製品	ラスク	54種類	4.5	5.6	14.5	
19	122	金属製品	環管、導管	54種類	高さ5.0	火薬筒1.1	小口付1.0	
19	123	金属製品	環管、導管	54種類	高さ5.5	口付0.6	小口付1.0	
20	124	植物	かごさし	55種類	-	-	内側底厚一様、外側底面斜板あり後へラジ形	
20	125	土器類	かくらけ	55種類	10.2	5.6	2.1	外側底面軒下で、底面斜板切削
20	126	陶器	酒盃	55種類	4.8	1.6	2.7	灰陶陶器
20	127	金属製品	環管、導管	55種類	高さ5.5	火薬筒1.0	小口付1.0	
20	128	植物	葉	55種類	高さ5.5	口付0.6	小口付1.0	
20	129	植物	葉	55種類	7.1	2.2	2.4	契紙振袖
20	130	植物	葉	55種類	7.1	2.2	4.5	
20	131	ガラス製品	ビン	55種類	4.2	2.2	2.4	
20	132	ガラス製品	ビンの裏	55種類	2.2	1.5	2.4	
20	133	植物	ペケカン	61種類	6.8	5.2	4.5	綿被、輪をくれ
20	134	ガラス製品	ビン	64種類	2.4	6.2	24.2	綿被
20	135	木製品	かくらけ	64種類	-	-	2.4	
20	136	植物	葉	65種類	-	6	20.5	内・外(内) 酒ナチ(外) ヘラケヌリ
20	137	植物	小穂	65種類	7	3.5	5.8	条件付、古文
20	138	植物	葉	65種類	3.5	17.9	5.1	鉄被、圓口形
20	139	木製品	葉	65種類	8.8	3.5	8.3	
20	140	木製品	葉	65種類	高さ12.2	幅1	9.8	
20	141	べー串	葉	65種類	高さ13.2	幅1.2	9.3	
20	142	金属製品	環管、吸口	65種類	高さ1.4	口付0.6	小口付0.9	
20	143	植物	葉	65種類	6.6	2.6	18.7	条件付、葉文
20	144	植物	葉	65種類	3.2	5.2	16.7	条件付、葉文、植物、残部、輪をくれ
21	145	植物	葉	73種類	-	-	1.0	
21	146	木製品	環管	73種類	4.5	9.0	2.6	内一層底化
21	147	金属製品	環管、導管	73種類	高さ1.1	火薬筒1.2	小口付1.9	
21	148	植物	環管、吸口	73種類	高さ1	口付0.5	小口付1.0	
21	149	植物	葉	75種類	4.5	2.7	2.9	
21	150	植物	葉	75種類	6.4	3.9	1.5	萬葉文(見込) 玉井花
21	151	植物	葉	75種類	8.4	3.9	1.5	庄子模(見込) 玉井文
21	152	植物	葉	75種類	高さ13.4	幅1.1	8.0	
21	153	金属製品	環管、導管	76種類	高さ1	火薬筒1.8	小口付1.2	羅子残存
21	154	金属製品	環管、吸口	76種類	高さ5.5	口付0.6	小口付1.1	
21	155	金属製品	環管、導管	76種類	高さ5.8	口付0.6	小口付1.0	羅子残存
21	156	金属製品	環管、導管	76種類	高さ6.0	口付0.6	小口付1.0	
21	157	金属製品	環管、吸口	78種類	高さ2	口付0.4	小口付1.0	羅子残存
21	158	植物	葉	79種類	3.7	7.2	17.8	綿被、ペコカン
21	159	植物	葉	80種類	5.2	5.2	13.2	綿被、ペコカン
21	160	植物	葉	80種類	6	2.6	2.4	(内) 人物?
21	161	植物	葉	80種類	-	6	17.7	
21	162	金属製品	環管、吸口	83種類	高さ7	口付0.6	小口付1.0	羅子残存
21	163	金属製品	かごさし	84種類	高さ14.7	幅0.6	2.2	
21	164	金属製品	環管、吸口	84種類	高さ7.1	口付0.6	小口付0.7	
21	165	金属製品	環管、導管	84種類	高さ7.1	口付0.6	小口付0.6	
21	166	金属製品	環管、導管	86種類	高さ3.0	火薬筒0.6	小口付0.9	
21	167	木製品	かくらけ	87種類	9.5	5.5	2.5	
21	168	植物	葉	88種類	6.5	2.4	2.4	条件付
21	169	植物	葉	88種類	2.7	4.5	13.2	白透明被
21	170	植物	葉	89種類	6.6	2.5	2.9	条件付
21	171	ガラス製品	ビン	89種類	3.4	3.2	5.4	148
21	172	ガラス製品	ビン	90種類	2.8	2.8	1.6	レートフード(見込) 漆屋 ◇
21	173	植物	葉	90種類	6.2	2.5	1.6	条件付、白磁瓶、別裏裏
21	174	植物	葉	91種類	2.2	4.6	11.6	ペコカン、綿被、瓶被
21	175	金属製品	環管、導管	91種類	高さ5.0	火薬筒1.5	小口付1.0	
21	176	金属製品	環管、導管	91種類	高さ5.0	火薬筒1.5	小口付1.0	
22	177	金属製品	環管、吸口	92種類	高さ5.5	口付0.7	小口付1.1	羅子残存
22	178	植物	小穂	93種類	6.3	5.3	5.3	(内) 罗(外) 紫・椿・蓮文(底部) 一重軒に横
22	179	植物	葉	93種類	-	-	17.9	入人
22	180	金属製品	環管、導管	94種類	高さ1.5	火薬筒1.2	小口付1.1	
22	181	金属製品	環管、吸口	94種類	高さ5.5	口付0.6	小口付1.3	
22	182	金属製品	環管、導管	94種類	高さ5.6	火薬筒1.3	小口付1.0	
22	183	金属製品	環管、導管	94種類	高さ6.6	口付0.4	小口付0.9	
22	184	金属製品	環管、導管	94種類	高さ6.6	火薬筒1.6	小口付1.0	金マック
22	185	植物	丸玉	95種類	高さ15.0	幅1.5	2.5	
22	186	植物	葉	96種類	高さ3.3	火薬筒1.3	小口付1.3	第二固体
22	187	金属製品	環管、吸口	96種類	高さ5.8	口付0.6	小口付1.3	
22	188	木製品	葉	97種類	高さ1.9	幅1.3	6.6	用途不明
22	189	金属製品	環管、導管	97種類	高さ5.5	火薬筒1.1	小口付0.9	金マック
22	190	金属製品	環管、導管	97種類	高さ5.5	口付0.6	小口付1.0	
22	191	金属製品	環管、導管	103種類	高さ5.8	火薬筒1.4	小口付1.1	
22	192	金属製品	環管、導管	103種類	高さ6.1	火薬筒0.4	小口付1.3	
22	193	金属製品	环	104種類	高さ15.0	幅1.5	2.5	
22	194	植物	小穂	104種類	8.5	4.2	3.8	条件付
22	195	植物	小穂	104種類	7.5	6.9	5	条件付、山水文
22	196	植物	葉	105種類	6.4	2.5	14.8	ペコカン、綿被、剝離探付蓋
22	197	植物	葉	105種類	2.5	4	14	
23	198	金属製品	環管、導管	107種類	高さ4.3	火薬筒1.6	小口付1.1	
23	199	金属製品	環管、吸口	107種類	8.6	1	11.6	条件付
23	200	金属製品	環管、導管	110種類	高さ(2.5)	火薬筒1.6	小口付1.1	
23	201	金属製品	環管、吸口	110種類	高さ(7.0)	口付0.3	小口付(0.9)	

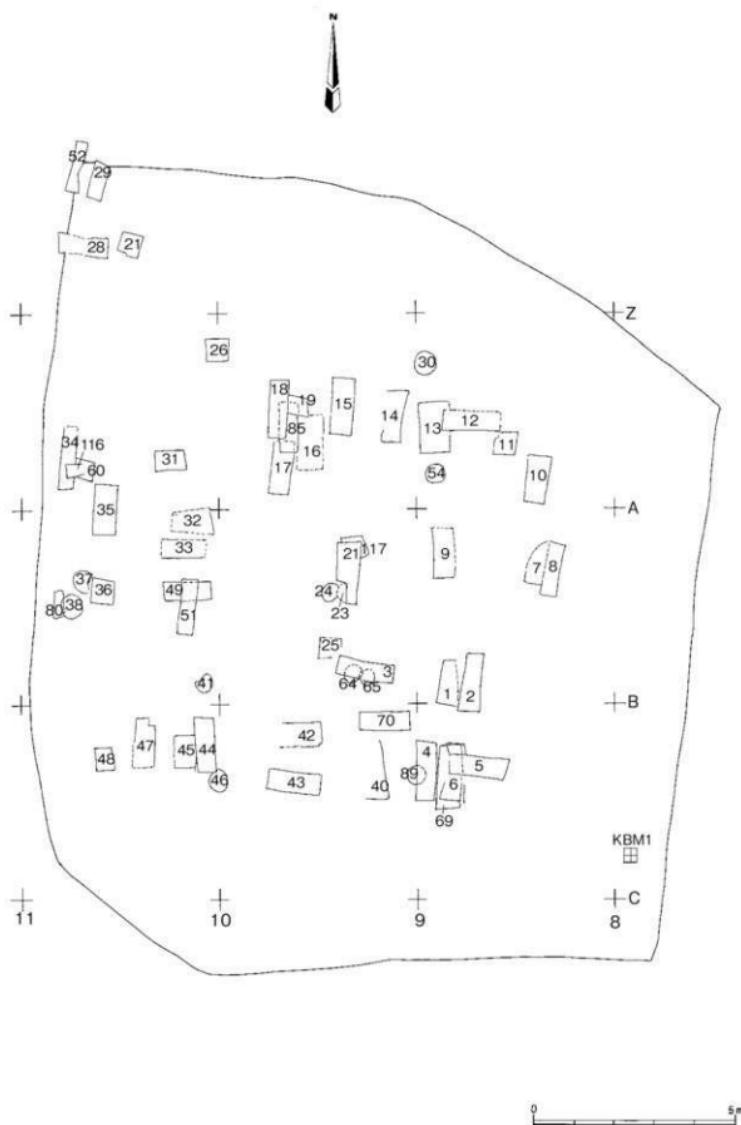
23	202	昭和	北朝土一錢	6.4	2.2	2.7		
23	203	昭和	北朝土一錢	6.8	-6	3.9	銅板妙物	
23	204	昭和	小昭和	6.8	-3	3.7	銅板妙物 緑絵〔ちくさび〕	
23	205	昭和	北朝土一錢	9.2	-4	5.1	銅板妙物 外・風景〔見込〕岩波文〔底面〕一重舟为基	
23	206	昭和	北朝土一錢	6.4	-	3.9	銅板妙物 船	
23	207	昭和	北朝土一錢	6.4	-	3.9	銅板妙物 船	
23	208	昭和	北朝土一錢	6.4	-	3.9	銅板妙物 船	
23	209	昭和	北朝土一錢	8	-	1.5	銅板妙物 〔内・外〕通景文	
23	210	昭和	西漢瓦当面	-	-3.4	2.7	銅板妙物〔見込〕花文	
23	211	昭和	小昭和	-	-4	3.4	銅板妙物	
23	212	昭和	北朝土一錢	-	-4	3.4	銅板妙物	
23	213	昭和	中昭和	10.6	-8	5.2	銅板妙物 〔内〕梅花文	
23	214	昭和	北朝土一錢	-11	-3.8	5.4	銅板妙物〔内〕	
23	215	昭和	中昭和	-11.2	4.2	6.2	銅板妙物〔外〕山水文〔底面〕舟	
23	216	昭和	北朝土一錢	-10.6	-3.7	4.0	銅板妙物〔内〕風景〔見込〕梅雨繁文〔底面〕櫻紋松竹梅	
23	217	昭和	北朝土一錢	-10.6	-3.7	4.0	銅板妙物〔内〕風景〔見込〕梅雨繁文〔底面〕櫻紋松竹梅	
23	218	昭和	中昭和	9.8	-	4.7	銅板妙物〔内〕梅〔外〕竹子松文	
23	219	昭和	北朝土一錢	9.8	-	3.7	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
23	220	昭和	北朝土一錢	-10	-	4.1	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
23	221	昭和	中昭和	-10.2	-	4.1	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
23	222	昭和	中昭和	-10.6	-	4.8	銅板妙物〔内〕梅〔外〕牡丹	
23	223	昭和	中昭和	-11	-	3.9	銅板妙物〔内〕鳥	
23	224	昭和	中昭和	-11.8	-	4.4	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
23	225	昭和	中昭和	-12.2	-	3.9	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
23	226	昭和	中昭和	-12.4	-	3.4	銅板妙物〔内〕外・かると	
23	227	昭和	中昭和	-12.4	-	2.6	銅板妙物〔内〕菊〔外〕花文	
23	228	昭和	中昭和	-	-3.7	3.3	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
23	229	昭和	中昭和	-	-4	3.1	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
24	230	昭和	中昭和	-	-4	2.9	銅板妙物〔外〕梅〔内〕梅〔外〕	
24	231	昭和	西漢瓦当面	-	-4	2.3	銅板妙物〔外〕	
24	232	昭和	西漢瓦当面	-	-4	2	銅板妙物	
24	233	昭和	西漢瓦当面	-	4.2	2.9	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
24	234	昭和	西漢瓦当面	-	-4	2.9	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
24	235	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	3.7	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
24	236	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	4.7	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
24	237	昭和	中昭和	西漢瓦当面	-	4.3	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
24	238	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	4.1	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
24	239	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	4	銅板妙物	
24	240	昭和	中昭和	-	-	2	銅板妙物	
24	241	昭和	中昭和	-	-	2.5	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
24	242	昭和	小昭和	北朝土一錢	11.4	6.2	2.6	銅板妙物〔内〕梅〔外〕
24	243	昭和	小昭和	北朝土一錢	-11	6	2	銅板妙物〔内〕梅〔外〕
24	244	昭和	小昭和	北朝土一錢	-12	-	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
24	245	昭和	小昭和	北朝土一錢	-11.2	-6.8	2.1	銅板妙物〔内〕梅〔外〕
24	246	昭和	小昭和	北朝土一錢	-7	-1.3	2.1	銅板妙物〔内〕文〔外〕
24	247	昭和	中昭和	北朝土一錢	-7.8	-2.5	2.5	銅板妙物〔内〕梅〔外〕
24	248	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	11.4	2.1	銅板妙物〔内〕山水文
24	249	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	9	2.1	銅板妙物〔内〕山川
24	250	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	-15.6	2.5	銅板妙物
24	251	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	-9.6	2.5	銅板妙物
24	252	昭和	中昭和	8.8	-2.2	2.5	銅板妙物	
24	253	昭和	石造	5.8	つまみ彫刻1.9	2.5	青磁	
24	254	昭和	石造	5.8	-	2.5	銅板妙物〔内〕梅〔外〕	
24	255	昭和	中昭和	北朝土一錢	-11.6	5	6.1	銅板妙物〔内〕梅〔外〕
24	256	昭和	中昭和	北朝土一錢	11.2	5.3	7.7	銅板妙物
24	257	昭和	中昭和	北朝土一錢	-9.2	1.8	2.1	銅板妙物
24	258	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	-12.4	2.1	銅板妙物
24	259	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	-7.8	2.5	銅板妙物
24	260	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	11.4	2.1	銅板妙物〔内〕梅〔外〕
24	261	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	9	2.1	銅板妙物
24	262	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	-15.6	2.5	銅板妙物
24	263	昭和	中昭和	北朝土一錢	-	-9.6	2.5	銅板妙物
24	264	昭和	中昭和	8.8	-2.2	2.5	銅板妙物	
25	265	昭和	西漢瓦当面	5.2	4.2	2.5	小六角形	
25	266	昭和	西漢瓦当面	5.2	4.2	2.5	小六角形	
25	267	木製品	木製口	北朝土一錢	24.3	5.2	厚0.5	
25	268	木製品	木製口	北朝土一錢	24.3	5.2	厚0.6	
25	269	木製品	蓋石	北朝土一錢	24.3	5.2	厚12.8	

表3・古銭

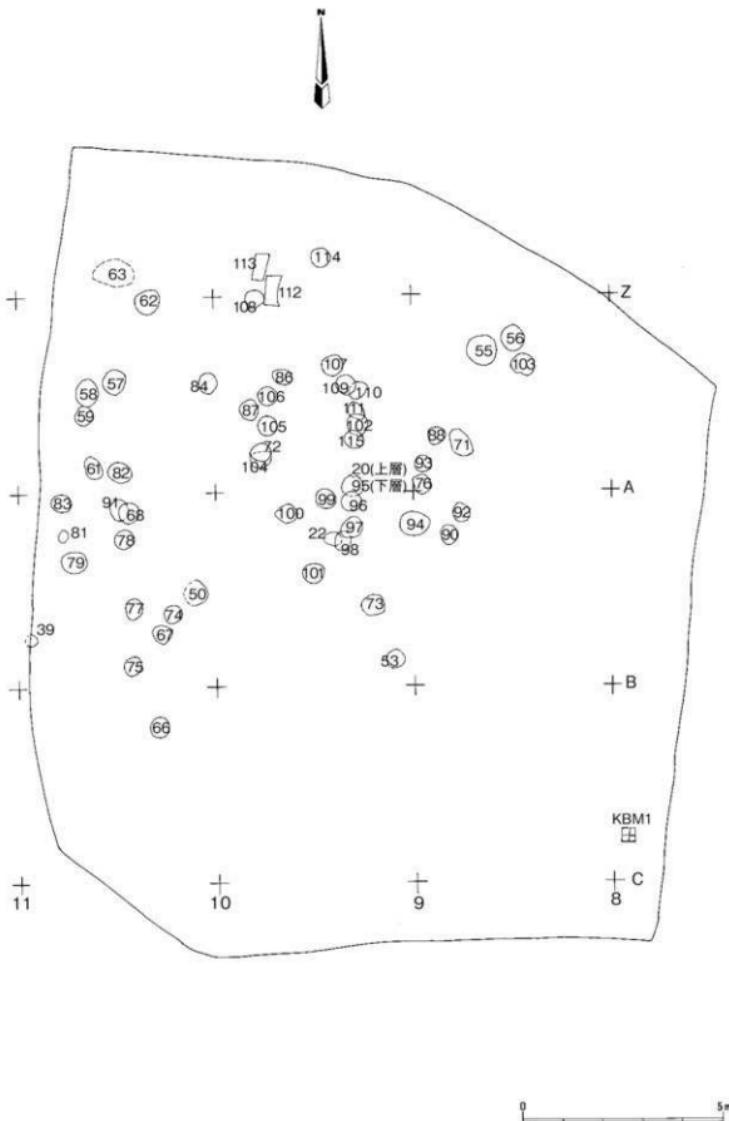
辨別番号	遺物番号	材質	出土位置	直 径 (mm)	厚 度 (mm)	名 称	備 考
26	1	銅	7年裏	2.3	0.7×0.7	東水道銅	
26	2	銅	12年裏	2.3	0.8×0.7	東水道銅	
26	3	銅	12年裏	2.3	0.8×0.6	東水道銅	
26	4	銅	20年裏	2.3	0.6×0.65	東水道銅	
26	5	青銅	31年裏	2.2	0.65×0.65	銅一錢青銅真	大正九年
26	6	銅	36年裏	2.3	0.7×0.65	東水道銅	
26	7	銅	36年裏	2.3	0.7×0.6	東水道銅	
26	8	銅	36年裏	2.3	0.75×0.6	東水道銅	
26	9	銅	36年裏	2.3	0.7×0.7	東水道銅	北朝土一錢〔1054-〕
26	10	銅	36年裏	2.4	0.7×0.7	東水道銅	北朝土一錢〔1054-〕
26	11	銅	46年裏	2.4	0.7×0.7	東水道銅	北朝土一錢〔1066-〕
26	12	銅	46年裏	2.4	0.6×0.6	東水道銅	
26	13	銅	79年裏	2.4	0.65×0.65	東水道銅	
26	14	銅	99年裏	2.4	0.65×0.65	東水道銅	
26	15	銅	99年裏	2.4	0.6×0.6	東水道銅	
26	16	銅	109年裏	2.5	0.65×0.6	東水道銅	
26	17	銅	109年裏	2.4	0.65×0.65	東水道銅	
26	18	銅	109年裏	2.4	0.65×0.6	東水道銅	
26	19	銅	109年裏	2.4	0.65×0.65	東水道銅	
26	20	銅	109年裏	2.3	0.65×0.6	東水道銅	
26	21	銅	109年裏	2.4	0.6×0.6	東水道銅	
26	22	銅	109年裏	2.2	0.65×0.6	東水道銅	
26	23	銅	109年裏	2.2	0.65×0.6	東水道銅	
26	24	銅	109年裏	2.4	0.65×0.6	東水道銅	
26	25	銅	112年裏	2.4	0.65×0.6	東水道銅	
26	26	銅	112年裏	2.4	0.65×0.6	東水道銅	
26	27	銅	112年裏	2.4	0.65×0.6	東水道銅	
26	28	銅	112年裏	2.4	0.65×0.65	東水道銅	
26	29	銅	114年裏	2.4	0.65×0.65	東水道銅	
27	30	銅	114年裏	2.2	0.65×0.7	東水道銅	
27	31	銅	117年裏	2.5	0.6×0.6	東水道銅	
27	32	銅	117年裏	2.5	0.6×0.6	東水道銅	
27	33	銅	西漢裏	2.3	0.6×0.6	東水道銅	
27	34	青銅	西漢裏	2.4	0.65×0.6	銅一錢青銅真	大正十二年
27	35	銅	西漢裏	2.4	0.70×0.65	東水道銅	大正一元(1915)
27	36	銅	北朝裏	2.2	0.7×0.65	東水道銅	(1608-)



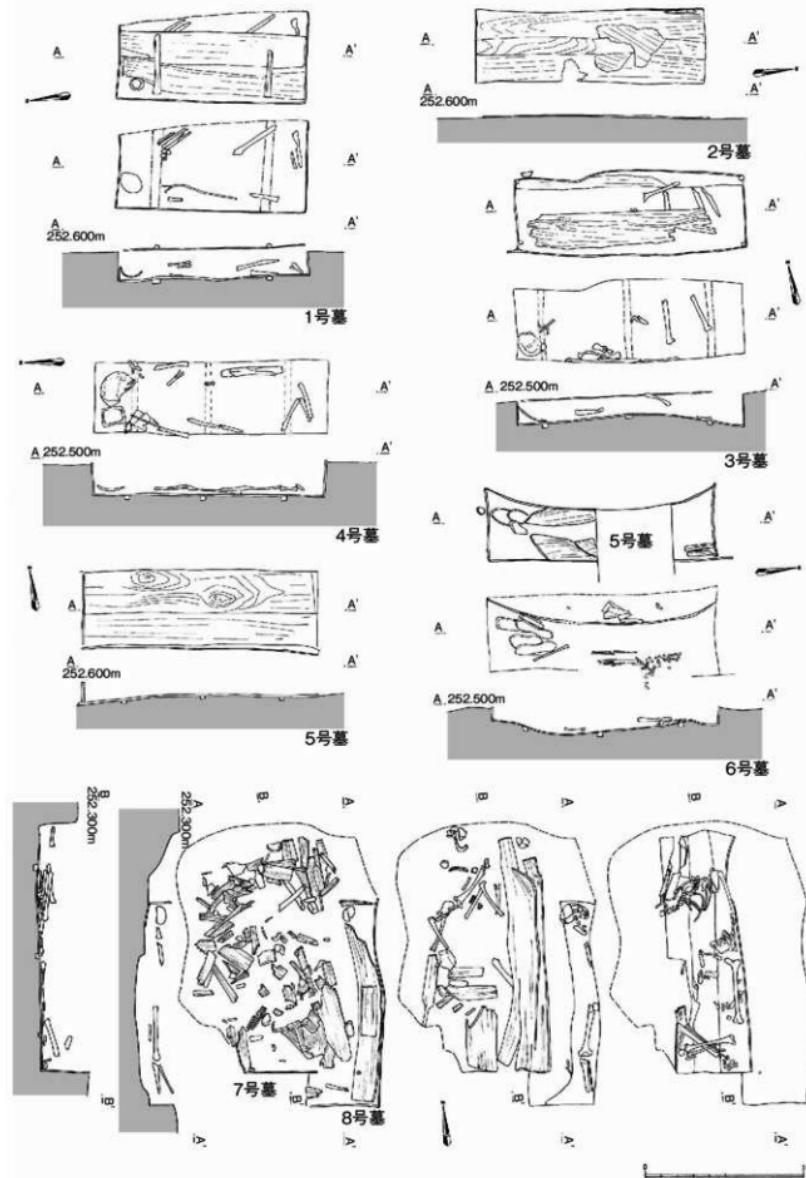
第3図 小井川遺跡1次・2次全体図



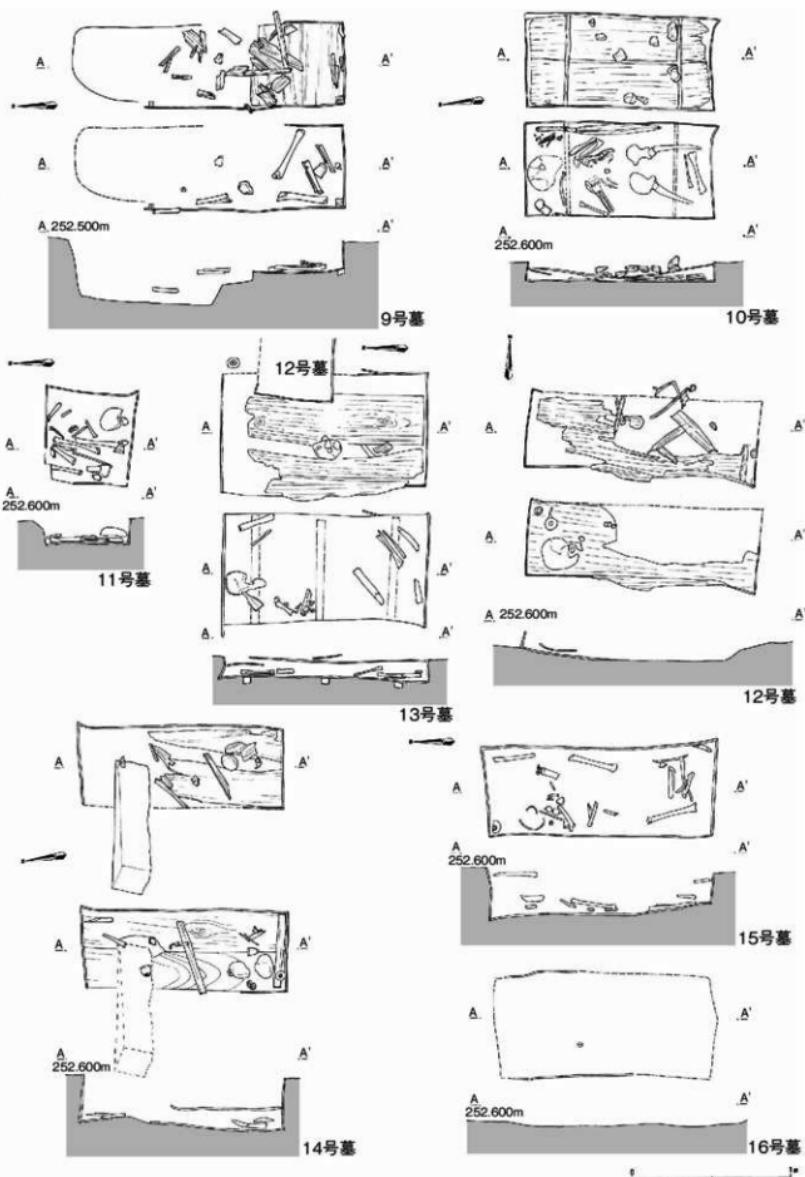
第4図 小井川遺跡2次全体図（上層）



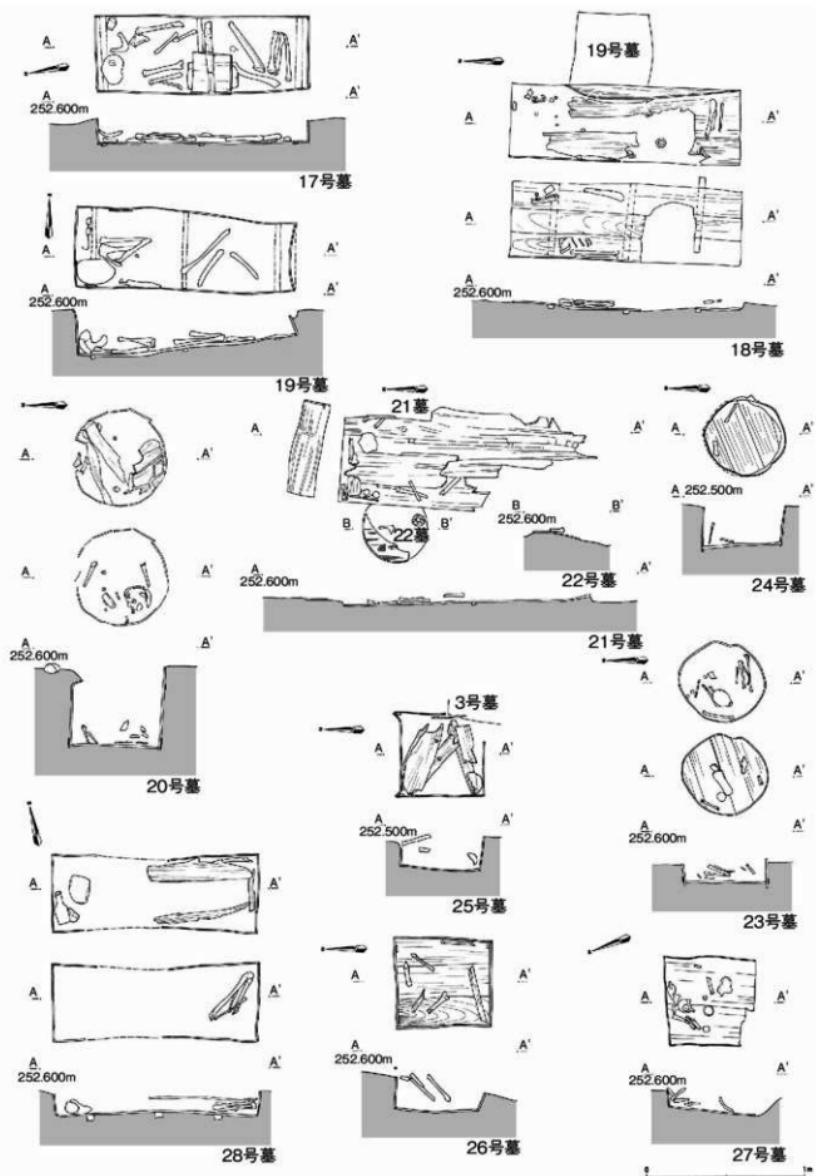
第5図 小井川遺跡2次全体図（下層）



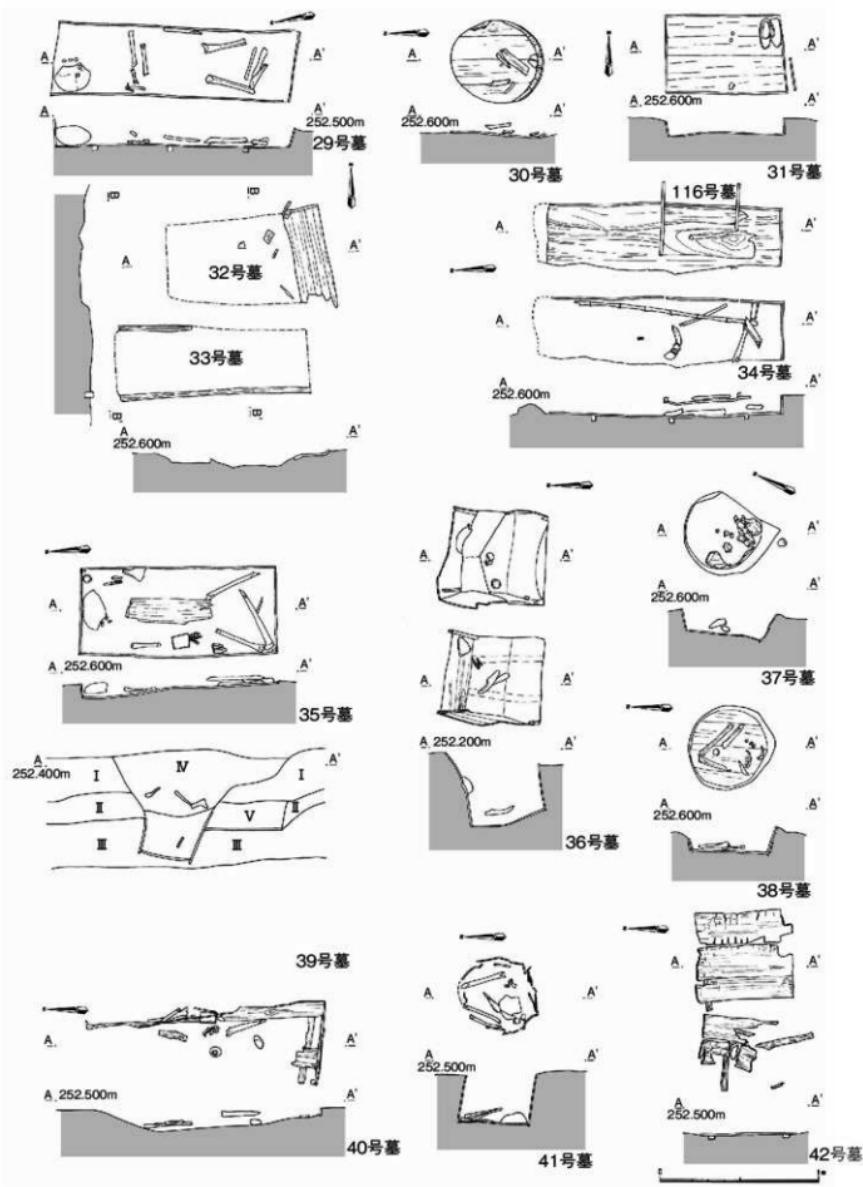
第6図 1～8号墓



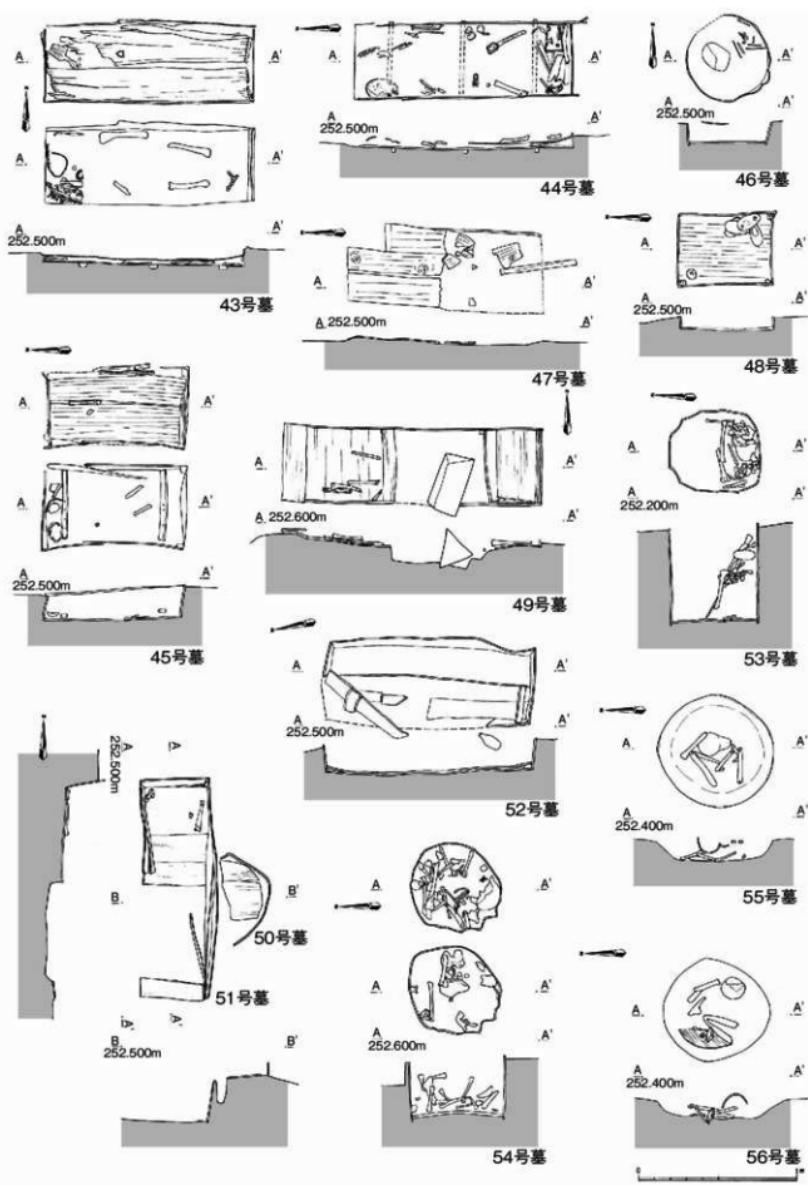
第7図 9~16号墓



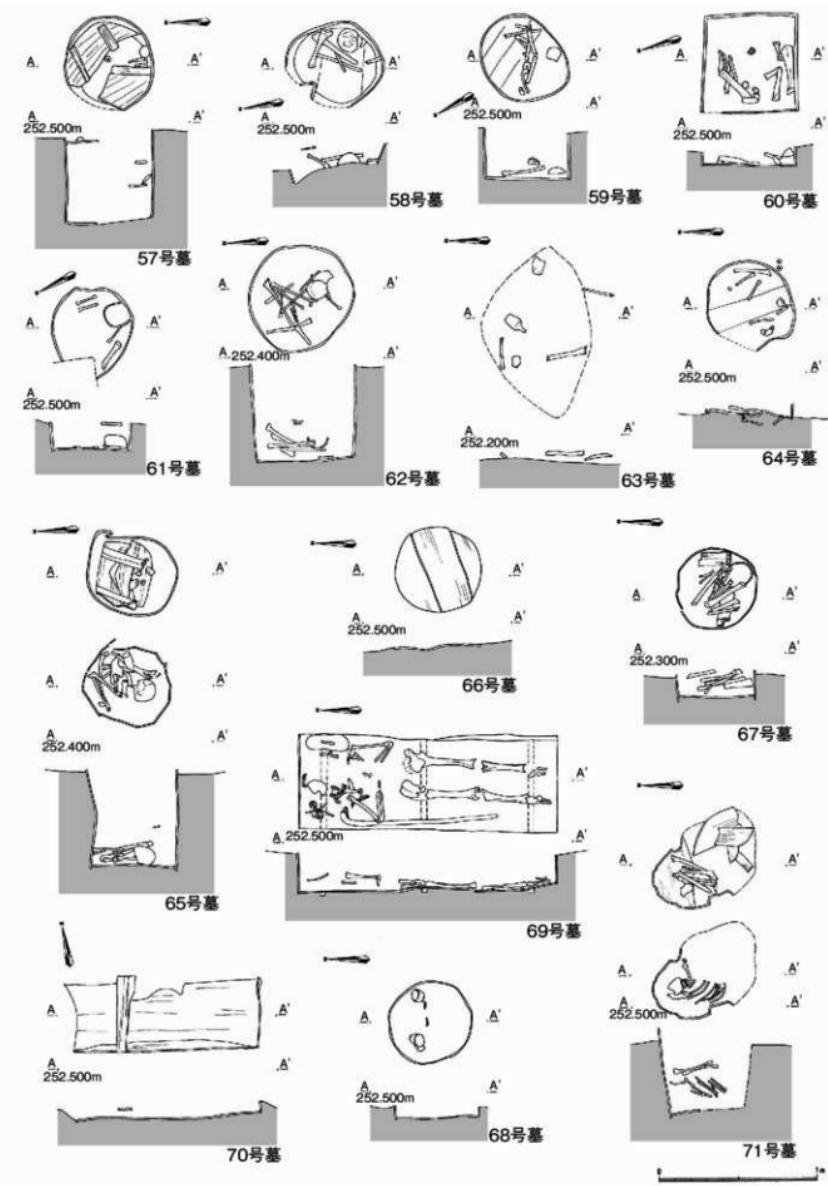
第8図 17~28号墓



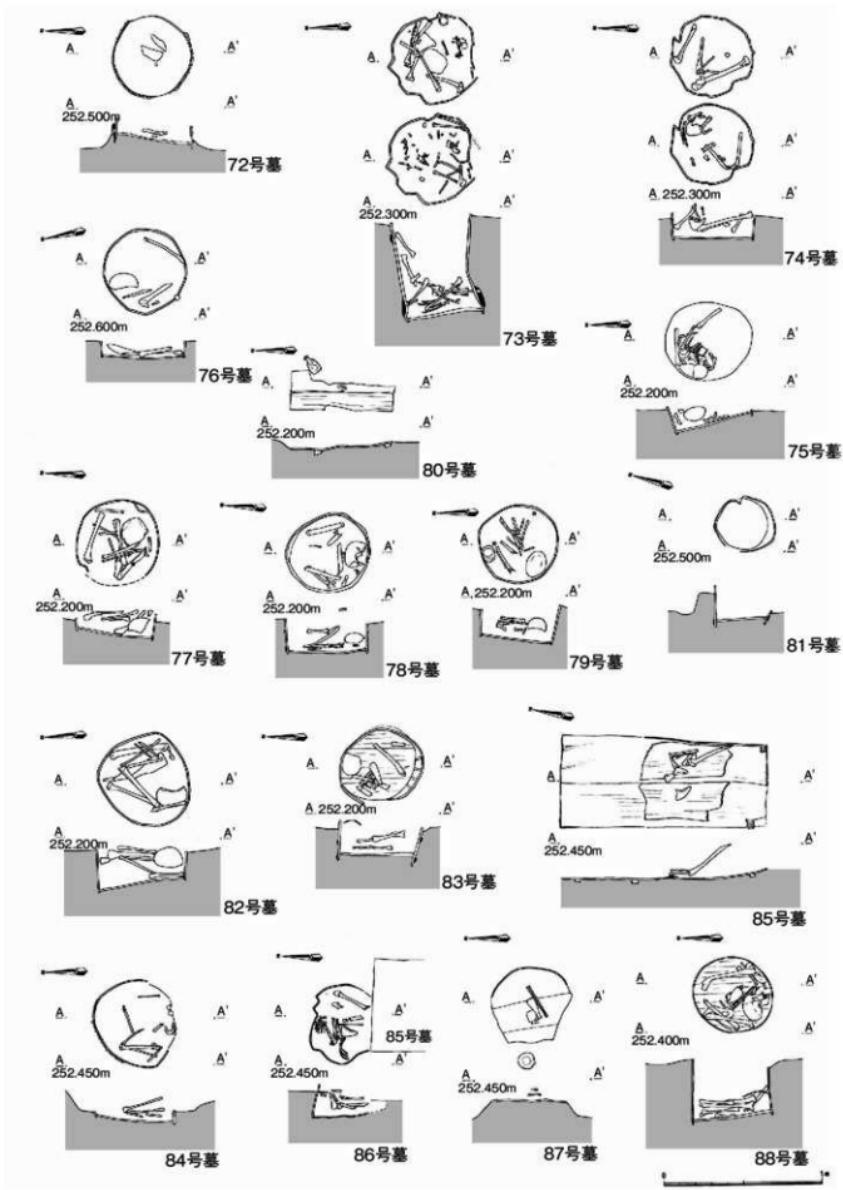
第9図 29~42号墓, 116号墓



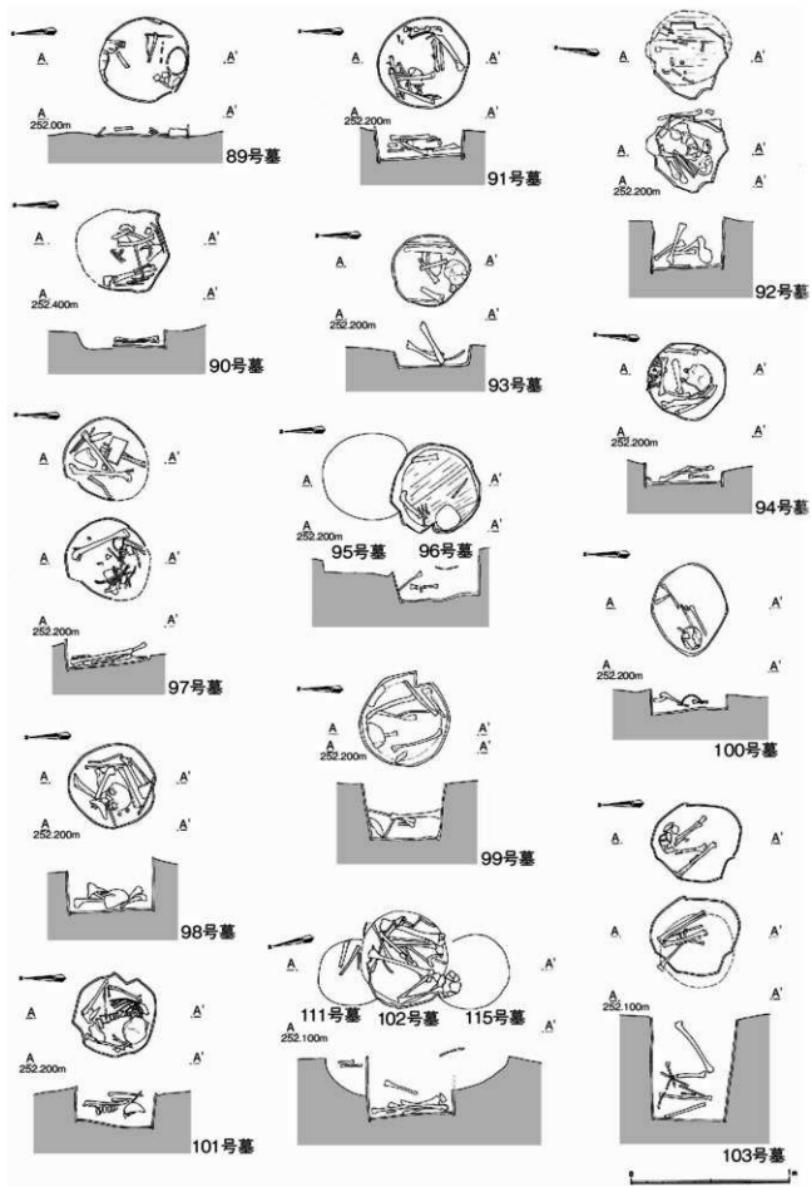
第10図 43~56号墓



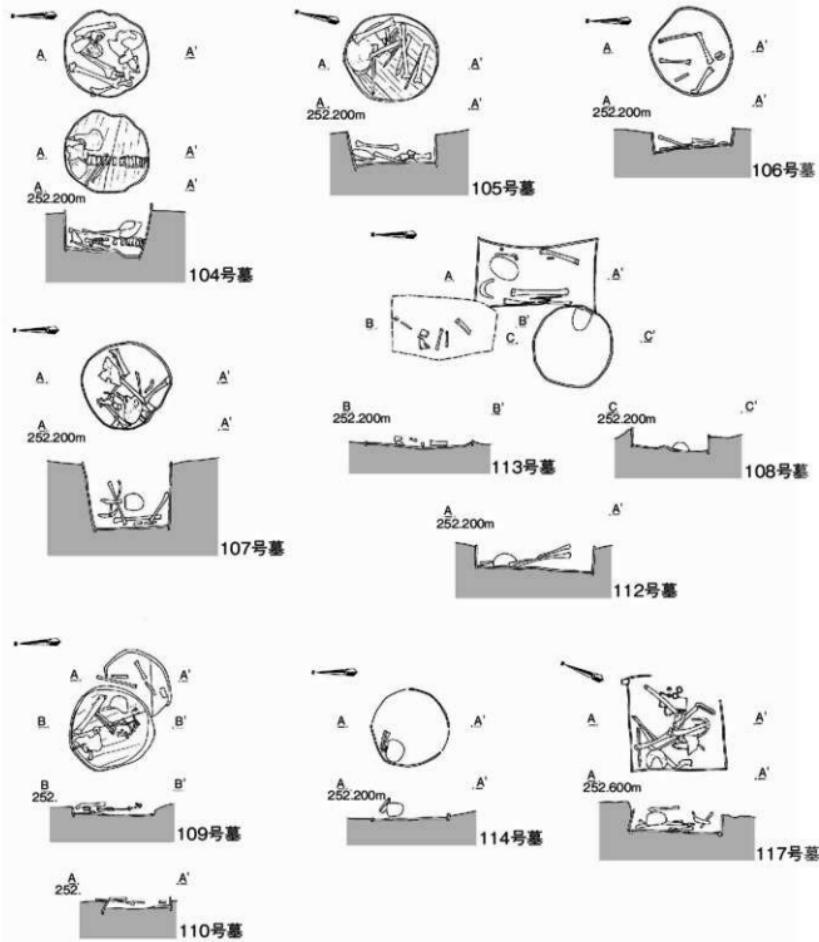
第11図 57~71号墓



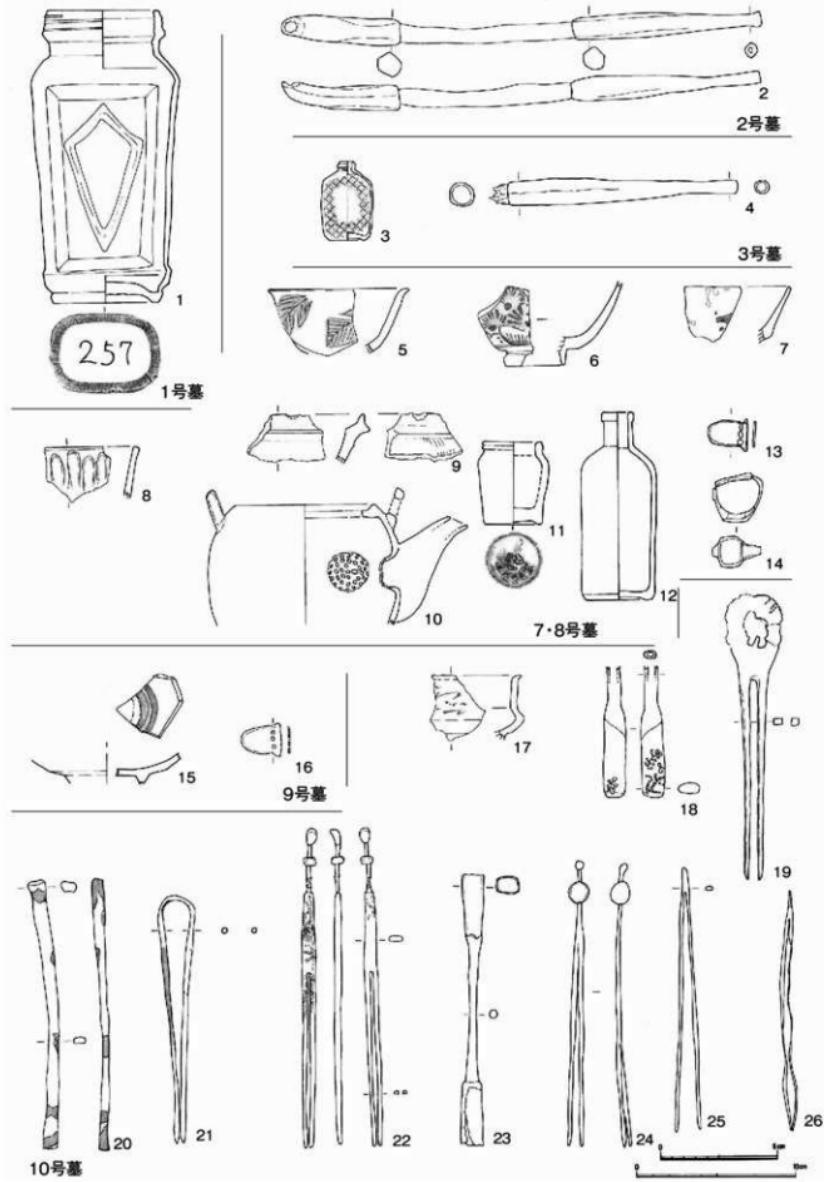
第12図 72~88号墓



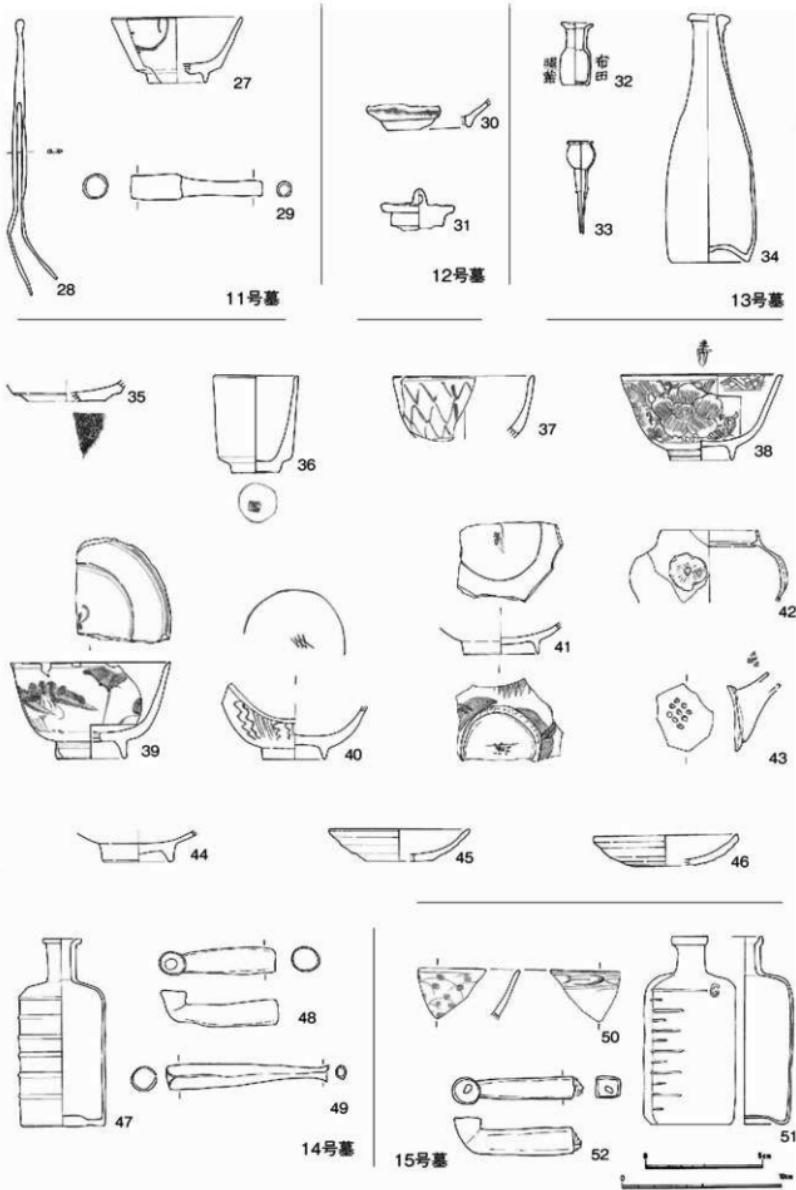
第13図 89~103, 111, 115号墓



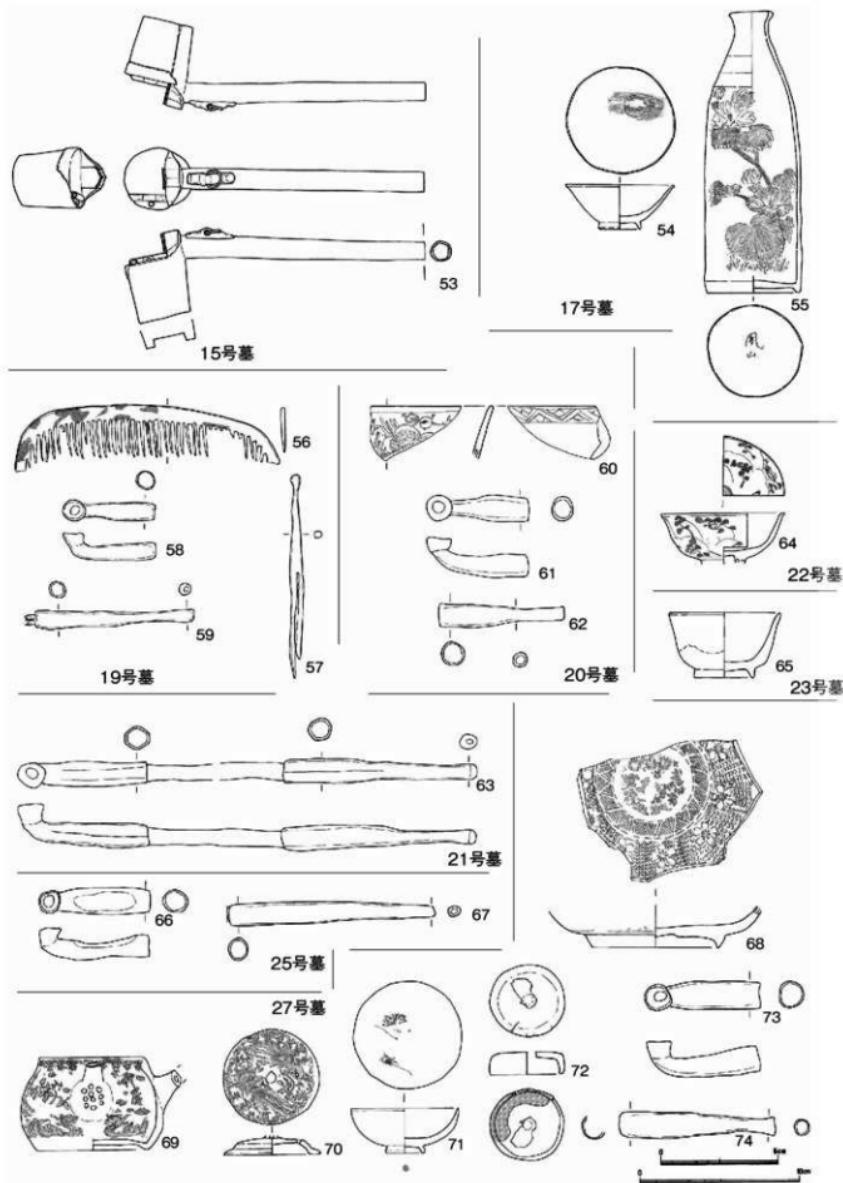
第14図 104~110、112~114、117号墓



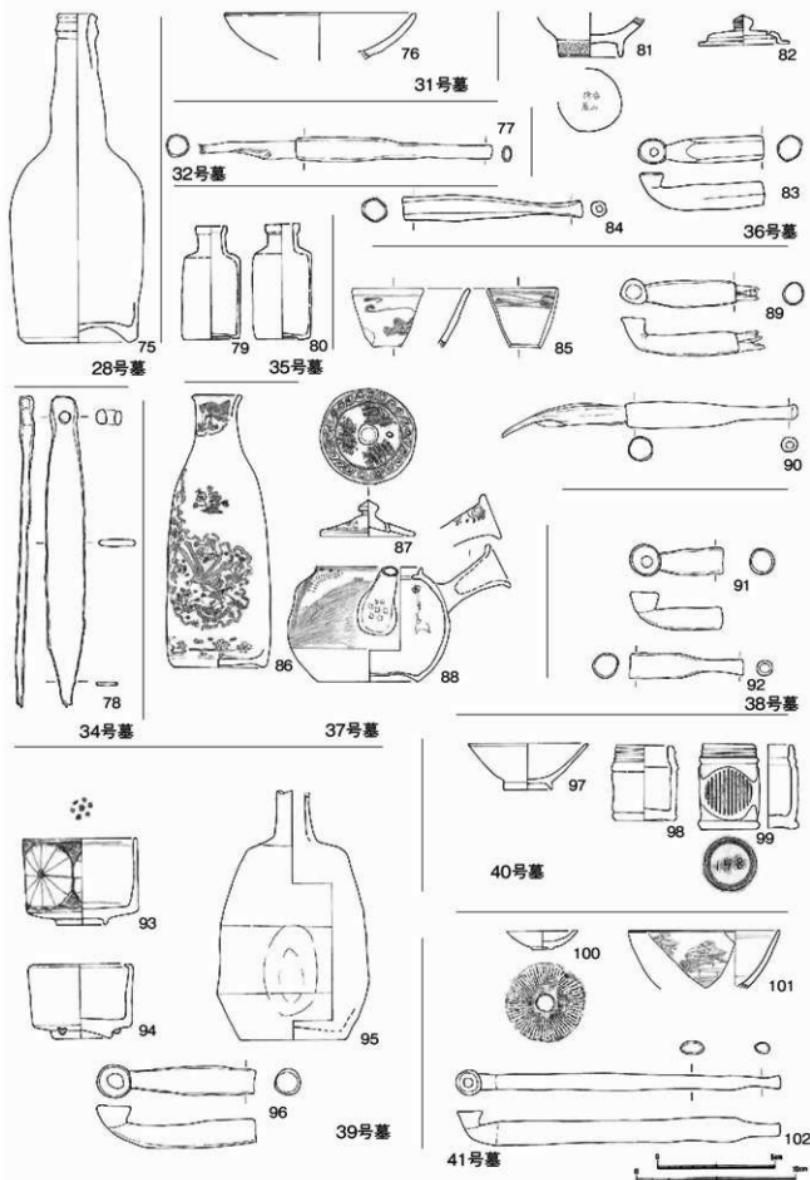
第15図 1~10号墓・副葬品



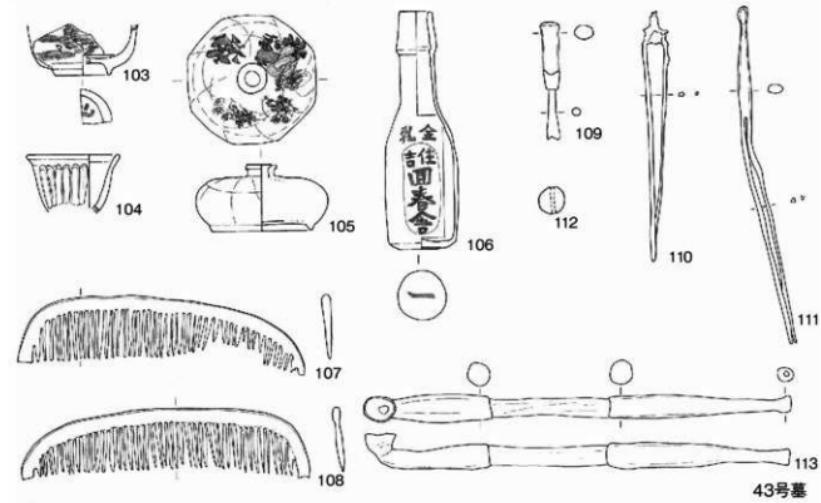
第16図 11～15号墓・副葬品



第17図 15~27号墓・副葬品



第18図 28~41号墓・副葬品



43号墓



47号墓



49号墓



118



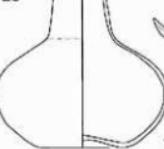
115



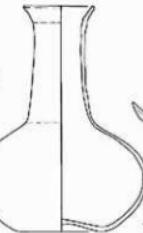
116



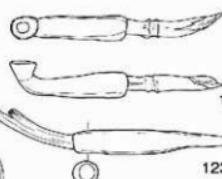
48号墓



120



121

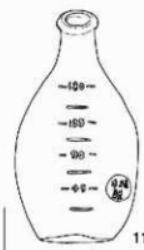


122



123

54号墓



119

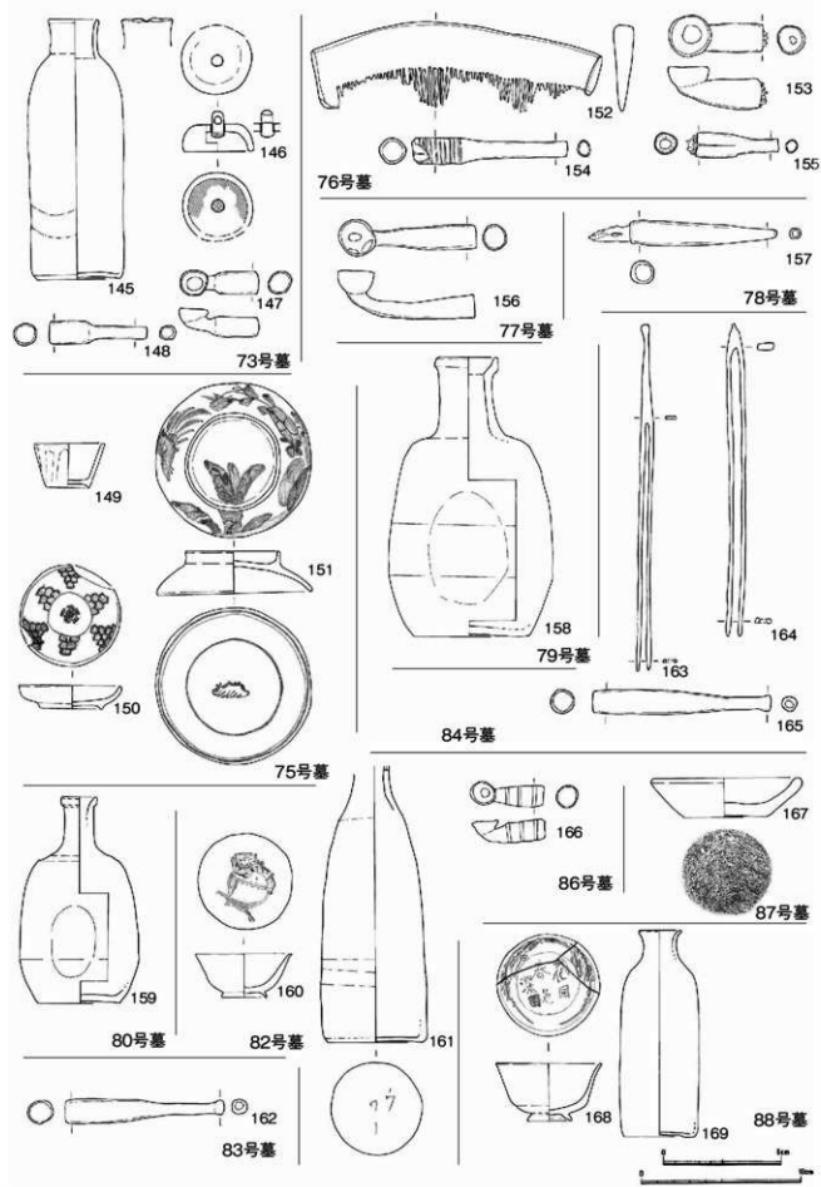


52号墓

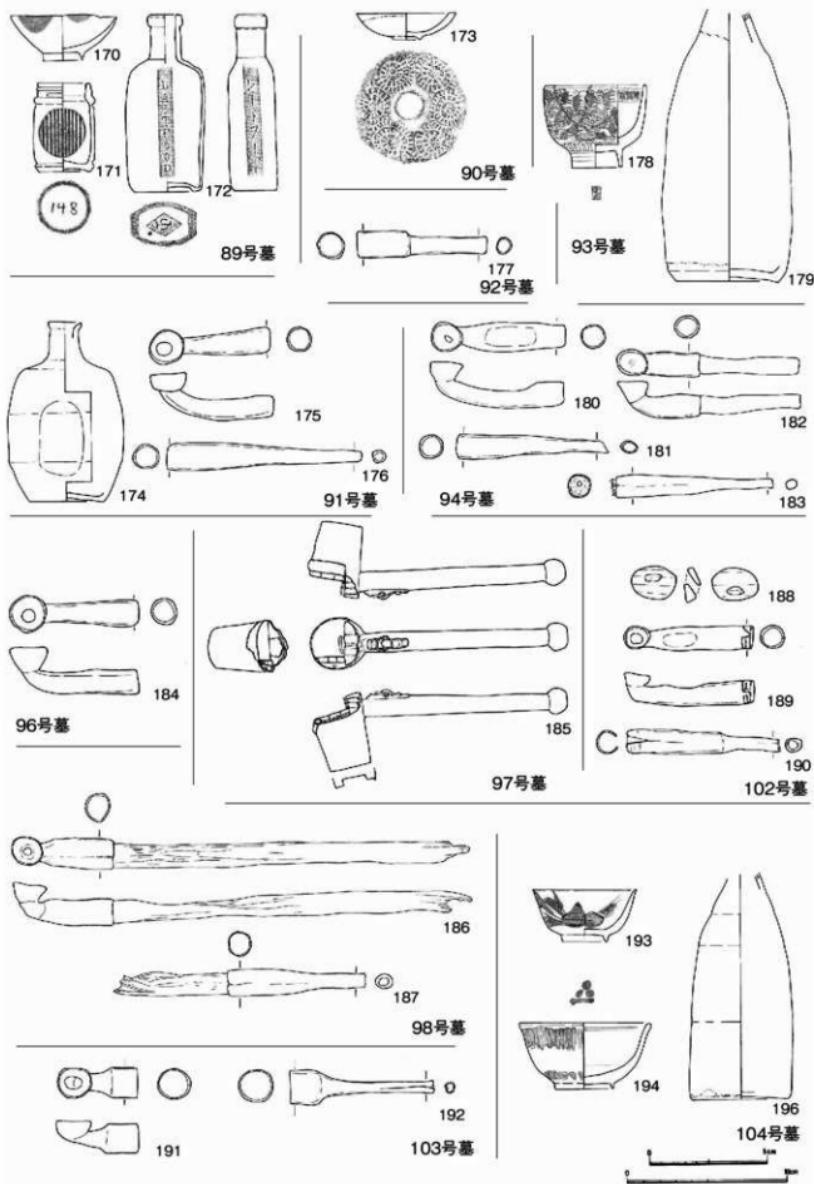
第19図 43～54号墓・副葬品



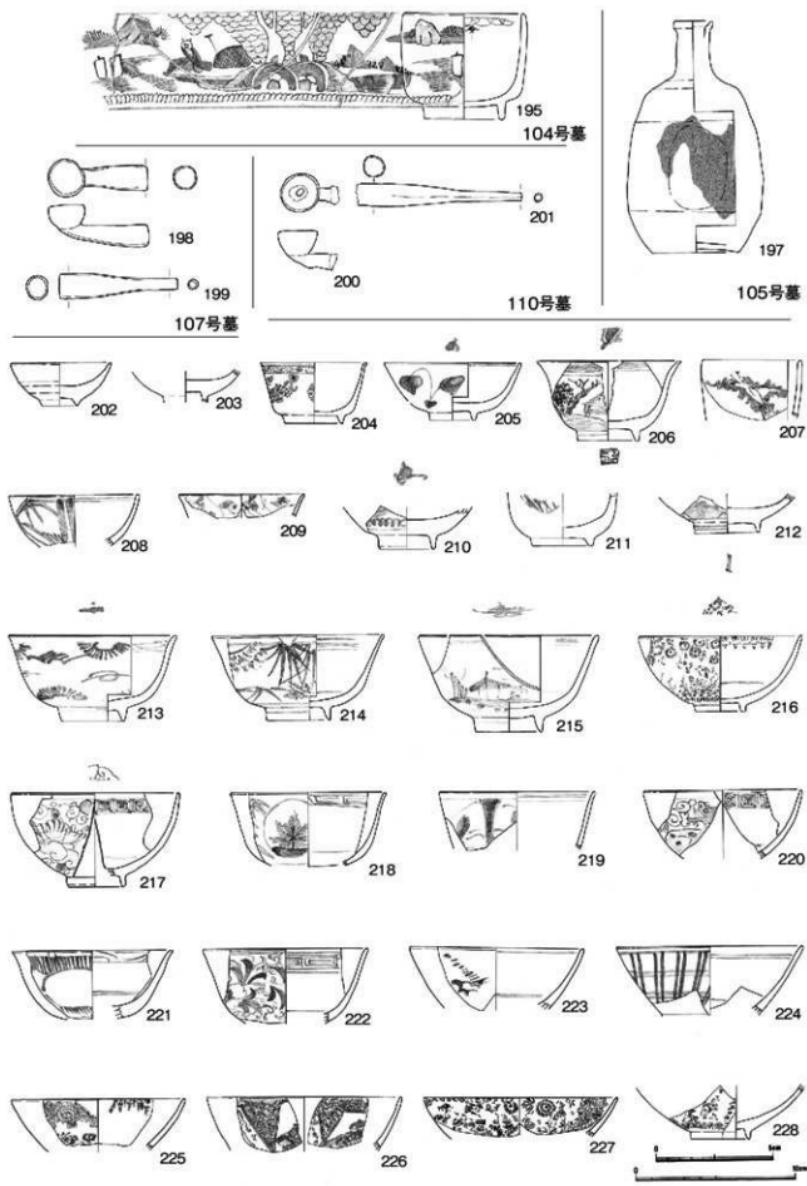
第20図 55~71号墓・副葬品



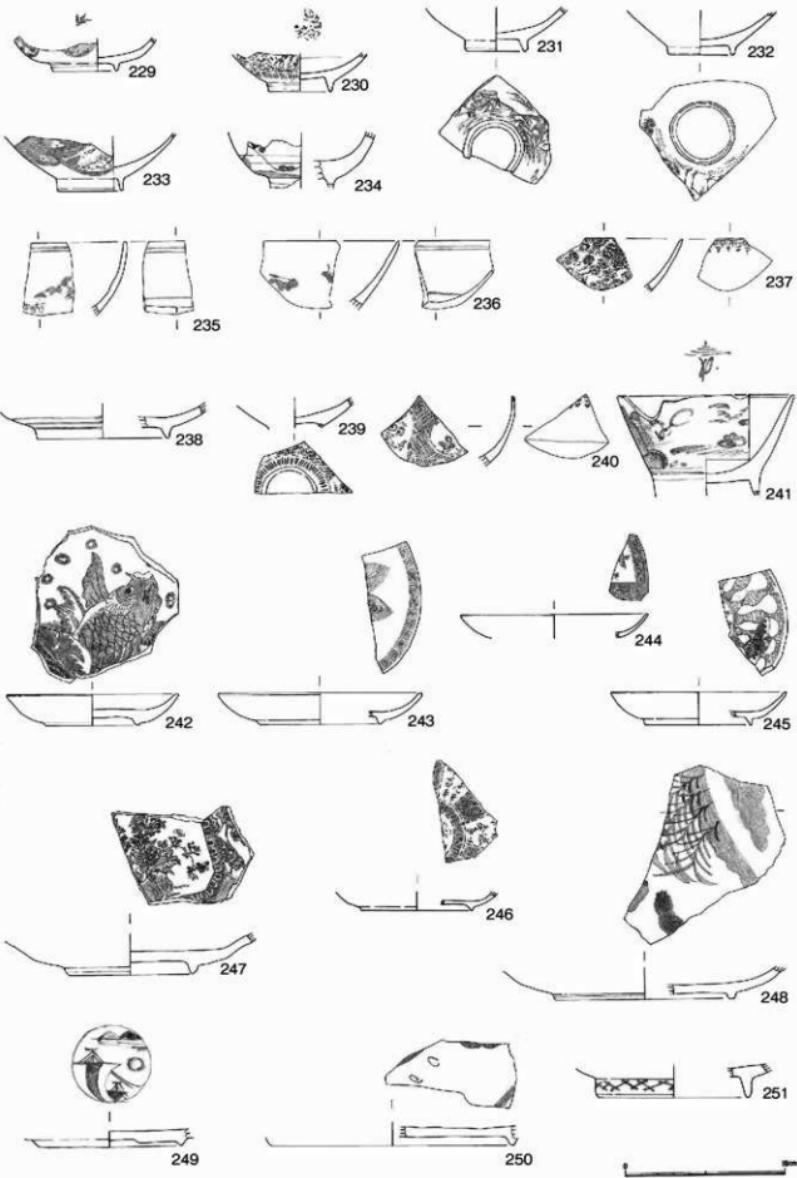
第21図 73～88号墓・副葬品



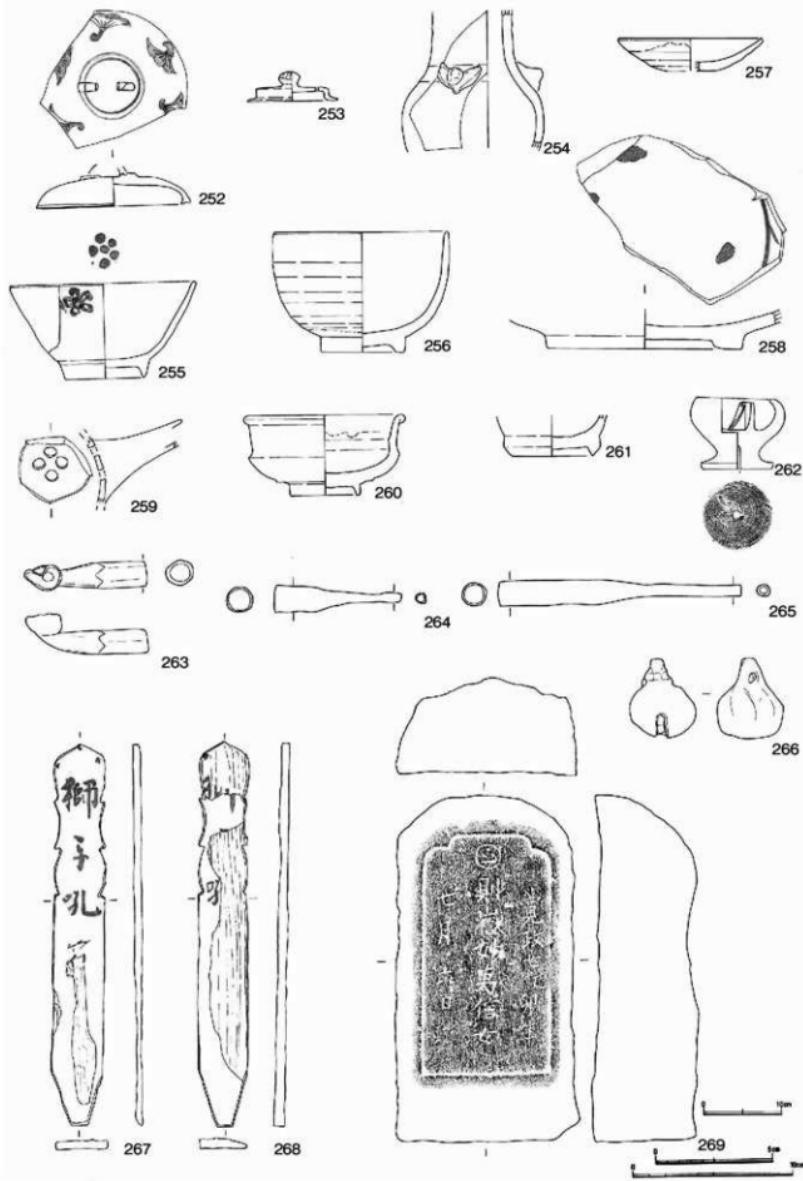
第22図 89~104号墓・副葬品



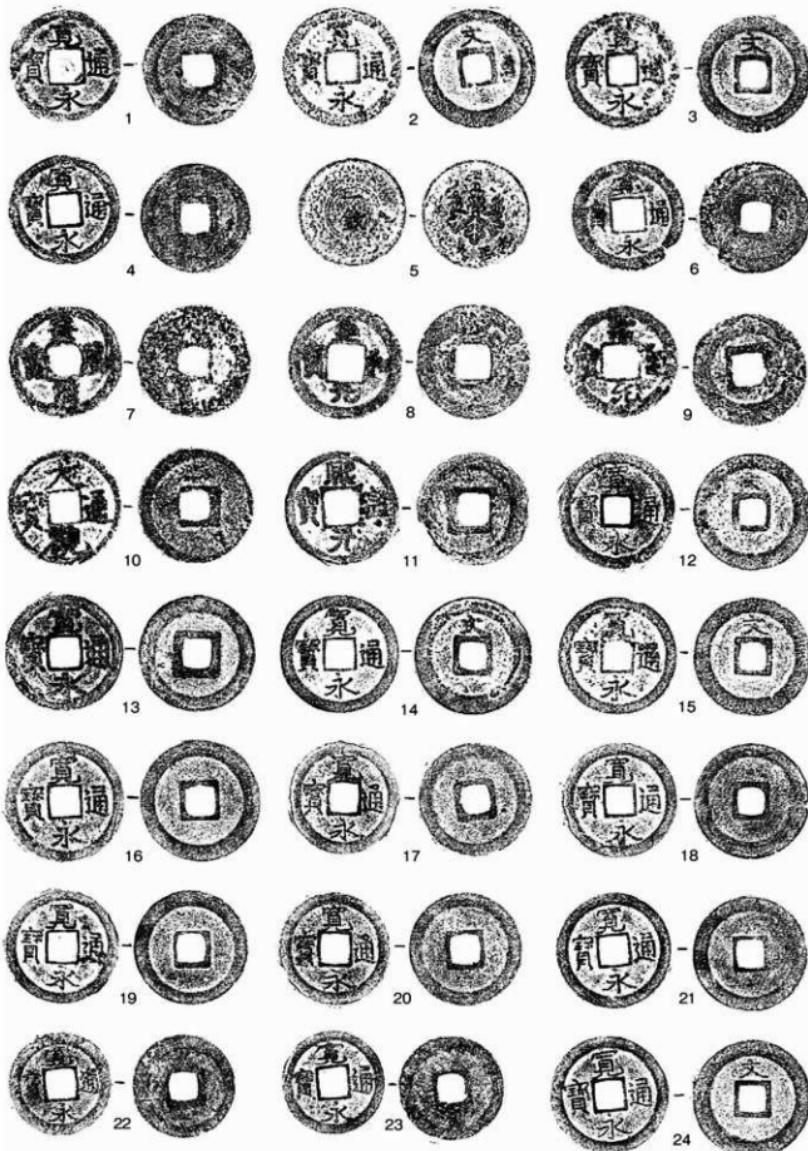
第23図 104～110号墓・副葬品



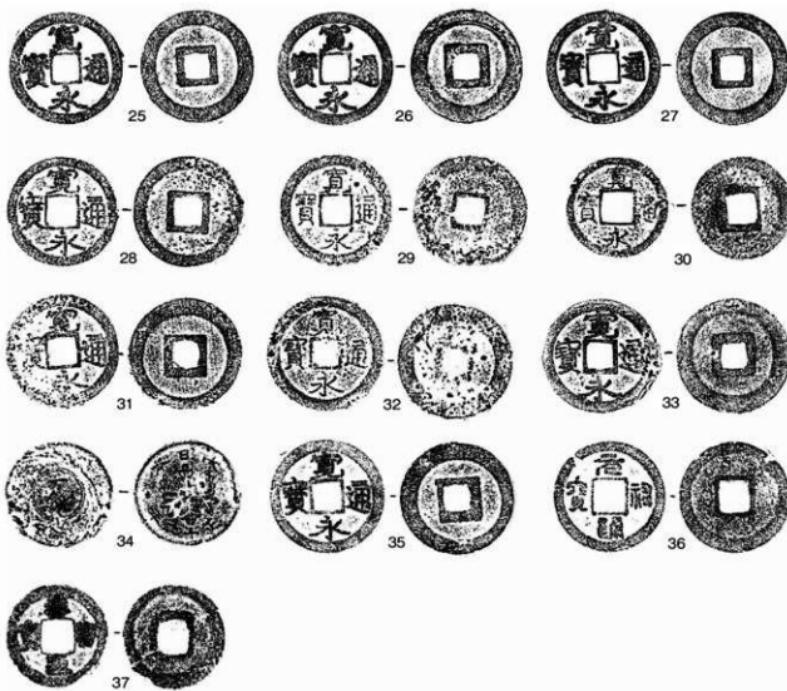
第24図 一括・出土遺物



第25圖 一括・出土遺物及出土品



第26図 7～109号墓・副葬品



第27図 112~117号墓・副葬品、溝・表採一括

小井川遺跡Ⅱ出土人骨分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小井川遺跡は、山梨県中巨摩郡田富町布施に所在し、釜無川左岸に広がる沖積低地上に位置する。新環状道路の建設に伴って発掘調査が行われており、14世紀初頭の紀年名入りの五輪塔などが確認され、また土坑中から多数の人骨が出土した。そこで、出土した人骨の年齢、性別など個体情報に関して検討を行うことにした。

1. 試 料

同定を行った試料は、計59基の土坑（遺構No11、20、21、21'、23、25、27、41、44、45、51、53-56、58、59、62-65、67、69、71、73-79、82、83、88-90、92-94、96-99、101-115）で確認された人骨で、ドットで取り上げられている。いずれも土葬骨であり、既にクリーニングされた状態にある。

2. 分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合・補強を行う。自然乾燥後、試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から部位の特定を行う。また、上腕骨、大腿骨、脛骨では、保存状態が良好である場合、全長を計測する。なお、年齢に関しては、小児が6～15歳程度、成年が16～20歳程度、壮年が20～39歳程度、老年が40～59歳程度、老年が60歳以上、成人が16歳以上を示す。なお、人体骨格各部の名称は、図1に示す。人骨の計測は、馬場（1991）に基づき、マルチ式に従った。

3. 結果および考察

(1) 遺構別出土状況

同定結果を一覧表として表1に示す。以下、各遺構ごとに結果を示す。

<No11>

頭蓋、上肢、下肢が検出される程度である。頭蓋は、顔面頭蓋と右側の破損が著しい。四肢骨は、いずれも骨端が破損している。歯式は、以下の通りである。

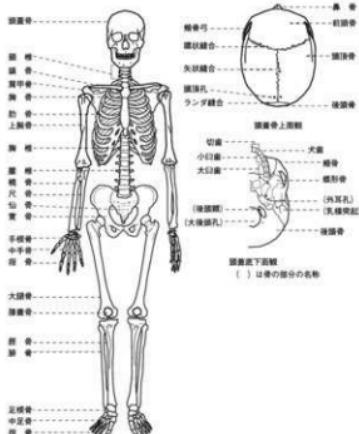


図1 人体骨格各部の名称

No11	右 上 頭								左 上 頭								備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	破 損				○	○	○	○ 未出	
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	P1 P2 M1 M2 M3									
右 下 頭								左 下 頭									

凡例) ○: 植立 ○: 遊離歯牙 △: 歯冠のみ検出 □: 歯槽のみ確認 ×: 歯槽吸収 -: 未確認状況不明
■は、歯冠歯を示す

左下顎骨でみると、第3大臼歯が未萌出段階にあり、第2大臼歯も咬耗がほとんど進んでいない。頭蓋骨は、矢状縫合・ラムダ縫合の内側・外側ともに閉じていない。また、四肢骨も小さい。これらのことから、本人骨は、成年前半程度と考えられる。性別は不明である。

<No20>

頭蓋2個と左右大腿骨がみられる程度である。頭蓋は、2体が一括試料として取り上げられていたため、骨の保存状態で個体判別を行い、No20 (A)、No20 (B)とした。

No20 (A)は、外後頭骨隆起が発達することから男性とみられる。また、矢状縫合の内側が閉じており、外側も閉じかけていることから、熟年後半以降と推定される。

No20 (B)は、外後頭骨隆起の発達が悪いことから女性と思われる。骨の大きさからみて成人に達していると考えられるが、詳細不明である。なお、左右大腿骨骨体は、全体的に華奢であることから、本頭蓋と同一個体の可能性がある。

<No21>

頭蓋、上肢、下肢が検出される程度である。外後頭骨隆起が発達することから男性と推定される。四肢骨等の大きさから成人に達しているとみられるが、詳細不明である。

<No21'>

比較的の保存状態が良好である。頭蓋、上肢帯、腕部、手部、下肢帯、腿部がみられる。ただし、四肢骨の両端は破損するものが多い。歯式は、以下の通りである。

No21'	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	—	—	—	○	—	○	○	○	○	○	—	○	○	—	—	—	—	—	—		
	×	○	×	×	○	○	○	○	□	○	○	○	□	×	×	×	×	×			
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
右 下 頭										左 下 頭											

凡例 ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 —：未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、外後頭骨隆起が発達しておらず、寛骨の大坐骨切痕が緩やかであることから、女性と考えられる。また、頭蓋を観察すると、環状・矢状縫合の内側が閉じ、外側も閉じかけ、大臼歯の歯槽部が吸収している箇所が多く、植立する右下顎第2大臼歯も咬耗が著しく進む。これらのことから、年齢は、老齢に達していると思われる。

なお、右下顎第2大臼歯では、頬側面の歯頸部に齶歯がみられる。

<No23>

頭蓋、体幹、上肢帯、腕部、腿部の大脚骨などがみられる。頭蓋も破片であり、四肢骨も両端が破損しており、全体的に保存状態が悪い。歯式は、以下の通りである。

No23	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	—	○	○	○	○	○	○	□	□	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—		
	破損	○	□	○	○	○	□	□	□	□	□	□	○	□	□	○	□	□	○		
	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3						
右 下 頭										左 下 頭											

凡例 ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 —：未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、眉上隆起の形状から女性とみられる。また、年齢は、左下顎第3大臼歯が確認されることから成人に達しているとみられ、第1-2大臼歯ともエナメル質が僅かに咬耗程度にとどまることから、壮年程度と考えられる。

<No25>

頭蓋と大腿骨片がみられる程度である。大腿骨骨体が華奢であり、外後頭隆起の形状から女性とみられる。年齢は、環状縫合および矢状縫合が内側・外側とも閉じていないことから、壮年程度と推定される。

<No27>

保存状態が悪く、右大腿骨遠位端、右脛骨遠位端、腓骨骨体が確認される程度であり、大半が四肢骨の破片である。本人骨は、四肢骨の大きさから、成人に達しているとみられるが、性別・年齢とも詳細不明である。

<No41>

頭蓋、遊離歯牙（右下顎第1大臼歯）、上肢帯、腕部、腿部が確認される程度である。四肢骨の両端は破損する。

本人骨は、外後頭隆起および眉上隆起の形状から男性とみられる。年齢は、3縫合の内側が閉じかけ、外側が閉じておらず、右下顎第1大臼歯の咬耗が進んでいないことから、壮年程度と考えられる。

<No44>

頭蓋、下顎骨、腿部、距骨がみられる程度である。四肢骨の両端は、破損する。歯式は、以下の通りである。

No44	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	△	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	-	△	-	△	-	-	-	-	-	△	-	△	-	○	○	○					
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	右 下 頭										左 下 頭										

凡例) ○：植立 ◎：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 -：未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、第3大臼歯が確認されたことから成人に達しており、大臼歯に咬耗がほとんどみられないことから壮年前半程度と考えられる。性別は、明らかにすることはできない。

<No45>

頭蓋、遊離歯牙（左上顎第2大臼歯・右上顎第1大臼歯）、四肢骨片が確認される。大臼歯の咬耗がエナメル質程度にとどまり、象牙質が露出していないことから、本人骨は成年～壮年前半の可能性がある。性別に関しては、不明である。

<No51>

左脛骨と四肢骨片が確認される程度である。本人骨は、脛骨の大きさから成人に達しているとみられる。ただし、性別・年齢とも詳細不明である。

<No53>

2体確認される。頭蓋の形状から男性個体と女性個体に区別される。男性個体No53（A）、女性個体No53（B）とする。なお、頸椎、腰椎、肋骨、指骨（基節骨）、右距骨は、個体識別ができなかつたためNo53（A）として表記した。胸椎は、全部で11個認められ、形状によりNo53（A）とNo53（B）を区別した。歯式は、以下の通りである。

No53 (A)	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	◎	◎	◎					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	△	△	△	○	○	-					
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
右 下 頸										左 下 頸											

凡例) ◎:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

No53 (B)	右 上 頸										左 上 頸										備考
	破損	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	◎	◎	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	○	○	○	未出				
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
右 下 頸										左 下 頸											

凡例) ◎:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

No53 (A) は、外後頭隆起から男性とみられる。ラムダ縫合は内側・外側ともに閉じていない。矢状縫合は、破損のため縫合状況を確認できない。歯牙は、左上顎第3大臼歯が確認され、第1~3大臼歯の咬耗が顕著でないことから、壮年前半程度とみられる。

No53 (B) は、外後頭隆起・乳様突起・眉上隆起の形状から女性と判断できる。3縫合は、内側・外即とも未縫合である。上顎第1~2大臼歯がみられるが、第3大臼歯が未萌出であることが観察される。これより、成年前半と思われる。本遺構から出土した上肢・下肢は、全体的に華奢で女性の可能性があることからNo53 (B) として取り扱った。なお、No53 (B) とした左脛骨の全長(319mm)を藤井式の推定身長式に当てはめると、推定身長は148.2cmである。

<No54>

頭蓋、胸椎、上肢帶、腕部、下肢帶、腿部が確認される。歯式は、次の通りである。

No54	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	破 損										M2	破損	
	-	-	-	-	-	-	-	-	破 損										○		
	×	×	×	□	□	□	□	×	×	□	○	○	□	×	×	□					
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
右 下 頸										左 下 頸											

凡例) ◎:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

寛骨の大生骨切痕の形状から、本人骨は男性と推定される。年齢は、下顎骨歯槽の多くが吸収しており、また胸椎に加齢に伴うとみられる骨増殖がみられることから、老年と思われる。

なお、左上顎第2大臼歯と左下顎犬歯に歯頸部齶歯が、左下顎第1小白歯に歯冠部齶歯が認められる。

<No55>

頭蓋、完存する左鎖骨が見られる程度である。歯式は、以下の通りである。

No.55	右 上 頸										左 上 頸										備考
	破損	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	破損					
	未出	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	右 下 頸										左 下 頸										
凡例) ○:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明 ■は、齶歯歯牙を示す																					

本人骨は、眉上隆起の形状から女性と判断される。環状縫合・矢状縫合が内側・外側ともに閉じておらず、完存する鎖骨の両端が化骨化していること、第3大臼歯が未萌出であり、第2大臼歯も咬耗がそれほど進んでいないことから、成年前半程度とみられる。

<No.56>

2体確認される。これをNo.56 (A)、No.56 (B)とする。骨の大きさが明らかに異なり、これにより個体識別を行った。歯式は、以下のとおりである。

No.56 (A)	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
	-	-	-	-	-	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□				
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
右 下 頸										左 下 頸											

凡例) ○:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

No.56 (B)	右 上 頸										左 上 頸										備考			
	破損	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3								
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
	M3	M2	M1	P2	P1	破 損				破 損				□	□	○	○							
	右 下 頸										左 下 頸													
凡例) ○:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明 ■は、齶歯歯牙を示す																								

No.56 (A) は、頭蓋がみられる。頭蓋が小さく、厚さも薄い。また、3縫合が内側・外側とも閉じていない。下顎骨の正中部が確認され、切歯、犬歯で永久歯が生えていることが確認される。このことから、本人骨は、小児後半程度と考えられる。性別は不明である。

No.56 (B) は、上顎骨、下顎骨、右鎖骨、四肢骨片が確認される。第3大臼歯が萌出しているが、萌出直後の状態にあり、第1-2大臼歯に咬耗がほとんどみられない。このことから、本人骨は、成年後半程度と考えられる。性別は、不明である。

<No.58>

頭蓋、腿部などが確認される。頭蓋は、眉上隆起、乳様突起、外後頭隆起などの部分を観察できない。全体的に四肢骨が華奢な雰囲気があることから、女性の可能性がある。矢状縫合の癒合状況を確認できないが、ラムダ縫合の内側が閉じ、外側が閉じていない。これより、本人骨は、熟年以降の可能性がある。

<No59>

2体確認される。これをNo59 (A)、No59 (B) とする。

No59 (A) は、頭蓋である。外後頭隆起が発達することから男性とみられる。環状縫合および矢状縫合の内側が閉じ、環状縫合と矢状縫合の外側が閉じかけている。これより、本人骨は、熟年後半以降とみられる。

No59 (B) は、四肢骨の骨体と遊離した歯牙である。骨体が極めて小さく、骨端が化骨化していない程度の大きさである。歯式は、以下の通りである。咬耗がほとんどみられないことから、脳頭蓋と別個体と判断される。永久歯であり、歯根が完全に形成されている。小児後半程度の可能性がある。性別に関しては、不明である。

No59 (B)	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
右 下 頭										左 下 頭											

凡例) ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸收 -：未確認状況不明

■は、齶歯歯牙を示す

<No62>

頭蓋が出土する程度である。外後頭隆起および眉上隆起の形状から女性と推定される。環状縫合と矢状縫合の内側が閉じ、外側が閉じていないことから、熟年程度と考えられる。

<No63>

左上腕骨骨体、左右大腿骨骨体が出土する。骨の大きさから成人と判断されるが、年齢、性別ともに不明である。

<No64>

下顎骨、腕部、距骨が確認される。歯式は、以下の通りである。

No64	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	破損										□	□	□	□	□	○	○	○	○	未出	
右 下 頭										左 下 頭											

凡例) ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸收 -：未確認状況不明

■は、齶歯歯牙を示す

下顎骨は、第3大臼歯が未萌出である。咬耗をみると、第1大臼歯で象牙質が僅かに点状に露出する程度であり、第2大臼歯もエナメル質が咬耗する程度である。これらのことから、成年前半程度と考えられる。性別については、不明である。

<No65>

頭蓋、頸椎、胸椎、腰椎、肋骨、上肢帯、腕部、中手骨、下肢帯、脚部、距骨、踵骨などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No65	右 上 頭										左 上 頭										備考
	破損	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	破損					
	×	×	□	○	□	□	○	□	□	□	□	□	□	×	×	□					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	右 下 頭									左 下 頭											
凡例) ○:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明 ■は、齶歯歯牙を示す																					

本人骨は、大坐骨切痕の形状から、男性と判断される。頭蓋は、環状・矢状縫合の内側が閉じ、外側も一部閉じかけ、上頸第1~2大臼歯の歯槽が吸収する。また、胸椎・腰椎において加齢に伴うとみられる骨増殖が確認される。これらのことから、年齢は、老年と考えられる。

なお、左大腿骨の全長(413mm)を藤井式の推定身長式に当てはめると、推定身長は156.8cmである。

<No67>

頭蓋が2個出土しており、これをNo67 (A)とNo67 (B)とする。頭蓋の他に、腕部、月状骨、指骨、腿部などが確認されるが、個体識別できず、No67 (A)として表記した。歯牙は、咬耗状態で区別し、咬耗の強いものをNo67 (A)、咬耗の弱いものをNo67 (B)とした。歯式は、以下の通りである。

No67 (A)	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	○	○	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	○	○	-					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	-					
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	右 下 頭									左 下 頭											
凡例) ○:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明 ■は、齶歯歯牙を示す																					

No67 (B)	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	○	○	-	-	-					
	△	△	△	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	右 下 頭									左 下 頭											
凡例) ○:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明 ■は、齶歯歯牙を示す																					

No67 (A)は、脳頭蓋の各縫合とも内側が閉じ、また矢状縫合の外側が一部閉じていることから、老年後半~老年と考えられる。性別は不明である。

No67 (B)は、環状縫合と矢状縫合の内側が閉じており、外側が閉じていないことから、No67 (A)よりも若干若い老年程度とみられる。性別は不明である。

<No69>

上顎骨、椎骨、肋骨、肩甲骨、腕部、中手骨、寛骨、腿部、足部などが確認される。歯式は以下の通りである。

No.69	右 上 頬										左 上 頬										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	△	△	-	△	-	-	-	△	-	○	○	○	-					
	-	-	-	-	△	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
右 下 頬										左 下 頬											

凡例) ○: 植立 ○: 遊離歯牙 △: 歯冠のみ検出 □: 歯槽のみ確認 ×: 歯槽吸収 -: 未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

本人骨は、寛骨の大坐骨切痕の形状から女性とみられる。上顎大臼歯の咬耗状態はエナメル質が咬耗する程度であり、象牙質が露出しない。このことから、成年程度と思われる。

<No71>

2体確認される。これをNo71 (A)、No71 (B) とする。

No71 (A) は、腰椎・椎骨・仙骨・肋骨・橈骨・尺骨・中手骨・寛骨・大腿骨・脛骨・腓骨などが確認される。本人骨は、大坐骨切痕の形状から女性と考えられる。年齢は、四肢骨の骨端や寛骨の腸骨稜が化骨化し、加齢によると見られる骨増殖が僅かであるが確認されることから、老齢に達していると思われる。

No71 (B) は、No71 (A) と異なる左尺骨である。骨体のみの出土である。骨体の大きさから成人とみられるが、詳細不明である。

<No73>

2体確認される。これをNo73 (A)、No73 (B) とする。歯式は、以下の通りである。

No.73 (A)	右 上 頬										左 上 頬										備考	
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3						
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	○	×	×	×	×	×	×	×	破 損													
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	左 下 頬													
右 下 頬										左 下 頬												

凡例) ○: 植立 ○: 遊離歯牙 △: 歯冠のみ検出 □: 歯槽のみ確認 ×: 歯槽吸収 -: 未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

No.73 (B)	右 上 頬										左 上 頬										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
右 下 頬										左 下 頬											

凡例) ○: 植立 ○: 遊離歯牙 △: 歯冠のみ検出 □: 歯槽のみ確認 ×: 歯槽吸収 -: 未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

No73 (A) は、下頸骨・胸椎・尾骨・肋骨・上肢・下肢などがみられる。大坐骨切痕の形状から男性と推定される。下頸骨は、左側が破損しているが、右側が第3大臼歯を除き歯槽が吸収する。これより、熟年後半以降とみられ、老齢に達している可能性もある。

No73 (B) は、左右側頭骨・右上腕骨・左大腿骨・大腿骨近位端が確認される。全体的に骨が小さく、大腿骨近位端が未化骨で骨端が外れている。左上顎小白歯については、歯根先端が僅かであるが形成されてい

ないことからNo73 (B) に属すると判断できる。これらの状況から、本人骨は、小児後半程度とみられる。性別は不明である。

なお、No73 (A) とした左脛骨の全長 (308mm) を藤井式の推定身長式に当てはめると、推定身長は150.2 cmである。

<No74>

2体確認される。これをNo74 (A)、No74 (B) とする。

No74 (A) は、下頸骨、腰椎、仙骨、頸骨?、腕部、手部、下肢帯、腿部、足部などが確認される。本人骨は、大坐骨切痕の形状から男性とみられる。年齢は、上下頸骨の大臼歯に咬耗がほとんどみられないことから、成年～壯年前半程度と思われる。歯式は、以下の通りである。

No74 (A)	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—					
	—	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					

凡例 ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 —：未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

No74 (B)は、No74 (A)と異なる左桡骨骨体である。骨体の大きさからみて成人に達しているとみられるが、年齢・性別に関して詳細を明らかにすることはできない。

<No75>

頭蓋、頸椎、椎骨、肋骨、上肢帯、腕部、腿部、中足骨が確認される。歯式は、以下の通りである。

No75	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	—	—	—	—	—	○	—	○	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	未出	○	○	□	○	□	□	□	□	○	○	○	○	○	○	○	破損	○	○	破損	
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1					M2				

凡例 ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 —：未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

本人骨は、全体的に四肢骨が小さく、下顎骨において第3大臼歯が萌出しておらず、歯牙もほとんど咬耗していないことから、小児後半程度と思われる。

<No76>

2体確認される。これをNo76 (A)、No76 (B) とする。

No76 (A) は、左右側頭骨、頭骨片、右桡骨、右大腿骨、左右腓骨、四肢骨片などが確認される。骨の大きさ等からみて成人と判断されるが、年齢・性別に関して詳細不明である。歯式は、以下の通りである。

No76 (B) は、左下顎小臼歯である。歯根先端が完全に形成されていないことから、小児後半程度と考えられる。性別は不明である。

No76 (A)	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	-	○	△	○	△	△	△	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
右 下 頸										左 下 頸											

凡例) ○ : 植立 ○ : 遊離歯牙 △ : 歯冠のみ検出 □ : 歯槽のみ確認 × : 歯槽吸収 - : 未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

<No77>

頭蓋、頸椎、腰椎、椎骨、肋骨、左肩甲骨、腕部、手部、寛骨、腿部、足部などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No77	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
	○	-	-	-	-	-	-	×	×	□	□	×	○	×	×	-	-	-	-	-	
右 下 頸										左 下 頸											

凡例) ○ : 植立 ○ : 遊離歯牙 △ : 歯冠のみ検出 □ : 歯槽のみ確認 × : 歯槽吸収 - : 未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、外後頭隆起の形状から男性とみられる。また、頭蓋は、3縫合の内側が閉じ、外側も閉じかけている。下顎骨は、第1大臼歯・第2大臼歯など、歯槽が吸収する箇所がみられる。これらのことから、年齢は老年程度とみられる。

<No78>

頭蓋、腕部、腿部などが確認される。歯牙では、遊離した左上顎中切歯、破損した大臼歯の歯冠部が確認される程度である。

本人骨は、環状縫合と矢状縫合の内側が閉じかけており、外側が閉じていないことから、壮年程度と思われる。性別は、不明である。

<No79>

頭蓋、頸椎、腰椎、椎骨、肋骨、腕部、腿部などが確認される。本人骨は、外後頭隆起および乳様突起が発達しないことから女性と思われる。年齢は、3縫合の内側が閉じ、環状縫合および矢状縫合の外側も一部閉じかけていることから、熟年後半以降とみられる。

<No82>

頭蓋、頸椎、肋骨、鎖骨?、腕部、手部、寛骨、腿部、足部などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No82	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	○	○	○	○	○	○	○	○	□	-	○	-	○	○	○	○	○	○	○	○	
	○	-	-	○	○	○	-	○	-	○	○	○	○	○	○	-	○	-	○	-	
右 下 頸										左 下 頸											

凡例) ○ : 植立 ○ : 遊離歯牙 △ : 歯冠のみ検出 □ : 歯槽のみ確認 × : 歯槽吸収 - : 未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、大坐骨切痕、眉上隆起、外後頭隆起の形状から女性と判断される。歯牙の咬耗は弱い。頭蓋は、内側がほぼ閉じておらず、外側が閉じていない。これらのことから、年齢は、壮年後半程度とみられる。

なお、左大腿骨の全長（379mm）を藤井式の推定身長式に当てはめると、推定身長は146.1cmである。また、右下顎第3大臼歯？は、歯冠部咬合面に火口状の齶歯がみられる。また、右上顎第1～2小白歯は、齶歯のために歯冠が崩壊し、歯根のみ残存する程度である。

<No83>

頭蓋、胸部、腿部などが確認される。本人骨は、外後頭隆起と乳様突起の形状から女性とみられる。年齢は、環状縫合および矢状縫合の内側が閉じており、外側も一部閉じかけている。これより、年齢は、熟年後半以降とみられる。

<No88>

頭蓋、腰椎、上肢帯、腕部、下肢帯、腿部、中足骨などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No88	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	破損	M3					
	□	◎	◎	□	□	□	□	□	□	○	○	□	□	□							
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—					
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	右 下 頭								左 下 頭												

凡例) ◎：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 —：未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、外後頭隆起および乳様突起の形状から女性とみられる。骨端の癒合状況をみると、鎖骨の近位端が未化骨で外れ、脛骨骨端の化骨化が終了している。歯牙の状況は、第3大臼歯が未萌出であり、第1大臼歯に咬耗がほとんどみられない。頭蓋の3縫合は、内側および外側とも閉じていない。これらの状況から、年齢は、成年後半程度とみられる。

なお、左脛骨の全長（300mm前後）を藤井式の推定身長式に当てはめると、推定身長は144cm前後である。

<No89>

頭蓋、胸部、腿部などが確認される程度である。頭蓋の3縫合は、内側、外側ともに閉じていない。四肢骨は小さく、成人に達していない程度の大きさである。また、下顎骨でみると、歯槽が破損しているが、臼歯が萌出してない状態であることが観察される。これらのことから、小児程度と思われる。性別は、不明である。

<No90>

下顎骨、椎骨、肋骨、上肢帯、腕部、腿部などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No90	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—					
	未出	破損	◎	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□					
	M3		M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1									
	右 下 頭								左 下 頭												

凡例) ◎：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 —：未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、歯槽の状況からみて、中切歯～第2大臼歯まで生え、第3大臼歯が未萌出の状態にあることが観察される。また、植立する右第1大臼歯、遊離した左上顎小白歯は、咬耗がほとんどみられない。これらのことから、小児後半～成年前半程度とみられる。性別は不明である。

<No92>

頭蓋、頸椎、胸椎、腰椎、肋骨、肩甲骨、腕部、手部、下肢帶、腿部、足部などが確認される。歯式は、以下の通りである。

本人骨は、大坐骨切痕、外後頭隆起、乳様突起の形状から男性とみられる。年齢は、3縫合の内側が閉じ、外側が閉じていないこと、第3大臼歯が萌出していること、歯牙の咬耗がエナメル質程度にとどまることなどから、壯年程度とみられる。

No92	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	×	○	○	□	×	○	□	□	○	□	□	●	□	○	○	○	□				
	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	○	○	○			
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					

凡例) ●：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 —：未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

なお、右大腿骨の全長(381mm)を藤井式の推定身長式に当てはめると、推定身長は149.0cmである。また、右上顎第3大臼歯は、歯槽が吸収しており、生前に歯牙が脱落していたとみられる。また、左上顎第1小白歯は、咬合面からP2側歯頸部にかけて齶歯により歯冠が崩壊する。

<No93>

頭蓋、頸椎、胸椎、椎骨、肋骨、上腕骨、中手骨、指骨、大腿骨などが確認される。

本人骨は、乳様突起が発達しないことから、女性とみられる。年齢は、3縫合の内側が閉じ、外側も一部閉じていることから、熟年後半以降とみられる。ただし、下顎骨は、第3大臼歯が未萌出であり、咬耗が進んでおらず成年後半程度と思われ、別個体の可能性がある。この下顎骨は、全体的に華奢であることから女性の可能性がある。よって、下顎骨と、頭蓋が別個体の可能性もあり、結果表では下顎骨をNo93 (B) とし、それ以外をNo93 (A) として示した。No93 (B) とした個体の歯式は、以下の通りである。

No93 (B)	右 上 頭										左 上 頭										備考 脳頭蓋と 別個体
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	未出	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	未出	
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					

凡例) ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 —：未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

<No94>

頭蓋、鎖骨？、肩甲骨、腕部、腿部、距骨がみられる。歯式は、以下の通りである。

No94	右 上 頸											左 上 頸								備考	
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
	破 損																○	○	○		
	右 下 頸								左 下 頸								P1	P2	M1	M2	M3
	右 下 頸											左 下 頸									
凡例) ○:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明 ■は、齧歯歯牙を示す																					

本人骨は、外後頭隆起が発達しておらず、四肢骨も華奢であることから、女性とみられる。年齢は、第3大臼歯が萌出していることから成人に達しており、頭蓋の3縫合が内側および外側とも閉じていないことから、壮年程度とみられる。

<No96>

頭蓋、左尺骨、腿部などがみられる。歯式は、以下の通りである。

本人骨は、外後頭隆起、眉上隆起、乳様突起の状況から、男性と思われる。年齢は、頭蓋3縫合の内側が閉じ、ラムダ縫合の一部と環状縫合および矢状縫合も閉じており、歯槽が吸収する箇所が多く、歯牙の咬耗も強いことから、老年程度とみられる。

No96	右 上 頸											左 上 頸								備考			
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3							
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
	×	×	□	□	□	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×					
	破損								M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
	右 下 頸											左 下 頸											
凡例) ○:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明 ■は、齧歯歯牙を示す																							

<No97>

下頸骨、頸椎、胸椎、肋骨、上肢帶、腕部、手部、下肢帶、腿部、足部などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No97	右 上 頸											左 上 頸								備考	
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
	○	○	○	○	○	○	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○			
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	右 下 頸		左 下 頸		
	右 下 頸											左 下 頸									
凡例) ○:植立 ○:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 -:未確認状況不明 ■は、齧歯歯牙を示す																					

本人骨は、全体的に頑丈であり、男性の可能性がある。年齢は、下顎第3大臼歯が萌出途中であり、歯根が4/5程度しか形成されていないことから、成年後半程度とみられる。

なお、右脛骨の全長(332mm)を藤井式の推定身長式に当てはめると、推定身長は156.0cmである。

<No98>

下頸骨、頸椎、胸椎、腰椎、椎骨、胸骨、肋骨、上肢帯、腕部、中手骨、指骨、下肢帯、腿部、足部などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No98	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	○	○	-	-	-	-	○	-	-	-	○	-	-	○	-		
	×	■	□	○	○	○	□	□	□	□	○	□	□	○	○	×	○	×			
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	右 下 頸										左 下 頸										

凡例) ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 -：未確認状況不明

■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、大生骨切痕の形状から女性とみられる。年齢は、下顎の左第1大臼歯の歯槽が吸収しており、左右第3大臼歯の歯槽も吸収していることから、熟年以降の可能性がある。

なお、右上腕骨の全長(298mm)を藤井式の推定身長式に当てはめると、推定身長は152.2cmである。また、左上顎第2大臼歯の頬側歯頸部、右第2大臼歯の遠心面歯頸部には、齶触がみられる。

<No99>

頭蓋、頸椎、胸椎、肋骨、上肢帯、腕部、中手骨、寛骨、腿部、距骨、踵骨などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No99	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	□	□	□	○	○	○	□	○	○		
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	右 下 頸										左 下 頸										

凡例) ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 -：未確認状況不明

■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、第3大臼歯が萌出していること、頭蓋のラムダ縫合と矢状縫合の内側が閉じかけ、外側が閉じていないことから、壮年程度とみられる。性別は不明である。

<No101>

頭蓋、頸椎、胸椎、腰椎、仙椎、上肢帯、腕部、中手骨、下肢帯、腿部などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No101	右 上 頸										左 上 頸										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	未出	○	○	○	○	□	□	○	□	□	□	○	○	○	○	○	○	○	○		
	未出	○	○	○	○	○	○	○	□	□	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	右 下 頸										左 下 頸										

凡例) ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 -：未確認状況不明

■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、仙椎、鎖骨、大腿骨頭、上腕骨両端、頭骨近位端、寛骨、寛骨脇骨棱、桡骨近位端が未化骨の状態にあり、中切歯～第2大臼歯までが萌出し、第3大臼歯が萌出の前段階にあることから、15～17歳程度とみられる。性別は、不明である。

<Na102>

頭蓋、頸椎、椎骨、肋骨、肩甲骨、腕部、指骨、下肢帶、腿部、足根骨などが確認される。下顎骨が2点確認され、これをNa102 (A)、Na102 (B)とする。頭蓋以外については、個体識別が不可能であったため、Na102 (A)にまとめている。歯式は、以下の通りである。

Na102 (A)	右 上 頭										左 上 頭										備考
	破損	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	破損					
	未出	○	○	○	○	○	○	□	○	□	○	○	○	○	○	○	未出				
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
右 下 頭										左 下 頭											

凡例) ○: 植立 ○: 遊離歯牙 △: 歯冠のみ検出 □: 歯槽のみ確認 ×: 歯槽吸収 -: 未確認状況不明
■: 融合歯牙を示す

Na102 (B)	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	△	△	-	-	-	-	-	-	△	△	△	△	△	△	-					
	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	□					
右 下 頭										左 下 頭											

凡例) ○: 植立 ○: 遊離歯牙 △: 歯冠のみ検出 □: 歯槽のみ確認 ×: 歯槽吸収 -: 未確認状況不明
■: 融合歯牙を示す

Na102 (A)は、外後頭隆起、乳様突起、眉上隆起、大坐骨切痕などの形状から男性とみられる。頭蓋の縫合状況は、3縫合の内側が閉じ、外側も一部閉じている。また、歯牙の咬耗も進み、各歯牙とも象牙質が露出している。これより、年齢は、熟年後半程度とおもわれる。なお、本人骨は、第3大臼歯が未萌出である。

Na102 (B)の下顎骨は、左第3大臼歯以外の歯槽が全て吸収する。これより、本人骨で熟年以上と判断される。遊離した上顎歯牙は、第2大臼歯に咬耗があまりみられないが、第1大臼歯をみると象牙質が歯冠ほぼ全面に露出する程度である。下顎歯牙が早い段階で抜け落ちたので咬耗がそれほど進んでいないのかもしれない。

なお、Na102 (A)とした左大腿骨の全長(428mm)と右大腿骨の全長(430mm)を、藤井式の推定身長式に当てはめると、推定身長は160.6cmである。

<Na103>

頭蓋、腕部、中手骨、基節骨、腿部、足部などが確認される。頭蓋は、外後頭隆起が発達せず、環状縫合の内側が閉じ、外側も一部閉じている。下顎骨は、正中部～右下顎枝付近まで残るが、歯槽が全て吸収している。これらのことから、本人骨は、老齢に達した女性とみられる。頭蓋以外でみると、左大腿骨が2個出土する。一つは、骨体が細く、華奢であることから、女性的であり、頭蓋と同一個体の可能性がある。残る左右大腿骨は、形状から見て同一個体とみられ、粗線が発達することから男性的である。また、他の腕部、腿部も比較的頑丈で、男性的であることから、これらが同一個体の可能性がある。骨の大きさから、成人に達しているとみられるが、詳細不明である。

このように遺構内から2体確認されることから、表中では老齢に達した女性をNa103 (A)、成人男性?を

Na103 (B)として表記し、個体識別が不可能であった部位については、Na103 (B)にまとめた。なお、Na103 (A)とした個体の歯式は、以下の通りである。

Na103 (A)	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	破 損					x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
右 下 頭										左 下 頭											

凡例) ○：植立 ◎：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 -：未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

<Na104>

頭蓋、胸椎、腰椎、椎骨、仙骨、肋骨、上肢帯、腕部、中手骨、指骨、下肢帯、腿部、中足骨などが確認される。歯式は、以下の通りである。

Na104	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	x	○	○	○	○	○	○	□	□	□	□	○	○	○	○	○	○	□			
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					

凡例) ○：植立 ◎：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 -：未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

本人骨は、寛骨の大坐骨切痕が鋭角的であり、頭蓋の乳様突起が発達することから、男性とみられる。頭蓋の縫合状況については、3 縫合とも内側が閉じ、矢状縫合と環状縫合の外側が閉じかけている。歯牙をみると、右上顎第3大臼歯の歯槽が吸収し、また部分的に象牙質が露出する程度まで咬耗が進む。また、胸椎・腰椎に加齢に伴うとみられる骨増殖がみられる。これらのことから、年齢は老年程度と思われる。

なお、左上腕骨の全長(283mm)を、藤井式の推定身長式に当てはめると、推定身長は153.0cmである。

<Na105>

頭蓋、腕部、腿部、距骨、蹠骨などが確認される。歯式は、以下の通りである。

Na105	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	x	○	○	○	×	×	×	□	×	□	△	×	○	○	×	×					
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					

凡例) ○：植立 ◎：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 -：未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

本人骨は、外後頭隆起および眉上隆起の形状から男性とみられる。年齢は、頭蓋 3 縫合の内側が閉じ、外側も閉じかけていること、歯牙の咬耗が著しく象牙質が露出し歯槽が吸収する箇所もみられることなどから、老年と思われる。

なお、左下顎第1大臼歯、右下顎第2小白歯～第3大臼歯には、歯頸部から歯冠部にかけて齶歯がみられる。

特に左右第1大臼歯の歯頸部～歯冠部にかけて、右第2小白歯と第2大臼歯の歯冠部全面が齶歯により崩壊している。

<No106>

肋骨、左鎖骨、腕部、左脛骨、足部などが確認される。全体的に骨が小さく、僅かに左上腕骨遠位端が未化骨状態であることが観察される。これらのことから、本人骨は、小児後半～成年前半程度と思われる。性別は不明である。

<No107>

頭蓋、頸椎、胸椎、腰椎、椎骨、肋骨、上肢帯、腕部、手根骨、指骨、下肢帯、腿部、足根骨、中足骨などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No107	右 上 頭										左 上 頭										備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	右 下 頭								左 下 頭												

凡例) ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 —：未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、大坐骨切痕、眉上隆起、乳様突起の形状から男性とみられる。年齢は、頭蓋3縫合の内側が閉じ、外側が閉じていないこと、第3大臼歯が萌出すること、象牙質が点状に露出する程度の咬耗であることから、壮年程度とみられる。

<No108>

頭蓋、四肢骨の破片がみられる程度である。本人骨は、眉上隆起がやや突出しており、男性的である。年齢は、環状縫合と矢状縫合の内側が閉じ、外側も一部閉じかけていることから、熟年後半以降と思われる。

<No109>

頭蓋、頸椎、肋骨、肩甲骨、腕部、手部、下肢帯、大腿骨、足根骨などが確認される。歯式は、以下の通りである。

No109	右 上 頭										左 上 頭										備考 右下顎に埋没歯牙有
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3					
	—	○	○	□	○	○	—	○	○	○	—	—	○	○	—	—	—	—	—		
	○	×	□	○	○	—	—	—	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—		
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	□ P2	M1	M2	M3					
	右 下 頭								左 下 頭												

凡例) ○：植立 ○：遊離歯牙 △：歯冠のみ検出 □：歯槽のみ確認 ×：歯槽吸収 —：未確認状況不明
■は、齶歯歯牙を示す

本人骨は、乳様突起が発達することから男性と思われる。頭蓋の縫合を観察することができないが、第1大臼歯で象牙質が露出し、第2大臼歯の咬耗がそれほど進んでいないことから、年齢は壮年後半～熟年半程度の可能性がある。なお、左下顎第2小白歯の遠心面歯頸部には齶歯がみられる。

<No110>

部位不明の破片がみられる程度で、年齢・性別とも詳細不明である。

<Na111>

左大腿骨骨体や四肢骨片などが確認される程度で、詳細不明である。

<Na112>

頭蓋、腕部、大腿骨などが確認される。歯式は、以下の通りである。

本人骨は、環状縫合の内側が閉じ、外側が閉じていないことから、熟年程度と思われる。性別に関しては、不明である。

Na112	右 上 頭												左 上 頭												備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3									
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	□	□	□	○	□	□	—	□	□	□	○	○	○	○	○	□	□	□	□	□	□	□	□		
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	右 下 頭								
右 下 頭												左 下 頭												備考	

凡例) ○:植立 □:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 —:未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

<Na113>

部位不明の破片がみられる程度で、年齢・性別とも詳細不明である。

<Na114>

頭蓋が確認される。本人骨は、外後頭隆起が発達することから男性と思われる。年齢は、ラムダ縫合と矢状縫合の内側が閉じ、矢状縫合の外側が閉じかけていることから、熟年後半以降と思われる。

<Na115>

頭蓋が確認される。歯式は、以下の通りである。

Na115	右 上 頭												左 上 頭												備考
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3									
	—	—	—	—	—	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—	—		
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	右 下 頭								
右 下 頭												左 下 頭												備考	

凡例) ○:植立 □:遊離歯牙 △:歯冠のみ検出 □:歯槽のみ確認 ×:歯槽吸収 —:未確認状況不明
■は、齧歯歯牙を示す

本人骨は、外後頭隆起が発達しないことから、女性と思われる。また、頭蓋は、矢状縫合の内側が閉じ、外側も一部閉じかけ、左上顎の歯槽が全て吸収する。これらのことから、年齢は、老年に達していたと思われる。

(2)まとめ

本遺跡から出土した明治時代の人骨について表2に性別・年齢などをまとめた。その結果、58基の土坑からは、70体の遺体が確認された。性別の内訳をみると、男性18体、男性の可能性がある個体3体、女性18体、女性の可能性がある個体2体、性別不明29体となる。ただし、遺構が重複することもあると思われ、搅乱を受けていることもあり、発掘調査所見と併せて検討することで個体数に若干の変更があると思われる。

年齢でみると、小児程度6体、小児後半程度の可能性がある個体1体、小児後半～成年前半程度2体、成年程度9体、成年～壮年前半2体、壮年11体、壮年後半～熟年前半の可能性がある個体1体、熟年3体、熟

年以降13体、老齢10体、成人9体、不明3体であり、熟年以降の個体が特に多いというわけではない。

大腿骨、脛骨、上腕骨の全長が得られた個体は、男性5体、女性の可能性がある個体1体、女性4体の計10体である。これら骨全長から藤井式により身長を推定した。なお、男性の可能性がある個体に関しては、男性として取り扱っている。その結果は、男性が150~160cm前後、女性が145~152cm前後であった。平本(1972)によると、藤井式の推定身長式で求めた近代初期の身長推定は、男性が最小値140.12cm、最大値167.04cm、平均値155.31cm、女性が最小値135.41cm、最大値152.88cm、平均値144.76cmとされている。本遺跡で出土した人骨は、これらと大きく離れるものでない。

引用文献

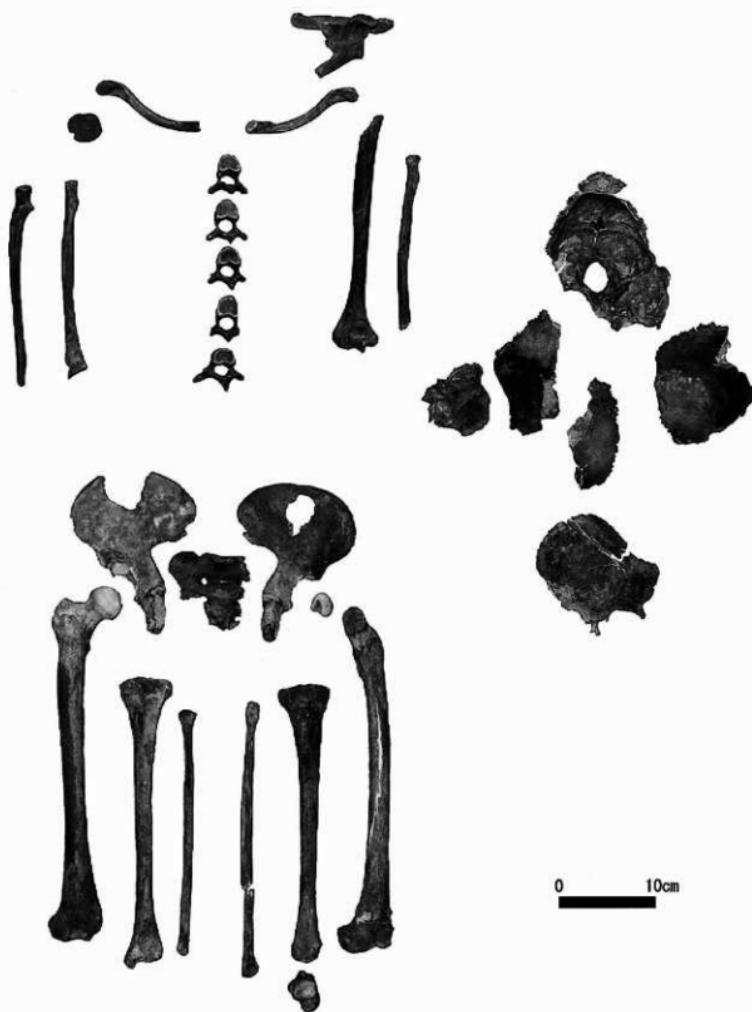
- 馬場 悠男, 1991. 人骨計測法. 人類学講座別巻1 人体計測法, II 人骨計測法. 雄山閣出版株式会社, 359p.
- 平本 嘉助, 1972. 繩文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化. 人類学雑誌, 80, 221~236.

表2 出土人骨一覧

遺 墓	性 別	年 齡	計 測 値 (mm)	推 定 身 長	遺 墓	性 別	年 齡	計 測 値 (mm)	推 定 身 長
No.11	不明	成年前半			No.76 (A)	不明	成年		
No.20 (A)	男性	熟年後半以降			No.76 (B)	不明	小児後半		
No.20 (B)	女性	成人			No.77	男性	老年		
No.21	男性	成人			No.78	不明	壯年		
No.21'	女性	老年			No.79	女性	熟年後半以降		
No.23	女性	壯年			No.82	女性	壯年後半	左大腿骨全長379	146.1cm
No.25	女性	壯年			No.83	女性	熟年後半以降		
No.27	不明	成人			No.88	女性	成年後半	左脛骨全長300±	144±cm
No.41	男性	壯年			No.89	不明	小児		
No.44	不明	成年前半			No.90	不明	小児後半~成年前半		
No.45	不明	成年~壯年前半			No.92	男性	壯年	右大腿骨全長381	149.0cm
No.51	不明	成人			No.93 (A)	女性	熟年後半以降		
No.53 (A)	男性	成年前半			No.93 (B)	女性?	成年後半		
No.53 (B)	女性	成年前半	左脛骨全長319	140.2cm	No.94	女性	壯年		
No.54	男性	老年			No.96	男性	老年		
No.55	女性	成年前半			No.97	男性?	成年後半	右脛骨全長332	156.0cm
No.56 (A)	不明	小児後半			No.98	女性	熟年以降?	右上腕骨全長298	152.2cm
No.56 (B)	不明	成年後半			No.99	不明	壯年		
No.58	女性?	熟年以降?			No.101	不明	15~17歳		
No.59 (A)	男性	熟年後半以降			No.102 (A)	男性	熟年後半	左大腿骨全長426	160.0cm
No.59 (B)	不明	小児後半?			No.102 (B)	不明	熟年以降		
No.62	女性	熟年			No.103 (A)	女性	老年		
No.63	不明	成人			No.103 (B)	男性?	成人		
No.64	不明	成年前半			No.104	男性	老年	左上腕骨全長283	153.0cm
No.65	男性	老年	左大腿骨全長413	156.8cm	No.105	男性	老年		
No.67 (A)	不明	熟年後半以降			No.106	不明	小児後半~成年前半		
No.67 (B)	不明	熟年			No.107	男性	壯年		
No.69	女性	成年			No.108	男性?	熟年後半以降		
No.71 (A)	女性	老年			No.109	男性	成年後半~熟年以降?		
No.71 (B)	不明	成人			No.110	不明	不明		
No.73 (A)	男性	熟年後半以降(老年?)	左脛骨全長306	150.2cm	No.111	不明	不明		
No.73 (B)	不明	小児後半			No.112	不明	壯年		
No.74 (A)	男性	成年~壯年前半			No.113	不明	不明		
No.74 (B)	不明	成人			No.114	男性	熟年後半以降		
No.75	不明	小児後半			No.115	女性	老年		

图版 1 出土人骨 (1)

• No. 053B 頭蓋・椎骨・上肢・下肢



圖版2 出土人骨 (2)

• No. 054 下頷骨・椎骨・上肢・下肢



圖版3 出土人骨 (3)

• No. 065 腦頭蓋



0 10cm

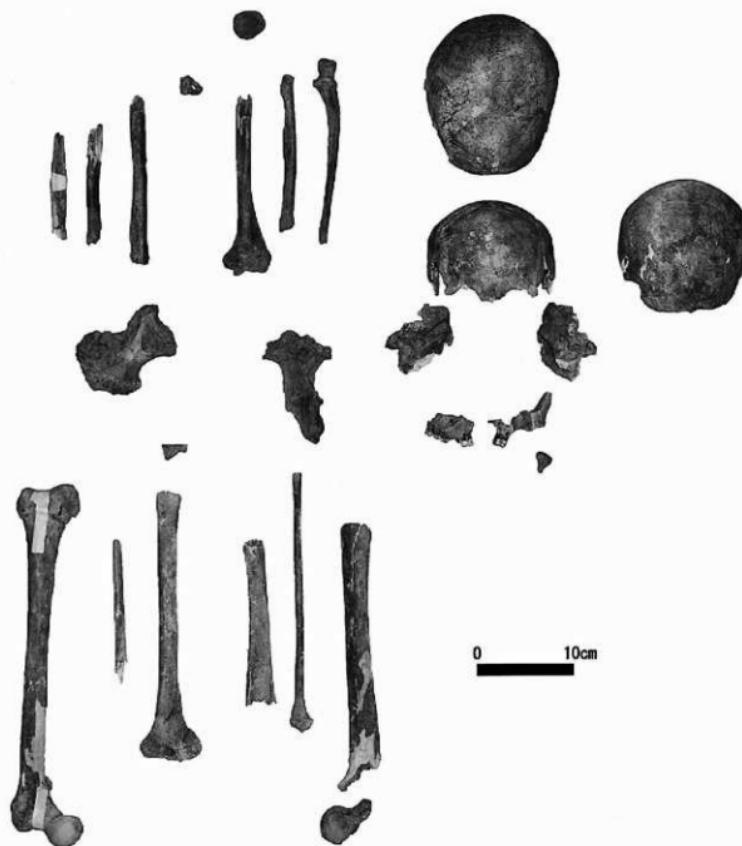
圖版 4 出土人骨 (4)

· No. 065 椎骨・上肢・下肢



图版 5 出土人骨 (5)

• No. 082 脑头盖・上肢・下肢



図版6 出土人骨 (6)

• No. 092 頭蓋



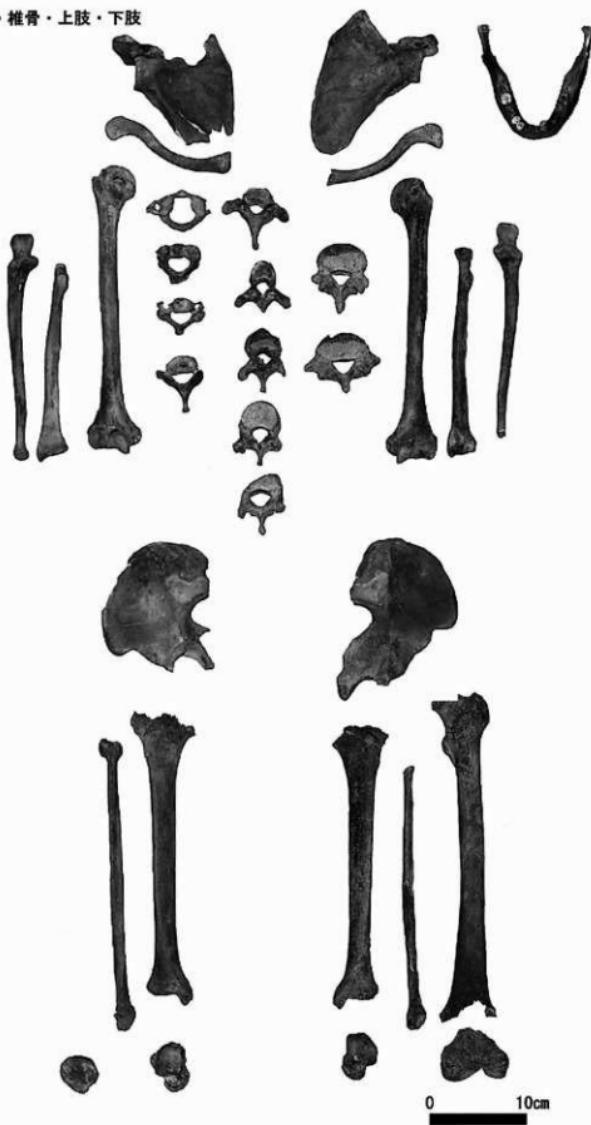
圖版7 出土人骨(7)

• No. 092 椎骨・上肢・下肢



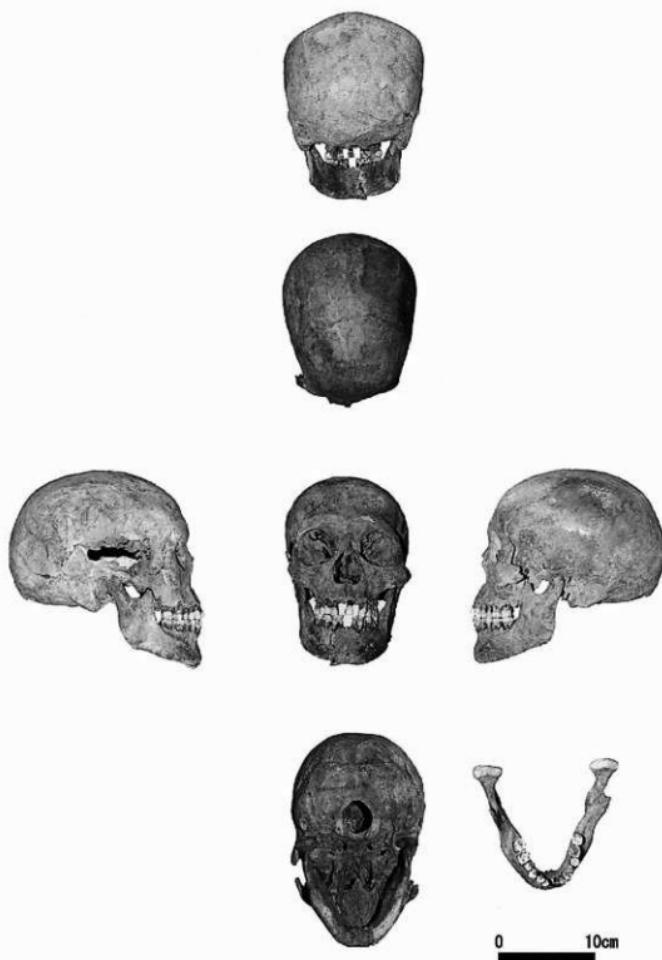
圖版8 出土人骨 (8)

· No. 098 下頸骨・椎骨・上肢・下肢



圖版9 出土人骨 (9)

・No. 102A 頭蓋



圖版 10 出土人骨 (10)

• No. 102A 椎骨・上肢・下肢



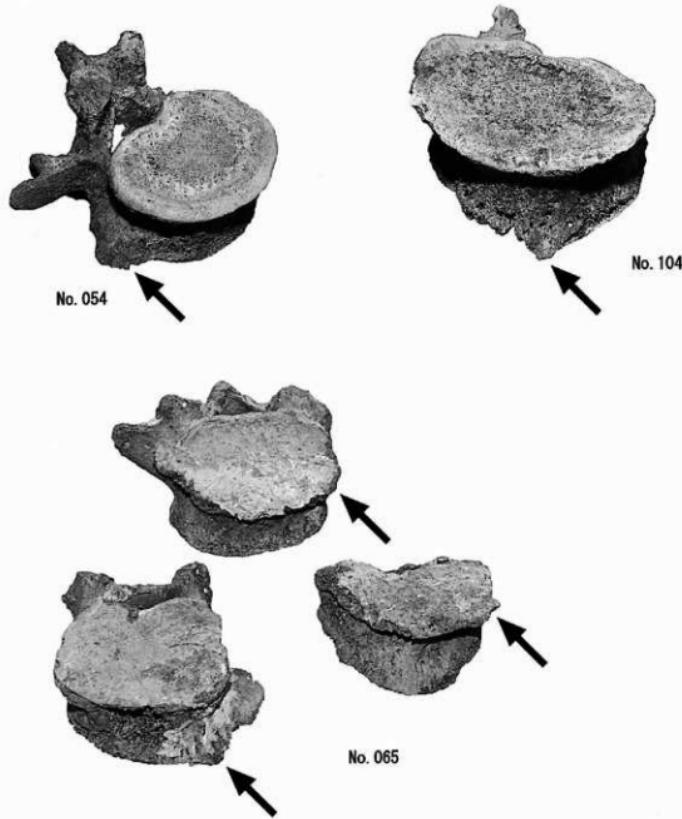
圖版 11 出土人骨 (11)

• No. 104 頭蓋・椎骨・上肢・下肢



圖版 12 出土人骨 (12)

· 变形性脊椎症



写真図版



遺跡全景 上層（南西方向から）



遺跡全景 上層（西方向から）



遺跡全景 下層（南西方向から）



遺跡全景 下層（北東方向から）



20号墓



22号墓



23号墓



24号墓



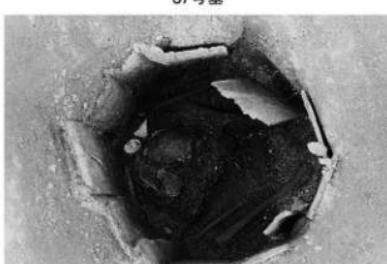
30号墓



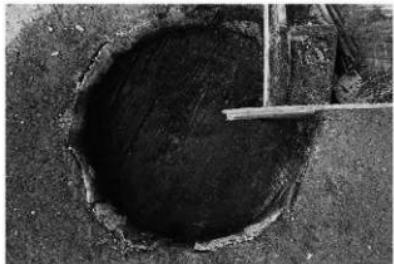
37号墓



38号墓



41号墓



46号墓



50号墓



53号墓



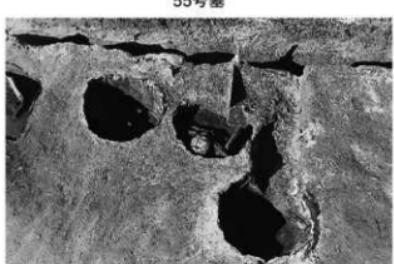
54号墓



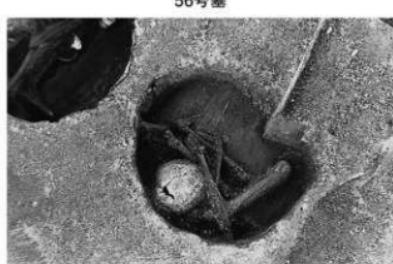
55号墓



56号墓



57号墓



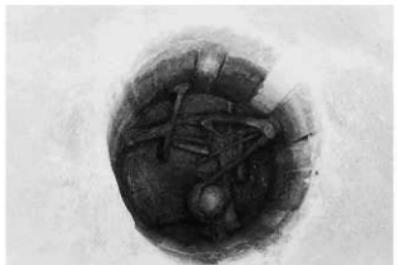
58号墓



59号墓



60·61号墓



62号墓



64·65号墓



65号墓



67号墓



68号墓



71号墓



73号墓



74号墓



75号墓



76号墓



77号墓



78号墓



79号墓



81号墓



82号墓



84号墓



86号墓



87号墓



88号墓



89号墓



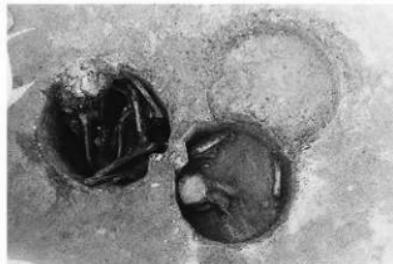
90号墓



91号墓



93号墓



95・96・99号墓



96号墓



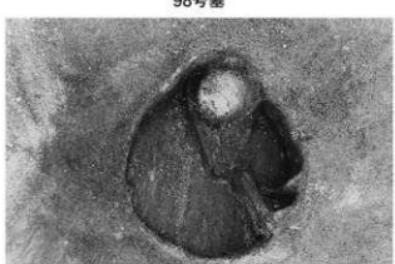
96・97号墓



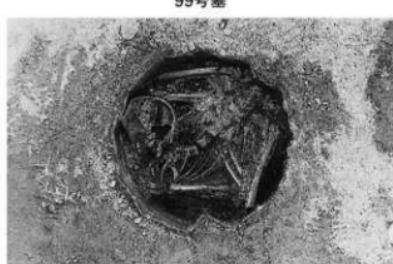
98号墓



99号墓



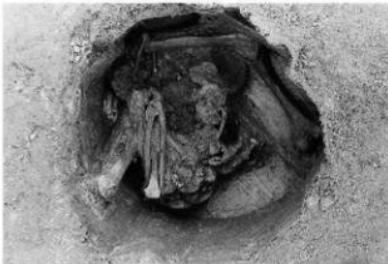
100号墓



101号墓



102号墓



103号墓



104号墓



105号墓



106号墓



107号墓



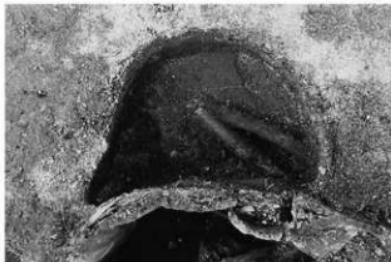
108号墓



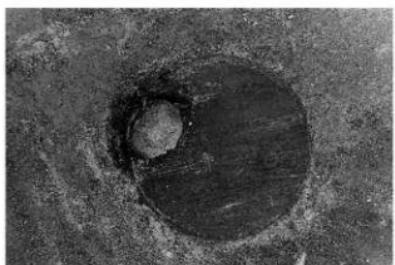
109号墓



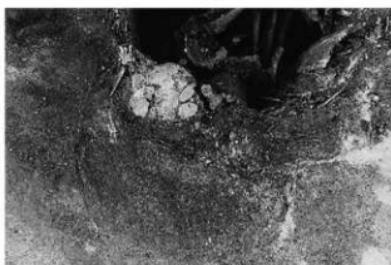
109・110号墓



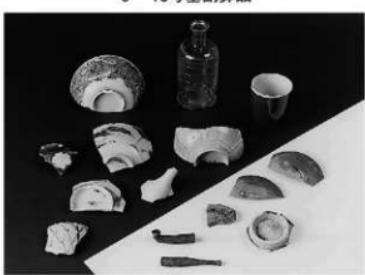
111号墓



114号墓



102・115号墓





21·22·23·25号墓副葬品



27号墓副葬品



28·31·32号墓副葬品



35号墓副葬品



37号墓副葬品



36·38号墓副葬品



39号墓副葬品



40·41号墓副葬品



43号墓副葬品



49·52号墓副葬品



54号墓副葬品



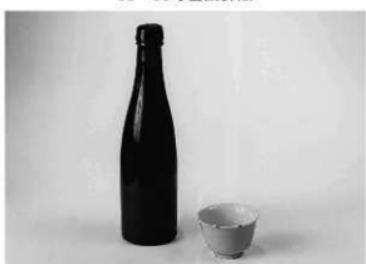
55·57号墓副葬品



58·59号墓副葬品



63号墓副葬品



64号墓副葬品



65号墓副葬品



68·69号墓副葬品



71号墓副葬品



73号墓副葬品



75号墓副葬品



76·77·78号墓副葬品



79号墓副葬品



80号墓副葬品



82号墓副葬品



83・84・86号墓副葬品



87号墓副葬品



88号墓副葬品



89号墓副葬品



90・91号墓副葬品



92・93号墓副葬品



34・94・96号墓副葬品



97号墓副葬品



98号墓副葬品



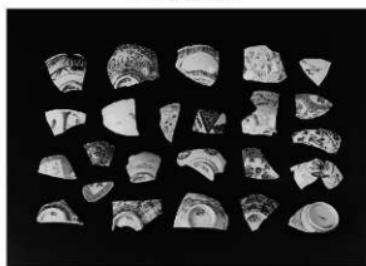
102·103号墓副葬品



104号墓副葬品



105·107·110号墓副葬品



北侧表土出土一括遗物



北侧表土出土一括遗物



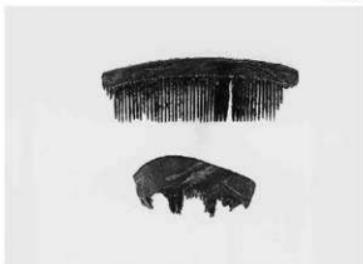
北侧表土出土一括遗物



北侧表土出土一括遗物



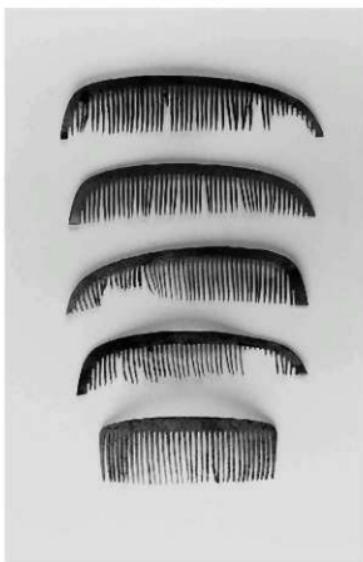
14号墓北側出土一括遺物（広東椀、陶器）



木製品 櫛



14号墓北側表土出土一括遺物



べっこう 櫛



14号墓北側表土出土一括遺物



下駄 48号墓副葬品



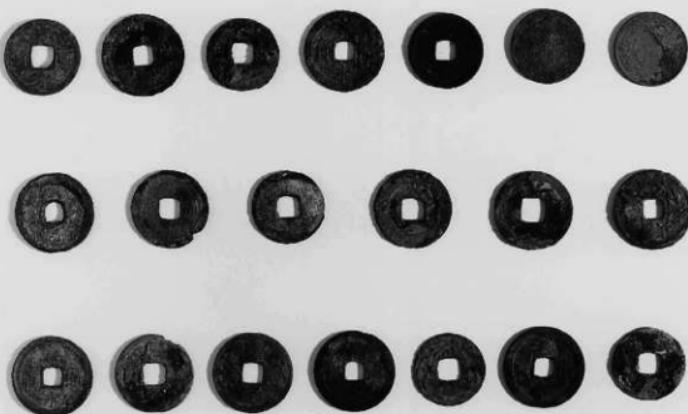
根付 27・73号墓副葬品



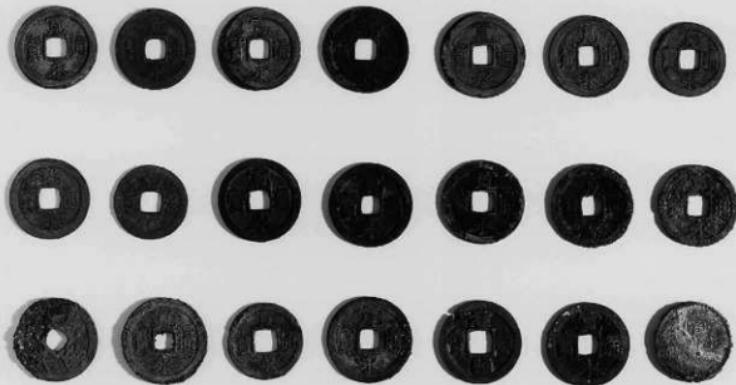
塔婆



墓石



副葬品・古銭



副葬品・古銭

報告書抄録

ふりがな	こいかわいせき
書名	小井川遺跡II
副書名	新山梨環状道路建設に關する発掘調査報告書
卷次	(全1冊)
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第241集
著者名	小林広和・猪股一弘
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部
発行日	2007年3月28日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小井川遺跡	山梨県 中央市 布施地内	19385		35° 36' 30"	138° 31' 18"	2004年12月6日～ 2005年3月24日	約340m ²	新山梨環 状道路建 設に關わ る発掘調 査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小井川遺跡	墓地	明治時代	墓 117	桶棺 66 木棺 41 方形木棺 7 不明 3	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第241集

2007年3月25日印刷

2007年3月28日発行

小井川遺跡II

-新山梨環状道路建設工事に伴う発掘調査報告書-

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県甲府市下曾根町923
TEL 055-266-3016

発行 山梨県教育委員会
山梨県土木部
印刷 株式会社 ヨネヤ